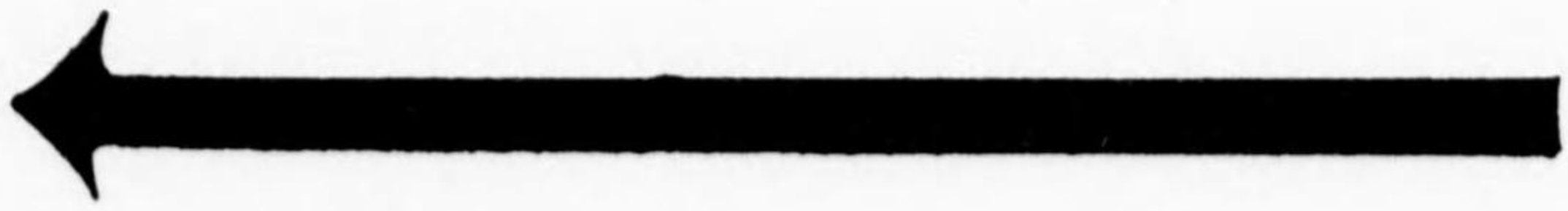
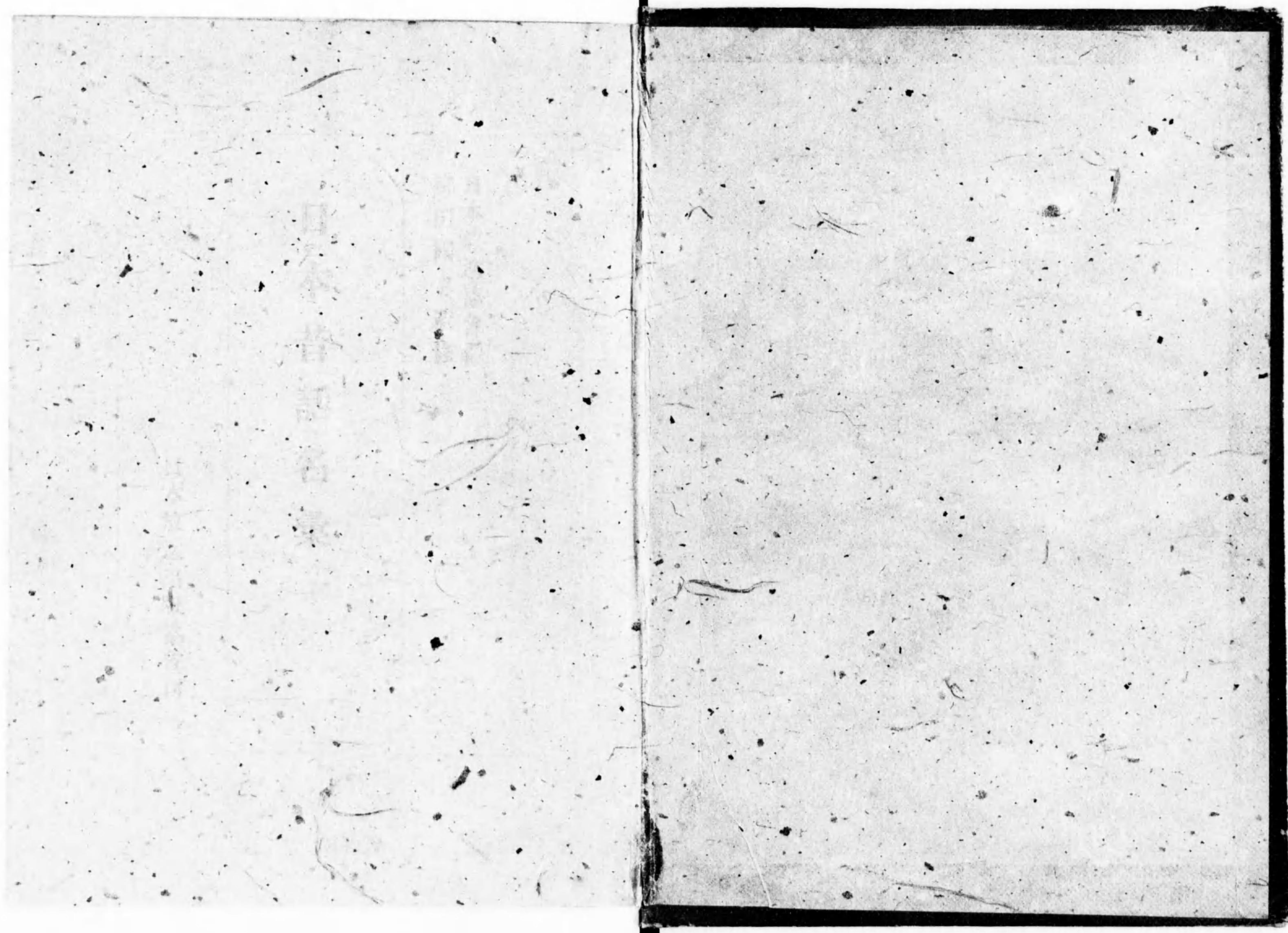




388
a
|

始





日本放送協會編
柳田國男監修

日本昔話名彙

日本放送出版協會刊

388
1



9965

序

人は古來、物語を欲する。物語の生誕は、その人々の先天的な欲求に因由する。我國に古くから傳はつてきた昔話のたくひも、その創造傳承の經過にはいろ／＼の系列があるであらうが、所詮われわれの祖先が、日々の生活の中にこれを求めたためであつたと言つて間違ひはなからう。

われわれは、物心のついた幼い時分から、數多の昔話をきかされてきた。祖母や母の口から、また遠國の縁者から、學校の先生達から、さらにいくつかの書籍の中からもこれを貪り讀んできた。記憶を辿れば、全く降る星の如く、數限りもない物語りの群列であり、盡きるを知らぬ昔話の重疊である。われわれは、いつまでも、曉暗のやうな仄暗い活氣の中に、幼い心の跳躍をふり返るのである。

心のふるさとも醫ふべき「昔話」の思ひ出！ それは世のすべての人々の胸に必ず湧き出づる人生の命の泉である。

それに、われわれは、世界の一人であると共に、また祖國日本の民族の一人でもある。この國の歴史と、この國の地勢と、この國の民俗とが、どのやうな契機と角度とから、民族のための幾多の物語りを編み出したことか。これこそは幾世代かに跨つて、流るゝ水の如く變轉流替する民族の生誕と、希望と、信仰と、そして進化する思想の姿とを

序

一

まざく／＼と映し出す何よりも忠實な證憑である。たゞこれらの證憑は、大空にぶち撒かれた星座の如く、散漫な多彩であり、亂雑な多元である。これらの源を探り、その個々の特徴と指標を究め、類型と異質の本體を突きとめて、そこにさまざまな視角から、生々發展の體系をつくり、據りどころある分類の劃線を、未然の世代に向つて刻することは、民族の文化にとつて、甚だ大きな事業である。

民俗學の權威柳田國男氏は夙にこの偉業に着眼され、過去數十年に亘つて、これの資料の蒐集に留意されてゐたのであるが、「國民の文化のため」を大きな旗印とする當協會も亦早くからこの事業の完成を冀求するに切なるものがあつた。この兩者の一致した熱意が、遂に日本の傳説と昔話についての特別なる研究と記録の作成を、當協會から柳田氏に委囑するに至らしめたのである。昭和十五年（當時の當協會々長小森七郎）のことである。爾來柳田氏は傘下の同志十餘氏及び全國の同好多數の協力を得て、それこそ血みどろの努力によりて、この劃期的な大業を一應完成された。かくして出來上つた「昔話」と「傳説」の内、まづここには「昔話」をとりあげ、これを世に發表する次第である。この機會に一言しておきたいのは、このやうな事業は固より個人の能力だけで爲し遂げ得られるものではなく、二人と得難い柳田氏を中心に、選ばれた民俗研究の學徒の總動員によつてはじめて今日の成果を贏ち得たものであるといふ事實であり、その半面又當協會が、放送そのものと直接の關連を持たないに拘らず、邦家文化のための高い立場から、永年かなりの經費を負擔しつゞけたことをも附記しておきたい。

本書、その書形一見貧寒の觀はあるが、内容はまさに金玉、わが民族に贈る頗る尊い文獻であることを斷言し得ら

れよう。ここに柳田氏とその協力者一同の勞に對し深甚の感謝をさしげたいと思ふ。

尙「傳説」のはうは、改めて「日本傳説名彙」として引續き公刊の運びになつてゐる。併せて愛讀されんことを切望する。

昭和二十二年十二月

社團法人 日本放送協會

會長 高野岩三郎

昔話のこと

柳田國男

この書物を利用する人の爲に簡単に、昔話研究の意義と、併せて將來研究に志す者の注意しなければならないことを述べて見ましょう。

日本の昔話採集はまだ三十餘年の歴史しか持つて居りません。恰度グリム兄弟のそれよりも丸一世紀遅れて居ます。併しそれを必ずしも不幸なることと思はぬのは、第一日本といふ國がつい近頃まで斯ういふ古風なものを、ともかくも持ち傳へて居てくれたといふ嬉しさ、次にはこの最近の百年間の研究がみな、我々の新しく物を考へる役に立つといふこと、それでゐる世界の何處でもまだ心付かずに居たものを、これからでも我々の力で提供することが出来るからであります。

中世以來日本の昔話が、偶然に記録に保存せられて居た例は幾つでもあります。第一に足利時代の半ばから傳はつ

て居る、お伽草子といふものゝ大部分が是であり、古く溯つては物語の親とまで言はれた竹取物語があります。この『竹取物語』は、當時傳承されて居た昔話の潤色であつたと、私などは思つて居ますが、それは偶然の書き留めであつて、是を考へて見ようとする人の蒐録では無かつたのであります。たしか明治四十三年に、私が『遠野物語』といふ書物を世に公けにした時に、その終りの所に遠野地方のムカシヨが二つほど載りました。之はその著者が、偶然に子供の時の記憶を持つて居ただけであつて、それを筆記した私までが、まだ此時には「昔話とは何ぞや」といふ事を考へて見ようと思へませんでした。所が、それから十数年の間にそちこちから非常に完全な形で、数多い昔話があるはれて来て、今では岩手縣は全國にも珍らしい昔話記録の豊かな所となつて居ります。さうして是を最初に紹介した佐々木君がまづ洗禮を受けました。今日の昔話の研究者の随一と言つていゝ關君などが、はじめは傳説に深い興味を持つて、それを公表するのに力を傾けて居たのでありますが、よく聞いてみると、この人のお母さんといふのが多くの昔話の傳承者であり、別にその村にはもう一人、お爺さんで型の變つた昔話を澤山記憶して居て、人に話したがつて居た人があつた、といふ事が判りましたが、關君は無意識の中にこの昔話の感化を受けて居たのであります。全體に傳説といふものと昔話とは、意義も違ひ方向も異なるものでありますが、妙に一方の大切に保存されて居る所では、他の一方に對する關心も深かつたやうであります。この二つのものゝ關係は、あらためて一ぺん、よく考へて見なければならぬ問題だと私は思つて居ます。

そのうちに色々珍らしい事實が発見せられました。すでに當時にも、並以上に昔話の好きな人がまれ／＼に、地方に散在して居るといふことが判つて來ました。文字に書き留めて残して置かうとはしないでも、さういふ人達の

長い一生の間には、お弟子とも謂ふべき人が二人か三人かは出來て、その流れは絶えずまた時々は大きく成長さへして居たのであります。愉快な一つの発見は、西國の豊岐島に吉野秀正といふ學者があつて、非常に綿密な島の地誌を著したので、私なども名を知つて居たのですが、この人の筆豆な書き留めの中に、驚くべく多量の昔話を集めたものがあつて、あの時代としては大きな一つの例外を示して居ります。是が機縁となつて、山口麻太郎などいふ人が昔話に心をひかれて、あの小さな島が西の方での昔話研究の一つの中心となつて居ります。さういふ實例はまだ他にも大分ありさうな豫感が、私たちにも抱かれました。たとへば、三河に旅した人が、偶然に古本屋から見つけて來た、小さな一冊の繪本と題する寫本は、十ばかりもの昔話を一言の註釋も附けず、繪に描いたものでありましたが、それを見てもあゝあの話と解つて、面白がる人が當時すであつたのですから、之も亦楽しい例外でありました。それで私達はどうも自然の成行きに任せて置いてはならぬといふ氣が起つて、そろ／＼全国的な採集を始めようとしたのであります。

その最初の仕事を授けたのは、『旅と傳説』といふ雑誌でありました。是は二回に互つて昔話特輯號を出したのであります。これで始めて知つたことは、全國どの方向を向いても、何處かに小さな中心地があり、何處かに話に興味をもつて居る人があつて、しかもその記憶して居る昔話には、見損ふことの出來ない一致があるといふことでありました。昔話に四國の話とか、北陸の話とかいふ特徴は無いのであります。そこでこの二冊に集録された昔話によつて、全国的蒐集の興味を抱かしめられ、更に昔話といふものは、型を標準として研究すべきものであるといふことが判つて來ました。もつともその暗示を與へられた書物は、外國のものにも少しづつありました。アアルネ・トムブソ

ンの綿密な分類の出たのこそ後のことではありますが、例へば英國民俗學協會から出版したミス・パインの書物の中には昔話の型がたしか七十二種類ありまして、その中には彼地では有名でも、日本ではさうでないものが若干はありましたが、大體は似て居て、日本と離れた地にも似よりの型を探せば拾へるといふことが判つて、我々の企てを激勵しました。今でも自分の推算は狂つては居ない様ですが、極小さな笑話の類を除けば、英國より少しは多いが、日本の昔話の主な型はまづ百内外と謂ふことは、間違ひないと思ひます。それ以外のものは痕跡として残つたものくらゐで、さう確かな事を請合ふわけには行かないのであります。

この意外なる現實に勵まされて、私は更に二つの計畫を立てました。その一つは昔話採集手帖の發行で、これは小さな割合に骨の折れた仕事でありました。百と限られた數の中で、著名な昔話を選び、その實例を一つづつ擧げて名をつけました。そしてその一方の頁は白紙のまゝ残して採集實例を記入する様にしましたから、話の筋も詳しくあげると長くなつて邪魔になるので、要點を記録するに止めました。是が今度の『日本昔話名彙』の基礎となつて居ります。そしてこの手帖のはじめには、少し大膽すぎたかも知れませんが、まだ昔話に興味の浅い人々に「昔話とは何ぞや」といふこと、蒐集の意義について説いてみました。此仕事は或團體の補助金で行ひましたので、手帖は殆ど全部知人にわけてしまつて、現在では僅か二三冊残つて居るばかりです。困つたことに標本として擧げた實例は、出来るだけ簡略に筋だけ書いたのですが、それでも讀物として面白いので、各自所蔵してしまつて、新しく話の記入されたものが戻つて來るといふ、最初の計畫ははづれて、一冊も返つては來ませんでした。返しこそはしませんでしたが、この手帖を持つた人々が昔話を好むやうになつたことは争へないでしょう。旅に出て極片田舎の農家などに泊つ

た夜、爐邊の平和な暖かな光の中で、この手帖を取出して讀んできかせたり、或は見せなどとすると、その座の人々の中に一種の活氣が感じられて、顔を見合せて笑ひ、又知つて居る話を語り出す者さへ出來て、急に心持はほぐれ、和やかな空氣になつてゆく、斯んなことは民俗學徒のみが味はへる幸福ともいふべきもので、單に昔話に限らず、他の部門でも同じことが謂へるのですが、特に昔話採集の際に多いといふことは、私達から謂ふと同情せずには居られないのであります。といふのは、以前の豊漁村の淋しい生活には、祭や節供の日を除いては昔話以外に平生の心を慰めるものが無かつたといふことが、間接に判るからであります。この研究によつて凡人大衆の生活の歴史があとづけられるといふ事を知り、更に自分等の樂しみ慰めと謂ふに止まらず、一國の事業とすることを考へて、『昔話研究』といふ雑誌を發刊することにしました。これは前からのかゝり合ひで、『旅と傳説』の萩原氏が一ヶ年だけ出し、その後他の本屋で引受けて發行しましたが、その店の他の事業との混亂などの爲に、二年で後がつかす終つてしまひました。この雑誌などには讀者の側から、原稿を送つて來なければ載せないのでから、是が出てゐる間は蒐集の効は奏せられるわけですが、中にはウソ話やこしらへ話があつて、選擇には骨を折りました。ともかくも斯ういふものを續けてさへ居れば、國內に保存せられて居る昔話の一部分だけは集めることは出來たのですが、嚴密に謂へば雑誌といふものは、場所に依つて行く所と行かない所があり、また是を他の目的に使ふ人もあつて、系統立つた採集といふことは出來ません。若し事情さへ許せば、他の方法を採る事も考へたのですが、それがむづかしい事はかりでした。といふのは昔話を知つて居る人は少ないので、熱心な傳承者によつゝかるのは、恰度盲探しの様なまだるっこい仕事であります。例へば静岡縣の師範學校で、『静岡縣傳説昔話集』といふ書物を出して居ますが、注意深く見て行きま

すと同じ話でも人によつて語り方が違ふ中に、伊豆に姉妹二人と、遠州だつたかに一人印象の深いいき／＼した報告を寄せて居る女生徒がありました。さういふ人の母なり祖母なりには、よい傳承者の在つた事は疑ひも無いのですが、その時直ちに出かけて採集をすればよいのですが、さうも行かない色々の事情にさまたげられて、時移り人は過ぎてしまひます。自分等の熱心は未だかのグリム兄弟に及ばなかつたとも謂へませう。しかしこの儘にして置けないといふ氣持は常に強くて、少しづつ積極的な行動はして居ました。それと目ざした人に手紙を出したり、啓明會からの補助金に依つて少しづつ採集に歩いたり致しました。この結果として數冊の昔話集が出ましたが、中でも佐渡と飯島とは、何の手がかりも無い所に行つて、相應な成績を挙げ得た例であります。川越の昔話集は、土地に熱心な人が居て出来たものであります。此等と比較して見ますと同じ一つの話でも土地によつて變つて居ますし、その變り方も奇抜でありました。又二百里三百里と隔たつて、到底交通もあるまいと思はれる所に同じ話が在つたりして、研究の興味は深くなるばかりでありました。この昔話研究の興味をもう少し廣めようとしたのが、第四の『全國昔話記録』發刊の事業であります。恰も戦時に當り讀物の乏しい、けはしかつた時代であつた爲に、豫想以上の賣れ行きを示して、戦争の終りまでに十三冊が刊行され、まだ出せば出し得るものが、私の手許にも大分残つて居ます。早く續けねばならないと思つて居ります。

この採集出版の事業の間、私が心づいて非常に氣丈夫に思つて居ることは、概して昔話は老人、殊に女の年寄が持つて居て、此人々を最後として傳承の鎖は断たれてしまふものゝ様に思つて居ましたが、人が昔話を喜ぶ心といふものは若い時に萌すのであつて、昔話に對する理解とか同情とかいふものを持つて居るのは、口にこそ出しません、

年頃の人達にも生活にいそがしい主婦達にもあるといふところが経験せられました。けれども今の社會にはもう一段と人の心を動かすものが、特に戦後に多くなつて来て、それが人々の注意力を集めるために、素質はよいものを持つて居ても、外部からの影響が大きいため記憶を粗末にし、いはゞおさらひが少なくなるので、大體の傾向としては減びる方に傾いてゐるのは事實であつて、今日では絶滅の危険が無いとは申せません。又それと同時にこの現實のほげしい時代に、何處かに休息を求めようとする氣持もそこちちに有ると思はれますから、再建の一つのたてとして、この書の世に出ることを我々が先づ歡迎する理由であります。

歴史の學問の一般的な傾向で、必ずしも昔話の研究に限つたことではありませんが、初めの頃には起原論に重きを置く傾きがありました。昔話はフィクションだけれども、最初から文藝として是を楽しんだものではあるまい、斯ういふものを創作する文化能力の無い、極めて開けない野蠻と謂はれる人々の間にも、形の似たものゝ有るといふ事實は人間の藝術心よりもつと古い、基礎になるものがある故で、神話がその種子では無いかといふ疑問が、期せずして國の學者の間に起つたのであります。神話といふ言葉は哲學的・神學的に使はれて居ますので、私等は努めて避けて使はぬ様にしてゐますが、信仰が無ければとても信じられない話を、現實として信じて語り聴かうとするのが神話であつて、現在でも神話學などいふ人はその中に昔話の起原を見ようとして居ます。間違ひは無いかも知れませんが、直ちにさう謂ひ切ることは六つかしいと思ひます。是を證明するには信仰は既に變化して居るのだから無理な事でありましょう。昔話の中に我々祖先の古い信仰を見出さうとすることは愉しい事ではありますが、今日の如く證明が學問の基礎をなす時代には、これは甚だ危げでむしろ學問を道樂にし玩具にする惧れがあります。見過してはならない

問題ですが、これだけで昔話を研究しようとするのはやゝ頼りないことでもあり、又すゝめることも出来ません。ところが今日となると、まだそれ以外に幾つかの學問上の楽しみを拾ふことが出来ます。國際的に謂へば、表面上縁の無い民族の間に、争へない一致を示して居るといふことが其一つ、グリム兄弟の採集した話の中に日本でそっくり同じ形を持ったもの、或は似よつたものがある。五十位有るといふ人もあります。この中若干のもの、例へば「豆と炭と藁しべ」「猫と鼠」「手無し娘」「鹽吹臼」などの話は、彼方から日本に輸入したといふ人も有りますが、それは南蠻貿易が始まつて後といふ事が明確に分るのならばともかく、それ以前から傳はつたものもあるでしょうし、又新しい交通の影響の到底及びさうも無い地方に有る話などは、輕々しく輸入などと謂ふことは出来ません。私達が「糠福米福」と呼んで居る糞子話などは、たしかに西洋交通の以前から有つたものであります。また證據も無いのに印度から支那を経て、渡來したものの様にいふ印度起原説といふものもあります。想像説としては興味がありますが、確かにさうだと決めるには未だ距離があります。佛典のすみんぐまでを讀破して居る様な人が、農民漁夫の間に話の運搬をして居たとは考へられず、説教の間に語り傳へたとしても、その人々の必要とした話の數と謂ふものは限られて居ります。支那を中間として考へても、記録の年代の前後ばかりで、前の方から後の方へ移入されたことを見ることは無理であります。同じ話が異つた民族の間に、偶然に何の關係も無く存在することは想像し難い所ではありますが、何故に斯うなつたものでしょうか。或は歴史に残らぬ時代に於て、民族の末端どうしに交渉があつたのでは無いかとも考へられますが、言語の垣根の高さを思へばそれも亦無理の多い話であります。しかし昔話は比較すればする程、民族間の一致は著しく、やはりいつの時代かに、斯んな昔話の様なものをさへ運ぶ親しい交通が、我々の氣付かぬ所

に行はれて居たかも知れないといふことに歸着するのですが、もしさういふ事實が假に有つたとすれば、我々の世界文化觀は變らねばなりません。説話の運搬は我一國の中でさへも奇蹟で、東は奥州の果から南は沖繩の島に至るこの間を持ち運ぶことがすでに困難な事實であります。戦亂などの他に國內民衆の接觸が若し行はれて居たとしても、用さへすめば急いで歸つて來る程の交通に過ぎなかつたのですから、これだけ親しい昔話の流通があること、それ自身が珍らしい過去文化と謂はなければなりません。何事もまづ手近い所から考へて行かうとして居る我々は、この問題に對しても、どんな人々がどの様な方法で運んだかといふことを研究するのですが、座頭や巫女、旅藝人などが持ち歩いたのは疑ひの無い事實であります。昔話の傳承にも二通りありまして、一つは此等の旅して歩く人々が持ち傳へたものですが、この方には臭味ともいふべきものがあつてすぐ判ります。もう一つは家庭内での傳承で、祖父母から孫子に傳へられる話は長い間には家庭化してしまふでしょうが、きめは細かくなつて、先のものに比較しますと恰も織物の機械織と手織との差の様に、二つの間には大きなちがひが出來ました。即ち利用者の側からの選擇が働いて居るのであります。

この問題を考へる爲に、私は今一つ新しい目安を設けて居ります。即ち話手の敏感で聽手の要望に應へようとするので、昔話の聽手が子供の時には話はおどけなく、山の中舟の上などで男の大人ばかりを相手にするには、あくどく下品なものに墮して行く様に、需要者側の希望が當然にあらはれて來るのであります。私は是を指して讀者の文藝能力といふ言葉を使つて居ますが、昔話の場合などは語りの一回々々に變へて行くことも出來るのであります。この問題を考への中に容れずに、たゞ同じ國だから地続きだからと、大ざつばなことは謂へないのであります。

是を要するに大は各國の間に、小は一國の中に分布する昔話が、聽手に依つて姿を變へて行くそのプロセスといふもの自身が、昔話の起原や傳播の問題とは離れて、重要な研究題目となるでしょう。今日の文學にしても、作家は勝手に筋を運んで居る様に見えますが、その大きな潮流は、讀者大衆の喜びさうな所へと流れて行く様なもので、昔話は不定の期間ではありますが、過去千年間の一つの目標として、話の内容の問題とは別に、大きな文化財として、残されるべきものでなければなりません。今日私共の立場としては、せめて何年何月頃に、何處の地方で、幾歲位の人に依つて斯く語られて居たといふことだけは、正確に傳へる様にしたと思ひます。故に此の書物の中には、ちよつと人の目に付かない用意が加へられて居ります。例へば國外のものに似て居るといふ點にのみ心をつけるならば、「糠福米福」と呼ぶよりシンドレラと謂つた方が印象は深いのですが、誰かど何處かで記憶し使つてゐた名をつけて置いて、この話の行末がどうなるかを、見届けようとして居るのであります。名付けるにしても、歐羅巴のル・モー・ル・ルコンネツサン（死人感謝譚）或はシンギング・パウ（歌ふ骸骨）などといふ話と似た日本のものには、歌はないものもありますが、假に「歌ひ骸骨」といふ名を選びました。「鼠經」といふ一群の話は日本の各地に有る面白い話ですが、「鼠經」といふ名を以て呼んでゐるのは九州の一部にしかありませんが、よい名なので採用して居ます。話の型は約百と申しましたが、またこの他にも取残されて居るものが多くあります。私共が一番興味を持つて期待してゐることは、何處かの隅で消えかゝつてゐる話を拾ひ出して、もう一度世の光にあてゝ見たいのであります。此書物を利用される人々は、またこの中に出てゐない、題名も型も變つて居る話を見つけ出して、編輯者たちに少しでも鼻をあかせる様な氣持になつて欲しい。私達の足はまだ國の隅々まで届いては居りません。さうして此書の發刊

の副産物として、例へばコウ次郎の様な話が、もつと整つた美しい形で、何處かに残つて居るといふことを期待したいのであります。傳へられた瓜子姫の物語の末が、いづれも陰慘で暗い中に、たつた一つ仙北の奥に錦長者の名を以て傳はつて居たのは、繪の様なるはしい結末をもつたものであります。もしも此書が機縁となつて、さういふものが發見された場合には、説話研究の上の効績のみに止まらず、それに依つて日本の昔話は再び大切な國の紀念物となるでしょう。今の時代としてははかないさういふ希望を抱きながら、この書の世に出て行くのを見送つてゐるのであります。

（昭和二十二年十月）

目次

序

昔話のこと

完形昔話

誕生と奇瑞

桃太郎・力太郎・瓜子姫子・錦長者・竹の子童子・子育て
幽霊・鴛の捨子・一寸法師・申し子話

不思議な成長

蛇息子・田螺長者・蛙聲入・姑蟻聲
幸福なる婚姻

隣の寝太郎・牛の嫁入・山田白瀧・難題聲・天人女房・繪
姿女房・鶴女房・鴨女房・山鳥女房・鳥女房・狐女房・蛤
女房・魚女房・龍宮女房・蛇女房・蛙女房・蛇聲入・鬼聲入
河童聲入・猿聲入

まゝの子の話

糠福米福・紅血缺血・皿々山・姥皮・火焚き娘・灰坊太郎
糞子の椎拾ひ・底無し袋・お月お星・日まさり川・糞子の

目次

井戸掘・千把童・糞子花・糞母の化物・糞子と笛・父の土
産・手無し娘

兄弟の優劣

兄弟話・弟出世・姉と弟・三人兄弟

財寶發見

五郎の缺碗・寶物の力・八石山・取付く引付く・ウバリヨ
ン・天福地福・蛇と金の玉・財寶發見・黄金の瓶・壺中の
蛇・人が見たら蛙になれ・味噌買橋・夢見小僧・夢の蜂・
薬しべ長者・蜂出世・蜻蛉長者・炭焼長者・芋掘長者・大
歳の火・大歳の客・笠地藏・弘法機・寶手拭・若返り水・
黄金の鉈・龍宮童子・黄金小犬・忽ち小僧・龍宮入り・打
出小籠・團吹臼

厄難克服

鬼むかし・なら梨探り・さやずりふくべ・人影花・鬼の子
小綱・美女奪還・鬼ヶ島脱出・七ツの釜・千里の靴・水の
神の文使ひ・猿神退治・旅人馬・糞糞城・三枚のお札・鬼
の家の便所・鬼を一口・耳切團一・鬼とにらみくら・天道
さん金の綱・牛方山姥・食はず女房・口無し女房・妹は鬼
千四狼・猫と茶釜の蓋・猫山・猫岳猫島・寶化物・山梨の
権・人食ひ菌・山寺の権・一ツ家の権

動物の援助

聴耳・金の扇銀の扇・尻鳴篋・文福茶釜・狐遊女・動物報
恩・犬と猫と指輪・舌切雀・腰折雀・コウ次郎・猫權家・

一

猫寺・見るなの座敷・狼の一文銭・鼠の浄土・地藏浄土・團子浄土・花咲爺・竹伐爺・鳥吞爺・狼地藏・窟取爺

言葉の力……………一四一
化物問答・蟹問答・灰の發句・大工と鬼六・子守唄内通・ズイトン坊

智慧のはたらき……………一四五

狐退治・叭狐・片目がひ・似せ本尊・敗北の承認・孝行阪・化けくらべ・八化け頭巾・賣物交換・隠れ義笠・鳥團扇・何が一番怖い・田野久・賢と淵・蛸の足の八本目・大木の秘密・さとのわつば・姥棄山・灰糺千束・女房の智慧・盗人女房・盗賊の賭・智懸あり殿・俵薬師・鏡垂れ馬・金の茄子・日輪の下し子・話千兩・二反の白・狸の糞・名裁判・赤米と子供・祝ひ直し・座頭の頓智・判じもの・和尚と小僧

派生昔話

因縁話……………一八五

化物話……………一九〇

ちい／＼小袴・化物退治・餅と白石・婆の三つ疣・蜘蛛の糸・小間物やと狸・狐退治の失敗・法印と狐・狐狸の仇返し・二度の威嚇・上下二つの口・猫と南瓜・猫の秘密・猫

笑話

の淨瑠璃・物食ふ鼠……………二〇〇

一大話……………二〇〇

天上胡瓜・豆子話・鼠經・へやの起り・誰なら屁・屁放り話・見透しの六平・高名の鼻利き・運の良い俄武士・雀とり話・まのよい獵師・源五郎の天昇り・海老と大鳥・力くらべ・騙しあひ・術くらべ・どうもかうも・テンが競べ・大もの競べ・長命競べ・嘘話・無精くらべ・無言くらべ・長者の寶比べ・吝さ比べ・こんにやく問答・三尺草鞋・三人泣き・醫者籠・三人片輪・癖をやめる賭・長い名の子供・土鼠の掣取・嘉兵衛爺・氣にかけ爺さん

二 眞似そこなひ……………二〇六

旅學問(朱椀朱折敷)・粗相惣兵衛・言ひそこなひ・酒かす食ひ・唄があまる・茶栗柿・節古金・くづの話

鳥獸草木譚

三 おろか村話……………二〇六

段々の教訓・愚か聲・口傳聲・糸引き聲・團子聲・餅は化物・瓶と小石・結付け枕・三人聲・愚か嫁・嫁に行きたい話・愚か村話・風呂場の餅・長頭をまはせ・引張屏風・團子・耳掛け素麺・振り米・正月知らず・雉子鴉・座頭の卵・かずの子・松山鏡

母・獵師と犬・雲雀と借金・雲雀牛飼・水懸鳥・柿十と十一・鳶不孝・雨蛙不孝・鳩不孝・水乞鳥・鳩と親子・鼻紺屋・行々子と草履・鷓鴣は鳥の王・蚯蚓と蛇と眼交換・かせかけ蚯蚓・炭の恩・雁と龜・雀酒屋・蜥蜴の尾・鼠と蚤・蚤蚊の起り・煙草の起り・海月骨なし・土鼠と墓・炭と薬しべと豆・大根と人參と牛蒡・古屋の漏り・動物の援助・動物と人・狼と爺・動物競争・狐と獅子と虎・動物葛藤・狼と貝・狸の占ひ・拾ひ物分配・鷺は三文鳩八文・藪と大豆・猫と鼠・狐と魚狗・尻尾の釣・狸と狼・狼と蟹と柿・餅争ひ・狼と蟹と餅・狼と雉の寄合田・鼠と鼯の寄合田・猿蟹合戦(蟹むかし)・蟹の仇討・雀話(雀仇討)・からかち山・狼の膾・兎の奸計

其他(昔話と傳説の間をゆくもの)……………二九五

百合若大臣・産女の禮物・長柄の人柱・阿曾沼の鴛鴦・蚕神と馬・人魚の食ひそこね・石像の眼に血が流れる日・物言ふ魚・小蛇の成長する話・鱧の骸骨を蹴たら・鱧に影を吞まれる・長崎の魚石

昔話の魅力……………三〇三

果てなし話・うそ昔・昔や剝けた・話の三番叟・畫むかし

昔話の名稱・發端・結語など……………三〇六

むかし・とんとむかし・ざつと昔・さる昔・げなげなばな

資料の解説

目次中傍線あるものは百の主な型を示し他は派生せるもの

し・ものがたり・早物語・秀句咄・佛舞・夜話・年取り話・連歌咄・狂歌咄・いもじ咄・子守話・うそとき・をどけ話の主人公・昔話の始の句・昔話の結句・そりばつかり・とつびんばらり・がつさとうさ・とん・こん限いのむかあし昔こつばり・もうすべつたり釜の蓋・語つても語らいでも候・それでもよつびりきのこめし・續き候・しやみしやつきり・いちご榮えた・昔話の合槌の言葉

完
形
昔
話

裝
幀
恩
地
孝
四
郎

誕生と奇瑞

桃太郎

父と母とが花見に行つて辨當を食べようとやすんで居ると、母の腰の所へ桃の實が轉がつて來た。母は拾つてふところに入れ、家に歸り絹にくるんで寢床に入れて置くと、桃が割れて中から小兒が生れた。桃から生れたから、桃の子太郎と名づけた。桃の子太郎は父母が島に出てゐる間家に留守して學問をして居た。すると背戸の柿の木で鴉が地獄から手紙をもつて來たと啼く。鬼からの手紙には日本一の黍團子を拵へて持つて來て呉れと書いてある。桃の子太郎は父母に團子を拵へて貰つて、持つて地獄に行く。地獄の門を叩くと鬼が出て來て、「日本一の黍團子を一つ御尤も」と云つた。分けてやると鬼共はそれを食うて酔つて寢てしまふ。桃の子太郎は大急ぎで地獄のお姫様を車にのせて曳き出した。鬼共は眼をさまして火車にのつて追かけたが、その時はもう海の中に居て火車ではかなはなかつた。

桃の子太郎はとう／＼お姫様を家につれて來た。その事がお上に聞えて大變なお金を貰ひ、桃の子太郎は長者になり家も榮えた。

誕生と奇瑞

青森縣

桃が箱に入つて流れて來た以外は標準のまゝ。

八戸

童子の名は栗コタンゴ。山で拾つた栗の實が七日目に赤坊となつてゐる。後半脱落。

岩手縣 (例出)

秋田縣 仙北郡

この地方では「股内太郎」といふ。雉・猿・犬をつれて鬼が島へ攻入ること。

福島縣

東京都 北多摩郡

結末は猿蟹合戦の如し。

石川縣

桃太郎異話・難題雑話・力太郎話を付す。

福井縣 坂井郡

桃を白の上ののせて置くと中から聲がして割つて呉れといふ。

この話は破片か。

山梨縣 西八代郡

二話あり。この地方は、桃が手箱の中に入つて流れて來る。前者

— 紫波郡昔話集 —

津輕口碑集 一二

昔研 二ノ七八

紫波郡昔話集 一三二

角館民俗資料 三九

磐城昔話集 一九九

昔研 二ノ四八

江沼郡昔話集 一〇五

昔研 一ノ二九

續甲斐昔話集 二二四・二三〇

はなかに柿が入つて居てその種をまき、後者は猿蟹合戦の話につ

- 長野縣 小縣郡民譚集 一四七
- 岐阜縣 吉城郡 昔研 二ノ四五七
- 鳥根縣 隱岐 昔研 一ノ三二六

「あねさんとあまんじやく」

流れて来るのは桃。後半は瓜子姫話となる。

瓜姫との中間を行くものにて珍重すべし。

- 廣島縣 安佐郡 安藝國昔話集 五六

變例なり。破片か。やゝ物草太郎に近し。

- 高知縣 旅傳 五ノ九五六

- 「桃栗小太郎」 昔研 二ノ一三一

愛媛縣 北宇和郡

鬼退治の家來は石臼・針・馬糞など。

- 福岡縣 企救郡 福岡縣昔話集 一五五

これは東京にて聞くものと同じ、本よりつくつたのだらう。

- 長崎縣 天草島民俗誌 八三

婆が川で拾ふのは美しいペンタ人形。戸棚へ入れて置くと夜泣く

ので抱いて寝るとそれは川童であつた。

- 同縣 五島民俗圖誌 二四六

「栗姫」

栗の中より生れた子で父が病で鶯の卵をほしがるので取りに行

く。話は大分こわれてゐる。

- 鹿兒島縣 薩摩郡 昔研 一ノ三六六

「蛇報恩」

力太郎

不精な爺と婆とが身體の垢で人形を拵へ、コンピ太郎と名づけて育てる。大食ひでずん／＼大きくなり、百貫の金棒をつくつて貫つて力業の修業に出かけた。途中御堂を背負つた御堂コ背負ひ、石を碎いて居た石コ太郎と力競べをして二人を家來にする。さうして或城下町に行くときと豊間だといふのに皆戸をしめて人影もなく町一番の長者らしい館に美しい娘が一人で泣いて居る。わけを聞くとき月の朔日には化物が出て来て娘を一人づつ取つて行くが、今度は自分の番だから泣いてゐるといふのである。それではそれを退治してやらうとコンピ太郎は娘を唐櫃に入れ、御堂コ背負ひ、石コ太郎と共に番をして居た。

夜になると化物が出て来て忽ちのうちに御堂コ背負ひも石コ太

郎も吞まれてしまつた。コンピ太郎は百貫匁の鐵棒を持つてかゝつて行くと棒は真中からねぢられてしまつたので、取組み合つて化物の急所をついた。すると左右の鼻から御堂コ背負ひと石コ太郎を吹き出して死んでしまつた。家の人達も大喜びで三人を娘達の聲とした。コンピ太郎も爺婆を引取つて安樂に暮した。

——岩手縣和賀郡——

- 青森縣 八戸 昔研 二ノ七八

桃太郎の項参照

- 岩手縣 稗貫郡 昔研 一ノ二一六

- 和賀郡 〔例出〕 昔研 二ノ一三七

- 江刺郡 聽耳草紙 八〇

「三人の大力男」

- 石川縣 江沼郡昔話集 一〇五

桃太郎の項参照

（参考）

- 朝鮮民譚集 二五八

瓜子姫子

爺と婆とがあつた。爺は山へ薪を伐りに、婆は川へ洗濯に行く、

誕生と奇瑞

——出雲——

- 青森縣 津輕昔コ集 九九

- 岩手縣 九戸郡誌 四八二

「オリヒメ子」又は「ウリヒメコ」

發端無く機織りより始まる。親は母親、従つて赤頭巾と近し。

岩手縣 和賀郡

昔研 二ノ一三五

始めは型通り、池のほとりの柿の木に登つて柿を取らうと誘はれ、地に落ちて死ぬ。鳥の啼き方こゝのは異れり。

同縣

聽耳草紙 三六八

「瓜子姫」

紫波郡昔話集 一

姫を殺して爺婆に食はせる點、カチ／＼山におなじ。

岩手縣 岩手郡岩石

聽耳草紙 三七〇

二話あり。

下閉伊郡岩泉

同書 三七六

上閉伊郡

遠野物語 一〇二

「オリコヒメコトヤマハ」

山形縣 北村山郡

昔研 二ノ二一六

「お姫」

瓜の中より出る條無く、野老掘りに行つた留守に天邪鬼が来て李取りに誘ひ、姫は木より落ちて死ぬ。鳥に教へらるゝ條あり。豈の根の赤いわけを以て終る。前半脱落か。

秋田縣 平鹿郡

昔研 二ノ四五三

「瓜姫子と天邪鬼」

「あねさんとあまんじやく」

桃太郎の項参照

鳥根縣 松江市〔例出〕

高木敏雄氏傳説集 二六八

德島縣 三好郡

日本昔話集 上

「あまのじやく」

昔研 二ノ四二二

前段全く無し。

昔研 二ノ四六九

「百合子姫」

山の百合根の中から出て来た女の子。敵はヒヒ猿。

美馬郡

阿波祖谷山昔話集 七二

「瓜から生れたお姫様」

昔研 二ノ一三一

瓜の中から出た娘が機を織るといふだけ。

福岡縣 宗像郡

福岡縣昔話集 一九三話

「機織姫」

機を音を中心として發達した話。アマノジャクは無し。破片か。

大分縣 速見郡

昔研 一ノ三七〇

「瓜が流れて来た話」

五

川上より二つの箱が流れて来てその一つに瓜が入つて居て、その中より女の子が生れる。陸中のもとと中國のものとの中間。

秋田縣 鹿角郡

第一昔話號 四三

誕生の記事を缺き、全體やゝ省略。

仙北郡

角館民俗資料 八〇・一〇五

福島縣 桃生郡

郷土の傳承 二ノ一二三

福島縣 石城郡

磐城昔話集 一七二

「あまのじやくと瓜子姫」

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 二〇二

「瓜姫」

江沼郡昔話集 三一

石川縣

三話あり。

「瓜姫小女郎」

續甲斐昔話集 二二一

山梨縣 西八代郡

「お姫」

機織り虫と機織り雀との援助によつて機を織つて家を授ける。

末めでたしの形にて錦長者に近く、又鶴女房にも似てゐる。

長野縣

小縣郡民譚集 一五〇

「上伊那郡

昔研 一ノ三四・三一八

伊那昔ばなし 一〇〇

「あねさんとあまんじやく」

高木敏雄氏傳説集 二六八

鳥根縣 松江市〔例出〕

日本昔話集 上

德島縣 三好郡

昔研 二ノ四二二

「あまのじやく」

昔研 二ノ四六九

前段全く無し。

山の百合根の中から出て来た女の子。敵はヒヒ猿。

美馬郡

阿波祖谷山昔話集 七二

「瓜から生れたお姫様」

昔研 二ノ一三一

瓜の中から出た娘が機を織るといふだけ。

福岡縣 宗像郡

福岡縣昔話集 一九三話

「機織姫」

機を音を中心として發達した話。アマノジャクは無し。破片か。

大分縣 速見郡

昔研 一ノ三七〇

「瓜が流れて来た話」

五

天邪鬼は姫を食つて顔に血をつけて、それを洗ふと皮がはげる。復仇・復活のことなし。

岐阜縣 吉城郡

昔研 二ノ四五九

四話あれど完形のものなし。最後の二話は瓜太郎といふ男の子としてゐる。

兵庫縣 姫路

第二昔話號 五〇

岡山縣 御津郡

昔研 一ノ四一三

話は前半のみ。

安藝國昔話集 三八

廣島縣 豊田郡

柿の實より生れ、名は織姫。

加茂・高田・山縣の各郡及び廣島市のもの、併せて五話を載す。

山口縣 阿武郡

防長文化 一ノ二

川で拾つた瓜を二つに割ると片側より姫が、片方よりアマノジャクが生れる。

島根縣

邑智郡誌 八五〇

瓜の中より生れた姫は大きくなり鬼退治に行き、長者となつて歸ること、桃太郎の如し。

隱岐昔話集 三〇

島根縣

昔研 一ノ三六五

誕生と奇瑞

五

發端瓜子姫とおなじ。但し中よりは白銀がいつぱい出る。隣の爺婆のは中からワクトとへべが出る。

大分縣 北海部郡

昔研 一ノ一三六

「瓜子姫」

ガマリジャコにだまされるといふ。

長崎縣 壹岐

方言 五ノ四

瓜の流れて来た話ありしといふ。

” 對馬

旅傳 一二ノ九ノ一三

瓜姫を高木にしぼるのはメシ。

鹿兒島縣

甌島昔話集 九六

三話あり。

○参考

嬉遊笑覽 九 下ノ六八オ 是が最初の文献か。

錦 長者

秋田縣 仙北郡生保内

昔研 二ノ五六

瓜子姫の未めでたしの形。誕生の段無く、機織りの所へ山姥が来る。結末錦の川に流れる美しさをいふ。もとかういふめでたい形のありしこと判る。

竹の子童子

むかし三吉といふ桶屋の小僧が、竹を伐りに行くと竹の中から聲をかけて、出してくれと頼むものがある。伐つて出すと五寸位の人で、名は竹の子童子。歳は千二百三十四歳だといふ。お禮に七つだけ望みの事をしてやるといつて、三吉をお侍にして呉れた。

熊本縣 球磨郡 「例出」

昔研 一ノ三七三

鹿兒島縣 下甌島

昔研 二ノ四一〇

甌島昔話集一〇一

「竹姫」

貧しい翁の伐つた竹より美しい女の子が出て来る。十才の時(婚姻には関係無く)天に上ると赤いメシゲと杓子の賣物を置いて行く。

香川縣

これと竹伐婆との関係、小鳥を中心として舌切雀も考へられる。

貧しい老人が三本の筍を掘ると、筍は禮を云ひ、町へ案内する。姫の病氣に筍を求める殿様。これは童子で無く歌ひ骸骨に近し。

○参考

×竹取翁 臥雲日件録二(文安四年二月八日)

歌を能くする座頭に歌人のよく云ふ富士の烟の語の由來を聞いた。その答へに、

昔天智帝の代、富士山下の市に常に来て竹を賣る老人あり、人怪しみその後をつけて行くと富士山中鷲村の翁であつた。その家には美しい女があつた。その女ははじめ鶉の巢の中の小さな卵が化して女の子となつたので、これを愛して養つてゐる。自分竹を賣つて生計をたてゝ居るので、人々は自分のことを竹取翁といふ、と語つた。

遂約皇帝妃名曰加久耶姫……

然して天にのぼり、不死の藥をやいて……といふ以下竹取物語。

×鷲姫

末だ口頭に傳承せらるゝものを知らず。

鷲姫の名は廣益俗説辨正 三ノ四〇に見ゆ。

かぐや姫を鷲姫といふことを顯照説なりと、師説自顯集(續群

一七ノ一五四)に云へり。

×臥雲日件録ノ一「鷲の卵の中より出でてその名はかぐや姫といふ」と。

×海道記 採竹翁赫奕姫 鷲の卵の形にかへるといひ、青竹の中

誕生と奇瑞

より黄金出づといふ。

×日本風俗志卷中に引く國名風土記のこと。

×三國傳記 卷一二

×今昔物語 卷三一(下ノ六四一)

竹の中より黄金を見つける條あり、海道記とおなじ。

×詞林採葉抄 林箕作翁の鷹と犬

×類聚名物考 卷一七

子育て幽霊

村の館屋に夜更けた頃毎晩餉を買ひに来る女がある。戸の間から手を出していつも同じ錢で買うて行く。不思議に思つて後をつけると畑の所まで行つて後は火になつて墓場のあたりで消えた。幽霊にちがひ無いと思つて翌日その火の消えたあたりを調べると新墓に穴のあいたのがある。掘つて見ると中には女の屍があり、大きな男の子が眼をぱつちりと開いて坐つて居た。女が死んでから生れたので、母親は毎晩餉を買つて育てゝ居たのであつた。(この子は後にえらい坊さんになつたといふ)

—島原—

これも派生説話といひ得。地中誕生。

福島縣 伊達郡保原町

信達民譚集 六一

柱田村東光寺の墓地に葬られた女なりと。傳説の形になつてゐる。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 二・一〇〇

「幽霊の子育て」

兵庫縣 姫路

國民童話 二四五

「眞光寺の飴」

兵庫縣 氷上郡

旅傳 一〇ノ四ノ七〇

城崎郡

昔研 二ノ三六八

幽霊山通源寺の話といふ。(兵庫縣民俗資料第一七輯参照)

長崎縣

島原民話集 七六

〔例出〕

鹿兒島縣 喜界島

壹岐島昔話集 八九

〃

島 一ノ四六四

〃

甌島昔話集 一〇九

○参考

×東洋口碑大全 六二九 引犬著聞集。

地中誕生の話は昔話の形のものは傳はらず、多く因縁話の形となれり。

×續南方隨筆 二九一 以下

鷺の捨兒

山の桑採りに行つて籠に入れて樹に下げて置いた赤兒を鷺にさらはれる。その兒が助かつて大きな寺の和尚になつて居たのに、老いた二親が永い流浪の後再會する。

青森縣八戸

青森縣 八戸市

昔研 二ノ七九

「鷺にさらはれた子」〔例出〕

もと語り物か。

岩手縣 上閉伊郡

聽耳草紙 四二八

「長須田マンコ」

これには前段あり。

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 一二六

良辨といふ。

長崎縣

島原民話集 一六九・一七二

二話あり。一は混亂。一は再會談。

○参考

愛知縣 東春日井郡篠木村篠原 子取池傳説大草城主 西尾道水

佐渡昔話集

一寸法師

昔子の無い夫婦が觀音様に願がけると、母親の親指が腫れて来て、中から豆粒ほどの子が生れた。豆助と名づけて大切に育てたが大きくならない。十七の年兩親に暇を貰ひ香煎を持つて家を出た。そして大きな酒屋の釜の火たきしよとして雇はれる。その家には三人の娘があつたが、豆助は一番美しい中の娘がほしくて或夜寝てゐる娘の口ばたに香煎をいっばいぬりつけて、残りは川へすてしまつた。翌朝香煎が無いと云つて泣いてきかない。家の者を調べた最後に中の娘の口のまはりに香煎がついてゐるのを見つけた。食べた覚えは無いと云つてわめき立てる娘を、豆助はとうとう貰ひうけて家につれ歸ることになつた。娘は腹が立つので途中で豆助を殺さうとするが果たさず、とうとう家に來てしまふ。親達は豆助が無事に、主人の娘を嫁に貰つて來たので大喜びで、まづ風呂をたて、豆助から入ることにした。豆助は嫁を呼んで體を洗つて貰はうとすると、嫁は今度こそ殺してやらうと風呂の中を竹箒でかきまはすと、パーンと大きな音がして豆助の體が裂けて中から立派な男が出て來た。親たちもびつくりしたが大喜びで、それから二人は親孝行をして安樂に暮した。

青森縣 八戸

昔研 二ノ七八

「あくと太郎」

母のあくとより生れた子。成長して母を食はれた山姥に復仇する。もとの名はちひさこであつたらう。

青森縣 上北郡

野邊地方言集

シネコタンボ

傳説的な怪物といへり。

岩手縣 碑貫郡

昔研 二ノ二二一

「すねこたんぼこ」

〃

紫波郡昔話集 七五

「すねこたんぼこ」

福島縣 會津

方言第四卷・手帖 六

〃 石城郡

磐城昔話集 四・五

「どんぐり太郎」「一寸法師」

新潟縣 佐渡

昔研 二ノ二二九

「豆助の話」〔例出〕

これはやゝ形とゝのへり。

佐渡昔話集 三八

〃

昔研 二ノ一七四

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 一八八

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 一四

長野縣 北佐久郡

北佐久口碑傳説集

福岡縣 鞍手郡

福岡縣昔話集 四一

石川縣

江沼郡昔話集 一三八

「ちび太郎」

昔研 二ノ四五八

破片。隣どうしの二軒家あり。性根わるき母に豆のやうな子供が
出来、米を一俵貰つて山の方へ行く。父母がついて行くと山中の
池の中に下駄ばきで入り、俵にこしかけてやすむ。

岐阜縣 吉城郡

昔研 二ノ四五八

廣島市の大豆と鬼の話に關係あるか。

「指太郎」

昔研 二ノ四五八

佐賀縣 佐賀郡

昔研 二ノ三二四

百姓夫婦の申し子。馬の耳に入つて馬を御し、牛小屋に掃込まれ

佐賀縣 佐賀郡

昔研 二ノ三二四

て牛に食はれ、牛の中から物を云つて氣味わるい牛とて殺される

「ちんこまんのこひよろ」

昔研 二ノ三二四

と、その腹の中に居て今度は山犬に食はれる。山犬を雞小屋につ

川上より流れて来た丸太から生れた男の子、「ちんこまんのこひ
よろ」と名づく。針と尺と茶碗をもつて鬼退治に行き、鬼をしば

れて行き、腹が肥つた頃主人に殺させる。

つて家の天井に吊つておくと言物落ちて来る。隣の爺のまねそ
こなひを伴ふ。

廣島市

安藝國昔話集 九〇

犬の子譚に鬼退治譚がはさまつた形。

「大豆と鬼」

安藝國昔話集 九〇

長崎縣 北高來郡

昔研 二ノ四七九

大豆が遠征し、鬼と闘ひ寶を得。隣の大工はまねそこなつて失敗

長崎縣 北高來郡

昔研 二ノ四七九

する。

名を除く外は一寸法師のとほり。

「豆太郎」

方言誌 二二ノ五三

廣島縣 佐伯郡大柿村

藝備「昔話の研究」

「豆太郎」

島原民話集 一五二

「豆一話」

藝備「昔話の研究」

「豆太郎」

島原民話集 一五二

「豐田郡」

安藝國昔話集 八七

一升徳利ほどの男が長者の家に聲入りし、鬼が島を退治し打出の
小槌を持つて歸り、美男となつて家を立て繁昌す。家をやく話、
米倉の話に伴ふ。

誕生に奇なし。求婚をわざと省くは桃太郎におなじ。

米倉の話に伴ふ。

長崎縣

壹岐島昔話集 一七九

てた。以下忘失。

「豆藏話」

壹岐島昔話集 一七九

てた。以下忘失。

鹿兒島縣

鹿兒島縣 喜界島

鹿兒島縣 喜界島

鹿兒島縣喜界島

「一寸小太郎」

喜界島 島 二ノ四六一

「神様の申し子」〔例出〕

島 一ノ四六四

「沖永良部島」

おきえらぶ昔話集 二三八

龍吉話（蛇息子の條参照）との關係。

○参考

おきえらぶ昔話集 二三八

俚謡集 五六三 阿波那賀郡の長者踊の歌。

○参考

おきえらぶ昔話集 二三八

俚謡集 五六三 阿波那賀郡の長者踊の歌。

×昔研 二ノ一・二七 岡見正雄氏 小男の草紙（お伽）解説「ひ

めゆり」といふ話の中。

×シヤン・アト・ホーム 三

「神様の申し子」〔例出〕

岩手縣の田螺の聲に似たる拇指太郎談あり。

龍吉話（蛇息子の條参照）との關係。

×ヤーズレー 二一八

龍吉話（蛇息子の條参照）との關係。

魚にのまれる話。

龍吉話（蛇息子の條参照）との關係。

×ユキ 一四〇

龍吉話（蛇息子の條参照）との關係。

×岡山歴史地理 今村氏

龍吉話（蛇息子の條参照）との關係。

申し子話

子の無い夫婦が神のお告によつて手斧を枕に寝て生れた子供。

片手は手斧であつた。それで他所の子にけがをさせるので山にす

誕生と奇蹟

不思議な成長

蛇息子

子供の無い老夫婦、山から拾つて来た蛇に「しどこ」と名づけて大切に育てる。段々大きくなつて長さは一間、周りは太い竹の様になつた。子供に害をされる事を怖れた村人達は、しどこを棄てるやうに夫婦に頼む。夫婦はしどこを呼んで譚をいひきかすと、しどこも血の涙を流して裏山に入つて行つた。爺さん婆さんがついて行くと、しどこは山奥の田の中の土をほりはじめた。不思議に思つて翌日見に行くと、そこには大きな池が出来、周りには春になると美しい花が咲いて村人が辨當をもつて見に行くやうな所となつた。

そのうち、この池に長者の娘が足をふみはづして落ち込んでしまつた。見物に来た村人達は大騒ぎしたが助ける事が出来ぬ。其處へひよつこりとしどこが出て来て、水中の娘をくわへて浮び上つたので村人達はびくくりした。娘はすぐ息をふきかへした。長者はお禮にしどこには寶物をやり、老夫婦は長者に引取られて養

はれることになつた。しどこも喜んで何處へとも無く行つてしまつた。

—熊本縣鹿本郡—

岩手縣

紫波郡昔話集 一四二

「蛇の息子」畑もどりの笠の中に蛇。異常成長より長者の聲となる話。老爺と三人娘の問答あり。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 三

老夫婦が柴刈りに行き拾つた卵より蛇が生れ、「春」と名づけて愛育する。村人に嫌はれ山に棄てられる。以下こわれてゐる。

山形縣 西八代郡

甲斐昔話集 一一三

龍吉のはなし、求婚なし。

静岡縣 賀茂郡竹麻村

静岡縣傳説昔話集 四三八

ある山麓の老女が拾つた卵から蛇。山に放すと人を害する。村人の山狩の時に、婆の前にて小蛇となり殺される。その死體は見る見る大きくなつて婆は褒美を貰ふ。

異常成長の變形か。

静岡縣 田方郡中郷村

静岡縣傳説昔話集 四三九

山口縣 周防大島

旅傳 六ノ一二四四

「いち」

明神様の境内で拾つた卵から生れたのが、額に一の字あるいちといふ蛇。大きくなつて村人に嫌はれ山に棄てられる。殿様の高札によりいちが化物退治に行くが、退治する化物も亦蛇なり。

双方共に喰れるは「十三峠」におなじ。

熊本縣 鹿本郡

昔研 二ノ二八〇

「しどこ」〔例出〕

長者の娘を助けるは聲入の名残ならん。

鹿兒島縣 薩摩郡

昔研 一ノ五六五

蛇報恩譚。

〃 甌島

甌島昔話集 一五四

「スドー錢」

田螺長者

爺と婆が田の草探りに行つてみると、聲をかけて息子にしてくれと云つたのは田螺であつた。次の日馬に鞍を置いて貰つて、馬を曳いて大きな家に行つて爐の木尻に上り、煮立ち湯を散らしたり、灰を散らしたりして困らせ遂々その家の娘を嫁に貰つて、馬にのせてもどつて来た。爺と婆とは大喜びだが娘は田螺が憎くてたまらない。田螺はそんなに憎かつたら石場（薬を打つ所）へ持

不思議な成長

一三

つて行つてつぶせと云つたので、云はれた通りにすると、美しい男となつた。それで大變幸福に暮した。

—青森縣五戸町—

青森縣 三戸郡

五戸の昔話 第一七

〔例出〕

岩手縣 上閉伊郡

聽耳草紙 一一

〃 和賀郡更木村

動物文學 二〇ノ四〇

發端終結ともに「聴耳」に似たり。同じ話の二つの語り方といふべし。

秋田縣 平鹿郡

昔研 二ノ三六六

「螺と娘」

申し子の條無し。長者訪問に始まり、三番目の末娘をもらひ、自分は海中に入つて延命小槌を持つて来て娘に振らせよ男となる。

秋田縣 仙北郡

角館民俗資料 一三五

福島縣 桃生郡

郷土の傳承 二

新潟縣 北蒲原郡

昔研 一ノ一二六

「田螺娘」

筋は全く同じなれど女性の形として語られたもの。

加無波良夜譚 一八八

〃 南蒲原郡

廣島縣 高田郡

藝備「昔話の研究」一

岡山縣

岡山歴史地理 二ノ二

長崎縣

島原民話集 一四三

「田螺の聲」

求婚方法東北に同じ。その間鬼島征伐を伴ひ針の力・笹の船・打出小槌で美男となる。村をやいて打出す話。となりの爺の米倉話を伴ふ。

長崎縣 北高來郡

昔研 二ノ四七七

「田螺」

○参考

昔研 一ノ四〇四

支那類話のこと。

蛙 聲 入

田螺聲入系。主人公が蛙なる外は田螺聲入におなじ。

大分縣 速見郡

昔研 一ノ三六七

「蛙の嫁もらひ」

破片ならん。

長崎縣

島原民話集 一四八

「蛙の聲」

鹿児島縣 奄美大島

旅傳 一ノ七ノ七三

「蛙の子」

鹿児島縣

甌島昔話集 七四

「蛙息子」

蛞 蝓 聲

鳥根縣 美濃郡西見村

民族文化 二ノ七

老夫婦が可愛がつてゐる蛞蝓の子が米粒を貰つて長者の娘を嫁にして来る。この點田螺長者に似たり。

娘が針を一本くれる。鬼の相撲をひやかして鼻の中に入れられ針でついて打出小槌をとりあげ、それで娘に六尺男にして貰ひ家や倉も打出して幸福に暮す。

幸福なる婚姻

隣の寝太郎

甚四郎は蕪ばかり焼いて食つてゐる獨り者、村の若者達の援助によつて、首尾よく朝日長者の娘を嫁に貰ふ。娘が行つて見ると小屋のやうな小さな家で米も無い。絹三反を持たせて町にやると、道でとられて二度まで空手で戻つて来た。三度目に漸く錢は取つて来たが、路で子供のいぢめて居たびつこ鷹を買取つた。するとそのびつこ鷹は川に入つて川童を捕へる。

川童は延命小槌と延命小袋を、甚四郎に呈上し命を助けてもらった。甚四郎は袋なら蕪を入れるに役立つとて、袋だけを持つて歸ると嫁は小槌を拾ひに来て先づ家を打出した。

甚四郎は米と倉とを出さうとして小盲を澤山出して失敗するが嫁が助けて漸く米と倉とを打出し、舅の長者を招くことにする。さうして饗應に使つた膳碗は皆川に流してしまつた。歸途のあかりにとて家をやいてしまふ。舅の長者が返禮をするので皆聲のまねをしようとしたが、家を焼いた後、建てる事が出来ずに居ると、甚四郎は小槌を振つて新しくたてゝやつた。

幸福なる婚姻

青森縣 八戸

青森縣八戸
昔研 二ノ七九

四話あり。

一は「蕪焼甚四郎」〔例出〕

三戸郡例出の「蕪焼甚四郎」の一異傳と思はる。やゝ複雑して居るが完形に近いものと思はれ、炭焼長者との連絡もわかる。

二は「かばの長者」

カバといふ名の男、殿様の二人の娘のうち妹を妻とする。空園畑の蕪の根から錢金が出て忽ちに金持となる話。カバといふ名も蕪に關係あるらしいが説明されてゐない。

三は「蛞屋久兵衛」

八戸長者山の由來として語られるものらし。蛞ばかり食つてゐた蛞屋久兵衛と呼ばれる男が廣い空寺を借受けて住むと、それが評判になつて望み通り、長者の娘が嫁に来る。化物が出るといふ寺の土蔵にはいつばい金が入つてゐて、自分もたちまち長者になる。

四は「いさばの蛞左衛門」

大阪のいさばや、蛞左衛門は江戸の大家の娘を妻にする。化物屋敷を貰つて住んだが、妻の才覚で化物は十二の土蔵に埋められてゐる黄金なることを知り、掘出して長者となる。

青森縣 三戸郡是川村

旅傳 二ノ一〇ノ一七

「蕪燒笹四郎」

岩手縣 上閉伊郡

聽耳草紙 一三一

「鳩提灯」

筋に省略あり。

岩手縣

江刺郡昔話 五〇

秋田縣 仙北郡

郷土の傳承 二ノ一三五

聲入話では無く、猫の繪を畫くくせのある男が古寺に泊つて猫を

いくつもかき、怪鼠を退治してその寺の住持となる。

富山市

昔研 二ノ二六九

「なまくらあんざ」

栃木縣 芳賀郡

茂木昔話集 二二

「怠けもの」

一つの痕跡にすぎぬ。

山梨縣 西八代郡

續甲斐昔話集 一八二

岐阜縣 吉城郡

ひだびと 四ノ四(一)

「三年寢太郎」

宇治拾遺と似たり。

猫報恩と周防大島のもの似る。

「三年寢太郎」

三話あり。その一は風呂焚三八と似たり。「七鍋の数」といふ名

の男七鍋わかつて初をとつておいて浴びると美男となり、長者の

娘に盃をさし、その聲となる。

その二は、長者の庭はきになつた男、花を取りにやると不思議な

花ばかり取つて來るので後をつけて行くと、高い木に登つて神様

と話をしてゐる。たゞ人ではないと思はれて長者の聲となる。

その三は、ゆり若と似てゐる。子の發見。

食はせる和尚を戒める話。

鹿兒島縣 喜界島

昔研 一ノ二六三

「三年寢太郎」

三話あり。その一は風呂焚三八と似たり。「七鍋の数」といふ名

の男七鍋わかつて初をとつておいて浴びると美男となり、長者の

娘に盃をさし、その聲となる。

その二は、長者の庭はきになつた男、花を取りにやると不思議な

花ばかり取つて來るので後をつけて行くと、高い木に登つて神様

と話をしてゐる。たゞ人ではないと思はれて長者の聲となる。

その三は、ゆり若と似てゐる。子の發見。

牛の嫁入

よき夫を持たうと願がけする娘を神託を以て欺き、その嫁入の途で殿様に小牛ととりかへられる。青年が待つてゐると、駕籠から牛が出て座敷をあばれまはる。

—喜界島昔話集—

青森縣 八戸

昔研 二ノ八一

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 五一

幸福なる婚姻

禿頭の女。欺きて嫁入りし、庚申の夜の縁組故と屋根の上より云ふ。

兵庫縣 水上郡

旅傳 一〇ノ四ノ七一

廣島縣 神石郡

藝備「昔話の研究」 三

「三年三月の寢太郎」

比婆郡

同書

高田郡

安藝國昔話集 五八

「寢太郎三助」

鴻池話の二、夢の話となり笑話化してゐる。

山口縣 周防大島昔話集

山口縣

昔研 一ノ二八六

禿げ嫁の話は宇治拾遺に近し。

愛媛縣 怒和島

蛸屋親兵衛といふ貧乏漁師、伊勢参りの途に鴻池の娘にあひ、欺いて聲となる。

徳島縣 三好郡

北斗 三一

美馬郡

阿波祖谷山昔話集 一二八

長崎縣

島原民話集 一九三

「鳩の神様」

この話は聲入でなく和尚小僧の話に轉用してゐる。ひば汁ばかり

「暗がりから牛でござる」

後半は笑話化す。

鹿兒島縣

喜界島昔話集 五二

「嫁の駕籠に牛」(例出)

この一致の原因、知りがたし。おもしろい順序今はかくれて居る

なるべし。

○参考

お伽のさゝやき竹との關係。昔研 一ノ三五二 岡見氏

雑談集 五ノ四オ 嘉永二年

「さゝやき竹」のもとかと思はるゝものあり。

山田白瀧

或金持に十二人の美しい娘があつた。その家の若い衆がその中の白瀧姫に心を寄せ、どうかして嫁にもらひたいと考へて居た。それが旦那様に聞えて、或日その若い衆は呼ばれた。そして理に叶つた歌を詠んだら白瀧を嫁にやるといふ。若い衆はひでりをも山田の稻は枯れはてる、落してくりやれ白瀧の水と詠んで首尾よく白瀧姫を妻にした。

—新潟縣南蒲原郡—

青森縣 八戸

三人の小僧の願ひごとの話となつて居る。

昔研 二ノ八一

岩手縣

「播磨國絲長庄司」

紫波郡昔話集 五一

「神貫郡花巻」

第二昔話號 八〇

「出世聲」

酒屋稼ぎの若衆三人の話、娘と歌問答して遂に聲となる。

話はやゝこわれて居る。本藏といふ通稱はもうこの邊では知られなかつたのであらう。

岩手縣 天澤村

昔研 二ノ二二四

男の名はごもく。歌謡の影響あり。

和賀郡

昔研 二ノ二二三

「歌よみ聲」

娘の名はさくら、學問ある若者はごもく。三人の僕の願ひは無く、

二人の歌問答で嫁入りする。

宮城縣 桃生郡

郷土の傳承 一

座頭の作爲、娘の歌に明らかなり。

新潟縣 佐渡

昔研 二ノ三一八

炭屋五郎兵衛といふ炭焼、六部より教へて貰つて歌をよみ白瀧といふ妃を買ふ。その後炭焼長者の出世譚と結びつく。

新潟縣 南蒲原郡

その一「例出」

加無波良夜譚 一五二・一六〇

その二は破片。

昔研 一ノ一二八

「猿次郎」

前段はまゝ子いぢめ、助けられて長者の庭はきとなりホドと改め歌をよみて聲となる。

これなどの調和は自然の變化にあらず。ゴゼの坊のかたりと云へり。

長野縣 下伊那郡

昔ばなし 一一四

兵庫縣 加西郡下里村

旅傳 三ノ七七四

「山田の源兵衛」

廣島縣

藝備「昔話の研究」 一六三

徳島縣

「歌詠み聲」

阿波祖谷山昔話集 三一

熊本縣 玉名郡

昔研 一ノ二二八

「咲花とゴモク」

長崎縣

島原民話集 一八七以下

普通は歌問答の形なれどこゝは連歌の形に語られてゐる。六話あり。

長崎縣

「歌問答で嫁を買ふ話」

壹岐島昔話集 六七

鹿児島縣

甌島昔話集 一〇二

難題 聾

昔瀧津の有馬温泉で隣合せに泊り合せた長者の娘と、或若者とがいつも無しに仲よくなつた。娘は家へ歸らねばならなくなつたが二人共名も住居も明かしてなかつたので、娘は「戀しくばたづね来て見よ十七の國腐らぬ橋の袂にて夏なく虫のぼたもち」といふ歌を若者に残して故國へ歸つた。

「若者はこの謎の歌を考へながら町を歩いてみると、一人の按摩に出會つたので歌の意味を尋ねると、「十七の國とは若い國のこと、若狭のこと、腐らぬ橋は石橋、その橋の袂の蟬屋のお萩さん」といふ事だと釋してくれた。すぐ尋ねて行つて見ると蟬屋は非常に大きな長者であつた。若い衆はその風呂焚に雇つて貰つたが、娘は他の男の所へ嫁入ることになつた。祝言の日若者は駕籠をかつぐ事になつたが、途中ではからずも駕籠の中の娘と顔を見合はせた。花嫁はその場で急病となり、そのまま實家へ歸つて寢てしまふ。易者に見てもらつて、その言葉通りに家内中の男の

幸福なる婚姻

手形を見せる事になつた時、若者は「戀しくば」の歌を書いてさし出したので、娘はそれを見て頭をあげてにつこりと笑つた。それでみんなに譚が判つて改めて若者と盛大な結婚の式をあげた。

青森縣

津輕昔話集 四

一把のわらを十二把にして養子となる話。

智巧談にうつり行くみち。

岩手縣

紫波郡昔話集 三二ノ五一

その一は「打たん太鼓に鳴る太鼓」

その二は「播磨國絲長庄司」

上閉伊郡

老嫗夜譚 一八五

「人食ひ花嫁」

岩手縣

昔研 二ノ二二四

「ばつこ食ひ娘」

三人の若者の求婚、働きに甲乙無し。棺桶より餅で拵へた人形の赤兒を出して食ふ娘をみて怖れなかつた三人目の男が聲となる。

この話よくとよのへり、或は古いまゝか。

岩手縣 膽澤郡水澤村

聴耳草紙 六四

「蜂のお蔭」

三人の娘の聲探しの高札、化物退治とわらしべ一本を千兩にする

事、唐竹林の竹かぞへ、及び三人娘の一人を蜂に教へらるゝこと。
秋田縣 仙北郡 聴耳草紙 六三

「蜂聲」 蜂の報恩譚。

山形縣 北村山郡

昔研 二ノ二八〇

三人の下男と長者の一人娘、懐の中をあてさせること、山の上よりドッコロをころがして受けとめさせること、両方とも守唄によつて教へらる。

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 四九・一八六・一六一

その一「一把の藁」その二「戀しくば」の歌、その三「姥捨山」と題せられ、婆が殿様の難題を解いて息子の美しい嫁を護る話。

石川縣

江沼郡昔話集 一三七・一〇五・一〇〇・九二

四話あり。

その一「嫁とどうも」その二「桃太郎異譚」

その二の話は珍らしい型、桃太郎に地頭殿から種々な難題をかけられる。打たぬ太鼓に鳴る太鼓・灰の草履・鬼の牙など。これで鬼ヶ島へ行く。

むしろ智巧譚なり。

その三「どうもこうも」

和尚小僧の話となつてゐる。

その四「八斗五升」

拙作なれどもとの趣向つたはる。子供に教へらるゝこと。

長野縣

小縣郡民譚集 一九三

三枚の護符とつながる。蜂の授助あり。

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 七八

「おひやらか吹いて顔かくし」

難題聲系統なれど派生の昔話。意地悪い婆様と男の話。

山梨縣

續甲斐昔話集 一九八・三四二

その一「謎の歌」〔例出〕

その二「蜂太鼓」

和尚小僧はなし。

神奈川縣 津久井郡

第一昔話號 四四

三話あり。初めの二は難題、三の「嫁さがし」は播磨絲長庄司型。

愛知縣 南設楽郡

第一昔話號 六二

播磨絲長型と戀しくばの歌と二つの型あり。

岐阜縣 吉城郡

ひだびと 五ノ六

兵庫縣 水上郡

同書 四ノ三ノ三八

「江川孫左衛門」

旅傳 一〇ノ四ノ七二

山田白瀧に似たり。三人下男の物望み。

島根縣 邑智郡

昔研 二ノ三八二

「難題聲」

文字の知識による新しい型。

岡山縣 矢掛

第二昔話號 八二

「九つ山の一つ山」

戀しくばの歌と座頭の解釋、風呂焚灰坊の話となり、聲えらみの例の形。

山口縣 周防大島

第二昔話號 八一

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 九二

戀しくばの歌だが灰坊太郎より出でしことわかる。

徳島縣 三好郡

昔研 二ノ四七一

「龜と蜂の報恩譚」

動物報恩譚の複合型、主人公はゴクドゥ者、龜と蜂の命を助け大

家の奥方の難病の薬を龜の授けにて取り、女中の中より嫁えらみ

をする時、蜂に教へられしこと。後段に案外古い形あり。

大分縣 北海部郡

昔研 一ノ一八四

和尚小僧話への變化。

大分縣 速見郡

昔研 二ノ四四

「和尚と小僧」

前のものと同じく笑話化してゐる。

幸福なる婚姻

大分縣 速見郡

昔研 一ノ三七一

「殿様の難題」

これは天人女房の後段と同じ、即ち破片かと思はる。

大分縣 杵築町

昔研 一ノ三六八

「蜂と狼と龜」

三動物の授助により長者の聲となる話。

熊本縣 天草

郷土研究 五ノ二六二

三荷ほどの話をした者を聲にとるといふ。果なし話と縁あり。

長崎縣

壹岐島昔話集 九〇

「三つの難題」

母と子に殿様の難題。

鹿児島縣 甑島

昔研 二ノ四〇九

名人を聲にするといふ高札。遂に農人を聲とするといふ話。この

外甑島昔話集には、扇子繪の女を尋ねて行つて嫁にする話三話。

播磨絲長型二話。難を助けた蚊・龜・狼の授助によつて長者にな

るもの一話あり。

鹿児島縣 喜界島

島 二ノ四四七

「播磨絲長殿」

第二昔話號 四六

「神様の申し子」

主人公は申し子。妻覓めの旅にて乞食の話をきき、さまざまの試みの後殿様の聲となる。

鹿兒島縣 奄美大島

昔研 二ノ一六八

「鬼の姉」

蚊を助けたお禮に、倉の中の穀物の数を教へられて聲となる。

○参考

×長谷寺靈驗記 下三〇

近江國應官源雅基國司の難題にあふこと。信州長谷寺にて相撲となつてゐる。傳承なるべし。

×今昔物語集 三一

竹取翁に打たぬ太鼓に鳴る太鼓あり。

×朝鮮民譚集 二八

發端「人は思知らず」と近し、助くるは蚊と蛾。

天人女房

昔炮烙賣りが七月六日の叢山中を歩いて居て美しい三人の娘の水浴を見、その中の衣裳を一組盗んだ。歸途其處を通ると一人の娘が泣いて居る。家につれて歸つて妻とし子供が産れた。子供の

三つの年添乳してゐながら天井を見てゐると黒ずんだ紙包みを見つけた。中を見ると、なくした衣裳である。はじめて盗られた事を知り、早速それを着て、子供を脇にはさんで表から雲にのつて出ようとする所へ夫が歸つて来た。女は「私は天の七夕だ、戀しがつたら草履千足つくつてのぼつて来い」と云ひ置いて天に昇つてしまつた。夫はそれから一心に草履作りにかゝつたが、九百九十九足つくつた時待遠しくなつて表へ出ると雲が迎ひに来て居た。そして天がもう手にとゞく所まで来て居るのに、それから後はどうしても昇れない。妻は天の二階で機を織つて居たが、ふとその様子を見てあはれに思ひ、二階から機をつきかへす棒をつき出して引きあげてやつた。親にひきあはせたが親はにくくてたまらず、いろ／＼面倒な仕事を言ひつける。しかしその度に妻の智慧によつて上手にきりぬけて行く。天では瓜を食べることを禁ぜられてゐるのに、親からすゝめられてとう／＼食べてしまつた。すると瓜から水が出て来て流されさうになる。妻が聲をかけた月に一度のつき合ひと云つたのを夫は耳が遠いので年に一度と聞きそこなつたまゝ流れて行つた。それで七夕さんは年に一度しか會はないのだといふ。

青森縣

——香川縣三好郡志々島——
津輕昔話集 九

青森縣 八戸

昔研 二ノ八二

「三國一の笛上手」

嫁はお月様の娘。後半は冒險譚。

岩手縣

紫波郡昔話 一八六・一〇六

その一「天の御姫様と若者」

その二「桃實殿様」

羽衣をかくすこと、繪姿女房話につづく。

岩手縣 上閉伊郡

考嫗夜譚 三二七

「笛吹藤平」

まんだらを織る女房・殿様の難題は灰繩千把・太鼓・天の雷神

〃

聽耳草紙 二九

「天人子」

やゝ傳説に近し、昔話を光明寺の縁起にとりしものならん。この

秋田縣

昔研 二ノ四五五

「兄のむかし」

天上胡瓜の笑話の一つ手前である。

福島縣

磐城昔話集 六・一〇二

新潟縣 南蒲原郡

昔研 二ノ三二二

「笛吹男」

笛上手の男へ天上より嫁が来る。殿様の難題・天上聲入・妻を取

幸福なる婚姻

二三

られて取戻す條など。

新潟縣

佐渡昔話集 五二・六五

その一は色々の粉飾・附合せに省略あり。この話の職業者の手にかゝりしことあらはなり。

その二は省略なれど天上聲入あり。引出物に金の卵を生む鶏。二十三夜待の神さんはアマヲトメなりと。

長野縣

小縣郡民譚集 二一〇

「どうもかうも」

長野縣 上伊那郡

小野村年中行事

「七夕の昔話」

羽衣型・瓜の禁と七夕の由來。

岐阜縣

ひだびと 五ノ二ノ二三

羽衣型。爺が羽衣を見せたので子供を抱いて天上へかへる。

愛知縣 寶飯郡

愛知縣傳説集 二二四

鳥取縣 東伯郡

因伯昔話

羽衣は盗まれたのでは無く、脱いだら天上の事を忘れてしまつて農夫の妻となる。後ふと羽衣をきると天上の記憶がよみがへり、夕顔の花と子供の助けによつて歸天す。

鳥根縣

民間傳承 二ノ一〇ノ七

廣島縣 双三郡

藝備「昔話の研究」

「喜の木」を登つて天へ行く。母の難題あり。

廣島縣 比婆郡

藝備「昔話の研究」 五

松の木に登つて天へ・犬同行。前のと二話とも、瓜から天河が出たといふ七夕の由来。

廣島縣 佐伯郡

安藝國昔話集 五三

「金の擔桶」

鹿を助けてその援助による。

山口縣 周防大島

二話あり。その一は發端狸を助ける話。天人が羽衣をみつけて天へ歸つた後、狸來り豌豆を一粒くれ、その蔓が伸びて天までとぐ

くといふ、報恩譚を複合。その二は豆の種を天人が残り置く。天

上では蜂と狐と鳥の援助により女房を知る。

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 四三・一〇〇

「七夕女房」

香川縣 志々島

昔研 二ノ五六六

「七夕さんの話」

熊本縣 飽託郡

昔研 二ノ二六三

「犬飼さんと七夕さん」

天草

昔研 一ノ四七三

犬飼七夕の由来・百足の草履が一足たりない話・絲瓜の話など。

長崎縣 南高來郡

島原民話集 一二七

羽衣を盗み子供も出来てから取返される。あめ牛千匹埋めて南瓜の種をまき、それを傳つて天上に聲入。一匹不足の挿話。雨をふらす手傳ひをして雲より落ち近江の鮎となる。

鹿兒島縣

喜界島昔話集 一八・二一・二四

三話あり。三は牛飼が天降子の飛羽をかくして妻とす。幾年か後に天上へ親見參に行き瓜の切り方をまぢがへる。天の川の由来。その二は兄の唄ふ子守唄により羽の在處を知ること沖繩に近し。その一は形少し異り天降つた兄妹の話。

鹿兒島縣

甌島昔話集 一〇八

後段のみ。

「查美大島」

燒田村山田の地・翁と黒犬・天女煙草を求むること。

○参考

山形縣 北村山郡西郷村に天人女房の話存在すること。

昔研 二ノ五ノ二二

沖繩の例 日本昔話集(下)一七〇

朝鮮民譚集 七四 雄鷄傳説。

お伽草紙 梵天國。

日本童話寶玉集 下ノ二一八

ヤーズレー 一七〇・一七二・一八〇

繪姿女房

昔ある所に少し愚かな權兵衛といふ百姓があつて、誰も嫁に来る人も無くほつたて小屋に住んで居た。ある夜きれいな姉様が尋ねて来て嫁にしてくれといふので夫婦となる。翌日から百姓はあんまり嫁が美しいのでその方に氣をとられて野良仕事にも精が出なくなつた。そこで嫁は繪姿をかゝせて、畑に持つて行かせた。百姓はそれを木の枝にかけて仕事をしてゐたが、或日大風が吹いてその繪姿が天上に舞上り、殿様のお庭に落ちた。殿様はその繪姿を見て、どうしてもお嫁に欲しくなり、家來に云ひつけて探させると、權兵衛の妻であることが判つた。そして嫌がるのを無理やり御殿へつれて行つてしまつた。別れる時女房は「年夜になつたら門松を賣りに来てくれ、きつと逢はれるやうにする」と約束してあつたので、年夜になるのを待ちかねて門松を持つてお城の前に行き大聲で門松やア門松やアと云つた。すると今まで一度も笑つた事の無い女房がにこにこ笑つたので、殿様は大喜びで門松やを呼込み、終ひには御自分が門松やの着物を着て眞似をして見せた。女房はうれしさに、にこ／＼するので殿様は一層うれ

幸福なる婚姻

しくて、とう／＼門の外まで出て呼んで歩いた。その間に女房は門の戸を閉めてしまつたので殿様はとう／＼入れなくなり、權兵衛は女房と共に幸に暮した。

——新潟縣中浦原郡五泉村——

岩手縣 上閉伊郡遠野

聽耳草紙 二〇

「蕪燒笹四郎」

新潟縣 中浦原郡

昔研 二ノ九五

「例出」

「南浦原郡」

加無波良譚 五

「正夢」

初夢が合つて公方様になつた話なるも妻をとりかへず點はおなじ。

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 二八

「難題話」

廣島縣 高田郡

安藝國昔話集 一一二・一一七

「山縣郡」

同書 一一九

この三話、難題譚よりの變化か。

廣島縣

藝備「昔話の研究」一一〇

長崎縣

昔研 一ノ五〇二

發端龍宮女房とあること東北に同じ。殿様の難題。

島原民話集 一二二

二五

鹿兒島縣 奄美大島

昔研 二ノ一四二

ボツクリの話となつてゐる。異郷より來し女房の繪姿の風にとぶこと。殿の難題・相撲の賭と二人の老人・神の片手など信州長谷寺に至つて近し。

○参考

國外の例につきましては、昔研 二ノ六 淺田勇氏
但しいづれも繪姿の風にとばさるゝ條無し。

鶴 女 房

昔正直な男が山へ草刈りに行つて、一羽の鶴が矢を負うて居るのを助けた。その年の秋頃見知らぬ女が來て泊めて呉れといふ。男は氣の毒に思つて泊めてやり、遂に夫婦となつた。そのうちにお正月になつたが、貧乏で年取りの用意も出来ないで、嫁は一生懸命機織りをして、その布を王様の所へもつて行つて買つて賣ふやうにといふ。持つて行くと澤山の金を呉れてもう一反織つて來いと云はれた。家に歸つて妻に話をする、もう一反織れるかどうか分らないが、とにかく織つてみませう。その代り織り上げるまで決して來ない様にと云つて部屋に入つた。男は不思議に思つてそつとのぞいてみると、全身ほとんど裸の鶴が、僅かに残つ

た羽を一本づつ食ひぬいて機を織つて居た。見て呉れるなとあれほど云つたのに、なぜ見たか、見られてはもうこゝに居ることが出来ない。私はいつかあなたに助けられた鶴です。御恩返しのため來たのですがもう居ることが出来ないといふ。裸のまゝどこかへとんで行つてしまつた。この織物は「しよくこうのにしき」といふ。

——長野縣北安曇郡——

青森縣 八戸

昔研 二ノ八三

「ころまん鳥」

鴻池の先祖といふ。機織りと見るなの座敷。

同縣

五戸の昔話

鶴の羽衣以下三話。播磨絲長型・殿様難題との複合など。

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚 二八八

「鴻の眞女房」

福島縣 信夫郡

信達民譚集 一一九

庭塚村鶴沼の傳説としてあり。

石城郡

磐城昔話集 一〇・一〇四

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 一八一

佐渡

第二昔話號 五三

佐渡昔話集 六七・一七一

報恩譚無く、獵をやめる約束。

長野縣

北安曇郡郷土誌稿 一一ノ一五五

「鶴の報恩」 [例出]

長野縣

小縣郡民譚集 二六四

二話あり。一は鼠が身の毛をぬいてといふ。

〃 南安曇郡

高木敏雄氏傳説集 一五三

小鳥を助けた老夫婦の家に娘となつて來る。

〃 上伊那郡

昔ばなし 一二五

女房は雉。山鳥女房との融和。

石川縣

能美郡誌 一一四九

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 七

「助けた鶴」

廣島縣

藝備「昔話の研究」 一二

岡山縣 御津郡

昔研 一ノ三二一

「鶴の恩返し」

助けられて老夫婦の子となる。見るなの戒なし。播磨の皿池に尋ねて行くこと。

鳥取縣 岩美郡

昔研 二ノ七六

單なる報恩譚なれど叙法最も精細。女房でなく娘。

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 五三

幸福なる婚姻

香川縣 高松

第二昔話號 五四

「尙庵さんと鶴」

助命報恩譚。三年間恩人の墓の邊りをとび歩き、恩人が蘇つた時には鶴は裸となつて死んでゐた。

福岡縣 企救郡

福岡縣昔話集 一五一

〃 鞍手郡

同書 七四

長崎縣

壹岐島昔話集 一六四

「鶴の話」

鶴淨土ともいふべき單なる報恩譚。今昔の龍宮入と近し。

鹿兒島縣

甌島昔話集 六三

○参考

米府古志類纂 六〇

米澤東寺町鶴市山(後に新福山) 珍藏寺の傳説。

鳴 女 房

福井縣 阪井郡

昔研 一ノ三一

主人公は屑買ひの善右衛門、鴻池の由來話。助けた鴨が女房となつて來る話。機織りと見るなの戒あり。枡の中に尾を入れて去る。謎等。

山鳥女房

長野縣

南安曇郡誌 九二八

矢村の矢助といふ男、極月二十八日穂高の暮市に行く路で、わなに罹れる山鳥を救ふ。懐中の五百文をわなに結びつける。後段は或は語りものか。

石川縣

能美郡誌 一一五〇

西庄村尾小屋 中山仁太郎二代目の傳説、美女來り泊り、佛峠まで送つて行くと白雉となりとび去る。白山權現の化身なりといふ。禮に筭と櫛こを渡し、今なほ筭あり。この家今に至るまで雉を食はず。

鳥女房

秋田縣 仙北郡

角館民俗資料 四四

鴻の語り方全く鶴と同じ。貧しい男の助けた鶴が來て機を織り子を生む。この後播磨絲長庄司型。

福島縣

磐城昔話集 一一

「こふのとりの恩返し」

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 二四

播磨絲長あり。

狐女房

昔ある男、妻が病氣で親元に歸り困つて居る。ある日川へ魚釣りに行つて居ると、白狐が流れて來たので助けて家へつれて歸る。狐は恩返しをすると云つて何れかへ去つた。或時女が來て女中に使つてくれといふので、置いてやると、そのうち子供が生れた。或時子供が、母が尻尾で庭を掃いてゐると父に教へた。父には判らないが天井へ上つてみると尾があるので驚いて妻を追出さうとする。そこへ病氣で居た妻が歸つて來る。狐の女は「戀しくばたづね來てみよ和泉なる信太の森の恨みくづの葉」とかき置いて山に歸つて行つた。

大阪府泉南郡

青森縣 八戸

昔研 二ノ八四

男の名、アビノヤヌナ、兒はアビノセメトノ。所はシロダの森、語りものゝ名残なること明らかなり。

”

上北郡傳説集 六三

狐にいたづらして田植の忙しい日に馬をかくさるゝこと。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 七・一〇三

石川縣

鹿島郡誌 九七八

栃木縣 芳賀郡

茂木昔話集 三五

痕跡のみにて昔話のもの形なし。

長野縣

北安曇郡口碑傳説集 二ノ六二

重柳村の例。田植を助けに來て子に添乳し、夫に尻尾を見あらはされる。

愛知縣 寶飯郡

南安曇郡誌 九三七

重柳村の例。田植を助けに來て子に添乳し、夫に尻尾を見あらはされる。

兵庫縣

愛知縣傳説集 二六三

飾磨の狐話。 信太森に近し。

傳説叢書

〇参考

×本朝俗話誌 この狐の子、物草太郎といふ。信太宮の話。

×鄙の一曲 志太の鍋子の話。

×續飛鳥川(新燕一ノ一八)に狐の面をかぶり田作の祝ひ歌を唄ふとあり。

×顯註密勘 三輪の神女、人の妻となること。

×道聽途説 第三編 三七

×百家騎行談 常陸國栗山覺左衛門。 利根川圖誌にもあり。

×遠山著聞集後編

×日本靈異記 三野國狐直の先祖

幸福なる婚姻

蛤女房

昔ある獨り者の男の所へどこからか美しい嫁が來た。嫁が來てからは、それまで格別美味くもなかつた味噌汁が大變うまくなる。男は不思議に思つて、いつものやうに仕事に行くふりをしてこつそり裏に隠れて見て居た。すると嫁は摺鉢を出し、味噌をすり終へると、いきなり鉢に股がつてきたことをした。男はそれを見て大に怒り、すぐ嫁を追出した。嫁はあやまつたけれども許してくれないので、大きな蛤になつてもくり／＼と這つて出て行つた。味噌汁には貝の汁を入れたからうまかつたのである。

長野縣 上伊那郡

長野縣 上伊那郡

民俗學 一ノ二七六

〔例出〕

島原民話集 一三〇

長崎縣

〇参考 にお草紙 蛤の草子

日本童話寶玉集 二〇六 はまぐり姫。

魚女房

蛤女房が魚の形となつてゐるもの。

岩手縣 岩手郡

聴耳草紙 三六一

「魚の女房」

秋田縣 仙北郡

昔研 一ノ二七九

「ふなの恩返し」

「鯉女」

山形縣 東田川郡

昔研 二ノ九三

「蛙女房」

福島縣

磐城郡昔話集 一二

「人魚の恩返し」

新潟縣 南魚沼郡

昔研 一ノ三二二

「鯉の恩返し」

鯉報恩と殿の難題。

長岡

民俗學 二ノ四五五

富山縣

國民童話 一八八

牛が首の祭の相撲の由來譚。

石川縣

江沼郡昔話集 一二一

「娘と川鱈」

岐阜縣 飛騨

民俗學 二ノ四ノ九三四

チンマが池の傳説となつてゐる。

鹿兒島縣

甌島昔話集 六八

○參考

朝鮮 朝鮮民譚集 二三五

「放鯉得龍女」

最も浦島に近し。寶の箱を開くと薄い煙が出るといふ。

朝鮮民譚集 一二二

「鯉と貧しい男」

龍宮女房

七人の家族に死別れた母と末の男の子があつた。子供は花賣りをしたが少しも賣れないので、ある日の歸途龍宮の神にあげると云つて海に投込んでしまふ。すると龜が出て来て、お禮に龍宮へ案内しようといふ。欲しいものをと聞かれたら、女の子を欲しいと云へと教へられた。

三日と思つたのが人界の三年で、その歸る日神様は嫁として女の子を呉れた。歸つて見ると母親は飢えて死んで居たが、嫁が生

鞭でなでたら生返つた。嫁は打出小槌を持つて居て、家をつくり

米や倉を出して、見る／＼うちに金持となつた。

殿様がその美しい嫁の話をきいて、米千石を上納するか、妻を差出すか、といふこと。嫁に話すと米を海の中より取寄せて無事上納した。次は千尋の繩の難題、これも亦海中より持つて來た。

次には正月元日に六百九十九人の家來をつれて、妻を見に行くから沓盛酒を七十七壺支度せよ、といふこと。妻は用意して大取持をした。殿様は何か藝をせよとて荒いと(イトは作業歌)を出して見るといふ。嫁は小さな箱から何百人といふ同じ恰好の人を出して面白く藝をさせた。細いとを出せといふ命令、危いからと云つてもきかないので、別の小函をあげると中から鉢巻をして刀をもつた何百人といふ人間が出て、殿様より家來までみんな斬殺してしまつた。

島根縣 邑智郡

昔研 二ノ四一七

「芋掘長者」

簡略型。龍女山中の笹屋の嫁に來て機を織る話。

長崎縣

島原民譚集 一二一

繪姿女房前段。

鹿兒島縣 喜界島

昔研 一ノ二三二

「龍神と花賣」〔例出〕

〃

第一昔話號 二三

「龍神の女」

〃

甌島昔話集 六一

○參考

所謂豐玉姬説話。八幡巖童訓の類にも明示せらる。

蛇女房

岩手縣
新潟縣

——鹿兒島縣喜界島——
九戸郡誌 四七四
旅傳 二ノ七

岐阜縣 飛騨

飛騨風物記 八七

「嫁が淵の話」

日本傳説集にも見ゆ。

幸福なる婚姻

(蛇とはいへど大方水の靈にて、即ち大蛇より龍女といふに近し。)

妻を喪つて悲しんでゐる男の所へ、何處からか美しい女が來て夫婦となり、やがて子供が出來た。お産になると、妻は決して内を覗いてくれるなと云つて念を押して産室に入つた。夫は心配で

たまらないのでそつと覗いてみると、中では恐ろしい大蛇が赤子を眞中にしてとぐろを巻いてゐた。男はあまりの事に驚いたが、ひそかに引返して黙つてゐた。七日経つと女はきれいな男の子を抱いて出て来て、さめざめと泣いた後、正體を見られた上はもうここには居られないと云つて、子供を置き泣く時にはこれを嘗めさせて下さいと左の眼の玉をくりぬいておいて行つた。

子供はその玉を嘗めて育つたが、日数が経つて眼玉はだん／＼小さくなり、遂に無くなつてしまつた。父親は子供を負うて山奥の沼へ尋ねて行つた。すると大蛇が出て来て更に右の眼玉をくりぬいて渡し、沼のほとりに鐘をつるして、明け六つ暮れ六つを知らせてくれと頼んで、沼の中にかくれてしまつた。其後父親は沼の側の寺に鐘を納めて時刻を撞いて貰つた。

子供は大きくなつて生ひ立ちを知り、沼に母を迎へに行くと今度は盲の人間の姿で出て来た。おぶつてつれ歸り孝行をした。

青森縣

「蛇の眼の玉」 外一話。

岩手縣 江刺郡

「母の眼の玉」 「例出」

「種貫郡」

——岩手縣江刺郡——
五戸の昔話

聽耳草紙 一八二

昔研 一ノ四五

「蛇のコケラ玉」

蛇報恩譚・犬猫鼠の話となる。

秋田縣 鹿角郡

「子供育て」

蛇女房の破片か。

福島縣 名取郡

新潟縣 佐渡

「蛇妻」

これは蛇蟬入とよく似たるものあり。鶯の卵の挿話など、親子愛情譚とは別なり。

福井縣 三方郡

「盲の水の神」

木挽が美しい湖の魚にみいられて湖に入つてしまふ。妻子に眼の玉を残す。

女房にはあらず、父方の話としたり。

石川縣

「蛙のお禮」、「助け婆」の二話。

長野縣

破片なり。

昔研 一ノ二二二

郷土の傳承 一七三

磐城昔話集 八・一〇三

昔研 二ノ二七九

昔研 一ノ三四七

江沼郡昔話集 五一・六四

小縣郡民譚集 二〇〇

岐阜縣 飛驒

「三井寺の鐘」

これは昔話。或はかりものか。

京都府 南桑田郡

「盲の水の神」

乳房の代りを三度まで、始め二度は眼玉、三度目は臍。

廣島縣 御調郡

「盲の水の神」

幸福なる婚姻

ひだびと 五ノ二ノ三四

ひだびと 四ノ一〇

静岡縣傳説昔話集 四三二

静岡縣傳説昔話集 四三二

同書 一六九

昔研 二ノ四三〇

昔研 一ノ四二九

發端無く産屋覗きの條より。

廣島縣 高田郡

徳島縣

前段薪を川に投げる龍宮女房型で注目すべき結合。目玉をなめて成長した子、五才の時京の三問堂の本尊となる。

福岡縣 企救郡

「蛇の母」

型通りなれど、最初の玉が片眼なることを云はず。

長崎縣

その一「盲の水の神」 雲仙噴火の原因を説明する話。

その二 蛇報恩譚。婚姻のこと無し。

その三 海蛇を助けたお禮。

その四 傳説の形となつてゐる。

長崎縣

「蛇嫁入」 絲と針の挿話あり。

鹿兒島縣

喜界島昔話集 二九

蛙 女 房

主人公はろうそくや、雨ふりの夜泊めて呉れと云つて来た女を

女房にする。幾日経つても飯を食はぬ。ある日親の百ヶ日だといふのでろろそくを持たせて歸し、あとをつけて行くと池の中へ入つて行つた。そのあと、澤山の蛙の鳴聲がするので、女房は蛙であつたことに気がつき、池に石を投げ込んで歸つた。

夕方女房は歸つて来て、法事の最中に大地震が起り、死人やけが人が出来た事を語つた。男がよく見ると妻は蛙であつた。

——山形縣東田川郡——

青森縣 八戸

昔研 二ノ八四

蛙が亡くなつた妻に化けて来て、度々神様を見に行く話。

破片なり。

山形縣 東田川郡

昔研 二ノ三一七

〔例出〕

喰はず女房の話の間に挿まつてゐる。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 一三

新潟縣 佐渡

昔研 二ノ五一一

蛙女房の如し。池に石を投入れられて跛となつた蛙の母親が子を殘して去る。眼玉の悲劇を伴へり。

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 二八

〔河鹿の嫁〕

蛙が蛇に吞まれようとして居るのを、或百姓が助けようと思つて、蛇に娘をやるからと約束をして歸つた。父親の心配してゐるのを見て三人の娘は氣をもむが、上の二人は蛇の嫁になる事を承知しない。末娘が目涙をためて、嫁く事を承知し、瓢箪を千と針千本を欲しいといふので、百姓は町に行つて調べてやつた。晩になると蛇は立派な侍となつて、澤山の家來をつれて娘を買ひにやつて来た。娘はつれられて、野山を越えて山奥へ入つて行くと、千匹の蛇の仲間がうよ／＼として、娘を吞まうとして待つてゐる。娘は、吞まれる前に一つだけ頼み事があるとて、千の瓢箪を池に沈ませ、千本の針を浮ばせてくれと云ふと、千匹の蛇は池の中にとび込んでやつて見るが、へと／＼に疲れてしまつた。そのすきに娘はそこを逃げ出して歸つたが、途がわからなくなつて、或一軒の家でお婆さんが絲をつむいで居る所へ行つて泊めて貰つた。お婆さんは喜んで娘をとめてやり、御馳走をこしらへてもてなした。恰度殿様が嫁探しのおれを出してゐる時であつたので、婆さんは娘をつれて町のお城に行くと、澤山の娘達が集つてゐるが、その中から選ばれて殿様のお嫁になる事になり、國の親

達もよびよせて一生安樂に暮した。あの親切なお婆さんは百姓の助けた蛙であつた。

青森縣 下北郡

——栃木縣芳賀郡——

旅傳 九ノ二

〔メドチの盃〕の傳説。

同縣

津輕昔話集 五七

岩手縣 上閉伊郡

五戸の昔話 一五・一八

〃

遠野物語 一三六

〃

聴耳草紙 一七七・一七九

〃

同書 一六八

〔蛇の嫁子〕

老嫗夜譚 二〇・三八

蛙を助けて蛇聲入。鴻の卵をとつて来てくれと、蛙が婆に化けて

來ていふ。

〃 下閉伊郡岩泉

聴耳草紙 一七五

〃

紫波郡昔話集 八三

〔娘さ通うた蛇〕

〃 西磐井郡

旅傳 一二ノ一一

秋田縣 仙北郡角館

聴耳草紙 一七三

〔蛇嫁〕

幸福なる婚姻

茂木昔話集 三一・六三

郷土研究 一ノ八ノ四四

宮城縣 仙臺

郷土の傳承

〃 名取郡

磐城昔話集 一五・一五

福島縣 南魚沼郡

昔研 一ノ四六九

〔蛙の恩返し〕

〃 南蒲原郡

加無波良夜譚 二一〇

〔香の木の卵〕

〃 佐渡

第二昔話號 四八

〔蛙のだんぶくろ〕

福井縣 阪井郡

昔研 一ノ三一

石川縣

鳳至郡誌 九二五

長野縣

小縣郡民譚集 一六六

〃 北安曇郡

小谷口碑集 一四五

〃 北佐久郡

昔研 一ノ三六三

〔長者の娘と池の主〕

〃 上伊那郡

第一昔話號 五四

〃

昔ばなし 七・一三六

栃木縣 芳賀郡

第二昔話號 一七

〔瓢箪千と針千本の話〕〔例出〕

沼の古鯉が娘に通うた話。

岩手縣 膽澤郡

黄金の馬 一三一

長崎縣

島原民話集 四一

「瓢箪と河童」

長崎縣 壹岐

旅傳 九ノ四ノ一七三

河童と田の水の約束をして。

猿 聲 入

昔百姓の爺があつた。或年日照りで干上つてしまつたので、爺は困つて田の水さへかけてくれる人があつたら、三人の娘の一人を呉れると獨り言を言つて居ると、藪から猿が出て来て、山奥へ行きどん／＼田へ水をかけてよこした。爺は約束したものゝ心配で仕方がないので、夕飯も食べないで寝てしまつた。一番上の娘が御飯をすゝめに來たので、その話をすると怒つて逃げてしまつた。次の娘も怒つたが、末の娘に聞くと、私が嫁に行くから早く起きて御飯をおあがりなさいといふ。爺は喜んで起きて御飯を食べた。次の日になると猿は赤い袖無しを着て娘を貰ひに來た。そしてつれ立つて山奥の家に行き、仲よく暮して居た。次の年の春午栗葉餅を持つて爺の家に来ることになつた。餅をお重に詰めよ

うとすると重臭い、鍋に入れると鍋臭いとて、遂に臼のまゝ背負つて行く事にした。途中の川の側に櫻の花がきれいに咲いて居るので取つて土産にしようとして、臼を下さうとすると餅が土臭くなるといふ。遂に背負うたまゝで梢へ梢へと登つて行つたので、枝が折れて川の中へ眞倒さまに落ちて流れて行つた。そして
猿澤に流るゝ命惜しくなしあとで御姫はお泣きやるらんと詠んだ。
娘はとつと家に歸つて行くと、爺は喜んで泣いた。姉達二人は親不孝の罰が當つて鼠になつた。

青森縣

——山形縣最上郡眞室川村——

津輕昔話集 二八

津輕昔話集 二八

八戸市外

昔研 二ノ一八八

田の水掛け・粟の草取り・大風呂敷と藤の花の三話あり。

昔研 一ノ三〇九

岩手縣 上閉伊郡遠野

聽耳草紙 二四六

「猿の聲」

「坊様と摺臼」

同書 四七二

淨瑠璃を朝まで語り明したら娘をオカタにやると云はれた坊様、

首尾よく貰つたがだまされて川に流れて死ぬ。辭世歌を伴ふ。

この話眞澄紀行にもあり。猿聲入も或は却つてこの方より影響あるか。

岩手縣

柴波郡昔話集 一一一

「猿の嫁子」

「 膽澤郡

黄金の馬 一二七

秋田縣 角館

聽耳草紙 二五四

「 平鹿郡淺舞町

昔研 二ノ二一八

「一粒・千粒」

山形縣 最上郡

昔研 二ノ一八四

〔例出〕

「 北村山郡西郷村

同書 二ノ二一五

「水引きの話」

宮城縣 桃生郡

郷土の傳承 二ノ一一九

福島縣

磐城昔話集 一五・一〇五

新潟縣 白根町

國民童話 一九二

「 佐渡

昔研 一ノ一八五

新潟縣 南蒲原郡

越後三條南郷談 一一五

「爺と猿」

「 加無波良夜譚 一五

幸福なる婚姻

新潟縣 南蒲原郡

昔研 一ノ二一三

中魚沼郡

第一昔話號 四八

北蒲原郡

高志路 六〇

この話曰挽歌になつてゐる。昔話の歌になる例「莊内俚語集」にも二三見ゆ。

石川縣

江沼郡昔話集 一

「三人姉妹」サルサワの話。

「澁紙に包まれた娘」

同書 一二四

火焚き娘譚の前段、猿とも蛇とも云はず。

長野縣

小縣郡民譚集 一七二

北安曇郡南小谷

北安曇郡郷土誌稿 二ノ一六一

上伊那郡

昔ばなし 三九・七七

「娘と猿」

笑話化してゐる。

栃木縣 芳賀郡

下水内郡誌 一九八

下水内郡

第二昔話號 一六

岐阜縣 吉城郡

茂木昔話集 三〇

ひだびと 三ノ六ノ二八

同書 五ノ二ノ三六

完形載せず、存在を知るのみ。

- 静岡縣 賀茂郡 静岡縣傳説昔話集 四三四
- 滋賀縣 高島郡 昔研 一ノ四七九
- 兵庫縣 神崎郡 第一昔話號 一ノ六七
- 城崎郡 昔研 二ノ三六八
- 水上市郡 旅傳 一〇ノ六
- 大阪府 葛畑 口承文學 一〇ノ二九
- 和歌山縣 伊都郡 同書 九ノ一五
- これは破片。
- 備中某地 民族 一ノ一六二
- 廣島縣 山縣郡 安藝國昔話集 一九・二五
- その一は猿聲話。その二は鹿聲話。
- 高田郡 同書 二〇
- 安佐郡 同書 二二
- 佐伯郡 藝備「昔話の研究」一九以下
- カチ／＼山と發端同じ。
- 比婆郡 同書 二〇
- 聲は猪。カチ／＼山の狸のやうにして焼殺す。
- 廣島縣 世羅郡 同書 二二
- 猪聲。水をのんでよい男になる。
- 岡山縣 邑久郡 四〇
- 山口縣 岡山文化 三ノ五
- 徳島縣 三好郡 防長文化 一ノ二
- 同縣 昔研 二ノ四六九
- 傳説なり。 大阿波の横顔 四三二
- 香川縣 高松 第二昔話號 一六
- 志々島 昔研 二ノ九〇
- 「猪の聲入り」 福岡縣昔話集 二一四
- 福岡縣 築上郡 昔研 一ノ四二
- 熊本縣 阿蘇郡 同書 一ノ九〇・九一
- 二話あり。その一は午夢摺り、その二は田の水入。 同書 一ノ二七〇
- 阿蘇郡各村の例をあぐ。 昔研 二ノ四二
- 天草郡 昔研 二ノ四七六
- 長崎縣 北高來郡 同書 一ノ二六八
- 鹿兒島縣 喜界島昔話集 三一
- 田に水を入れてくれた田螺が後に立派な男になる。後者は普通の 甌島昔話集 七二・八一

猿聲入。

○参考

- ×日本童話集 四七四
- 藤袋の乙女 お伽草子からか。
- ×支那にも猿聲入あること。民俗學 五ノ一一ノ二五
- ×日本童話會玉集 下ノ四九三

まゝ子話

糠福米福(粟福米福)

昔ある所に姉妹あり。姉を米囊といひ繼娘、妹を粟囊といひ本子であった。母親は姉娘を憎んでいつもいぢめて居た。ある日村の娘等と栗拾ひに行く時、姉には底の腐つた古帆を持たせ、妹には新しいコダスを持たせてやつた。夕方になつても米囊の袋はいつばいにならないので、他の人達は皆歸つてしまつて姉娘だけ残された。お腹がすいたので谷に下りて水を飲んでゐると、もとの母親が白い小鳥になつてとんで来て、事のあつた時には着よとて小袖と、それに葵の笛と新しいコダスとを呉れた。娘はそれに粟の實をいつばいにして家に歸つた。

まゝ子話

祭の日が来ると、母は妹によい着物を着せ、姉には麻絲を三結び續んだら来てほしいと云つて、祭見に出かけた。姉は友人の援けを得て仕事を終へ、小鳥に貰つた小袖を着て笛を吹きながらお宮に行つた。お宮では母と妹とが人形舞を見てゐた。姉はまんじうの皮や、竹の皮を妹に投げつけると頬に當り、妹はそれで姉に氣付いたが、母親は姉には用事を澤山云ひつけて来てあるからと姉の來てゐる事を本當にしなかつた。

姉は先に歸つて大急ぎで着物を換へて待つてゐると、母と妹が歸つて來た。翌日隣村の人が姉を嫁にほしいと云つて來ると、母は妹の方をやり度いといふ。そこで姉妹二人はお化粧のしくらべをしたがやはり姉の方が美しいので姉が貰はれて行つた。妹は自分も早く姉の様な立派な鴉籠に乗つて嫁入りし度いといふので、母が支度をして荷車に妹をのせて、嫁は要らぬかと呼んで歩くうちに、車からころげ落ちて妹は田に落ちて田螺となり、母は堰に落ちて堰具になつてしまつたといふことである。

青森縣 (例出)

八戸

四一

- 青森縣津輕七ツ石——津輕昔話集 七二
- 津輕口碑集 二二・二三
- 日本昔話集 一二二
- 昔研 二ノ一八八

四話あり。

岩手縣

和賀郡

糠袋・朱皿・椎拾ひ・見えずのかいどり・雀の枝折り・田螺となる結尾。

「糠ん福に米ん福」

「糠袋朱皿」

岩手縣 膽澤郡

「糠袋紅皿」

「米ぶき粟ぶき」

「米ぶく粟ぶく」

「米ぶき粟ぶき」

「糠袋紅皿」

「米ぶき粟ぶき」

「糠袋紅皿」

「米ぶき粟ぶき」

「糠袋紅皿」

四二

新潟縣 南蒲原郡

二話あり。

一四四のものなど兄弟話と續かず、堺目は明らかなり。

長野縣

南安曇郡

「糠と米」

山梨縣 西八代郡

「雪娘鴉娘」

上總

「クシメトクメ」

茨城縣 遠敷郡

静岡縣 小笠郡

三話あり。

静岡縣 庵原郡

滋賀縣 高島郡

「まゝ子とほん子の話」 二話あり。

奈良縣 添上郡

「ウツボグサの花」

花の形状の由來に附さる。

兵庫縣 美方郡

加無波良夜譚 六六・一四四

下水内郡誌 一九六

第一昔話號 五三

續甲斐昔話集 一五〇

民俗學 四ノ三

口承文學 八ノ八

静岡縣傳説昔話集 四〇六

同書 三九八

昔研 一ノ四七九

大和の傳説 二九八

昔研 二ノ三二六

四話あり。

岩手縣

和賀郡

糠袋・朱皿・椎拾ひ・見えずのかいどり・雀の枝折り・田螺となる結尾。

「糠ん福に米ん福」

「糠袋朱皿」

岩手縣 膽澤郡

「糠袋紅皿」

「米ぶき粟ぶき」

「米ぶく粟ぶく」

「米ぶき粟ぶき」

「糠袋紅皿」

「米ぶき粟ぶき」

「糠袋紅皿」

「米ぶき粟ぶき」

「糠袋紅皿」

四二

新潟縣 南蒲原郡

二話あり。

一四四のものなど兄弟話と續かず、堺目は明らかなり。

長野縣

南安曇郡

「糠と米」

山梨縣 西八代郡

「雪娘鴉娘」

上總

「クシメトクメ」

茨城縣 遠敷郡

静岡縣 小笠郡

三話あり。

静岡縣 庵原郡

滋賀縣 高島郡

「まゝ子とほん子の話」 二話あり。

奈良縣 添上郡

「ウツボグサの花」

花の形状の由來に附さる。

兵庫縣 美方郡

加無波良夜譚 六六・一四四

下水内郡誌 一九六

第一昔話號 五三

續甲斐昔話集 一五〇

民俗學 四ノ三

口承文學 八ノ八

静岡縣傳説昔話集 四〇六

同書 三九八

昔研 一ノ四七九

大和の傳説 二九八

昔研 二ノ三二六

「糴子の栗拾ひ」

鳥取縣 八頭郡

岡山縣

山口縣

長崎縣 北高來郡

「ヲウフとヘゲセン」

「千代ごこ」

「千代ごこ」

鹿兒島

〇参考

×ユエ 一四一

×朝鮮の例 日本昔話集 下ノ六二

「バツヂとコンダチ」

鳥の援助あり。

×旅傳 四ノ六ノ八 フロイド分析論。

紅皿 缺皿

米福糠福系統の昔話。その項参照。

岩手縣 稗貫郡

まゝ子話

昔研 一ノ二七三

姉妹の名は糠袋・紅皿となる。

東京都 北多摩郡

静岡縣 濱松市

和歌山縣

〇参考

×朝鮮 日本昔話集 下ノ六〇

×南方隨筆 六八 八〇以下

×西陽雜俎續集

×日本童話集 一三七 鉢かつぎ。

×ヤーマズリー 二一三 マガラシイ民譚。

皿々山

昔二人の姉妹があつて姉は先妻の子である。父の留守中に二人は水汲にやられた。妹はいゝ杓子ですぐ汲めたが、姉のはこれであるので仲々汲めなかつた。そこへ殿様の行列が通りかゝつたが、殿様は姉娘が氣に入ってお城へ連れて行かうとする。姉は母にきて下さいといふので家來が母の所へ行くと、母親は妹娘の方が可愛いのでどうでも妹を差上げたいと言ふ。家來は歸つて殿様

にその事を申上げると、それでは二人の娘の智慧比べをしようといふ事になつた。さうして繼母にお盆と皿と鹽と松を用意させ、

盆の上に皿を置きその上に鹽、その上に松をおいて、これで歌を詠んで見よ、上手な方をお城につれて行くと云はれた。妹娘は

盆の上に皿ある、皿の上に鹽ある、鹽の上に松ある

と云つた。姉娘はしばらく考へてゐたが

盆さらやさらちゆう山に雪ふりてそれを根として

そだつ松かな

と詠んだので、姉娘の方をお駕籠にのせてお城につれて歸つた。

繼母は怒つて、妹を白の下にしてころ／＼ころがして歩いたので、眼がとび出して田螺になつてしまつた。

——長野縣北佐久郡——

青森縣

津輕昔噺集

長野縣

小縣郡民譚集 二二七

北佐久郡

昔研 一ノ五六二

「娘と田螺」〔例出〕

新潟縣 南蒲原郡

同書 一ノ二六・七五

佐渡

第一昔話號 五一

佐渡島昔話集 一四・一五

その二(十五頁)の話はやく趣向あり。娘の名もおひらにおつぽ、この結構は素人にあらず。

岐阜縣 吉城郡

ひだびと 五ノ五

兵庫縣 美方郡

昔研 二ノ三二五

「繼子の話」

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 四

福岡縣 遠賀郡

福岡縣昔話集 二二

大分縣 杵築町

昔研 一ノ五六七

熊本縣 阿蘇郡

〃 一ノ二七一

〃 玉名郡

〃 一ノ二二四

〃 飽託郡

〃 二ノ二六二

長崎縣

壹岐島昔話集 一一三

〃

第一昔話號 八四

鹿兒島縣

甌島昔話集 九一

〃 参考

日本童話集 一五九

皿々山各地の歌異同 昔研 一ノ二一七

岩手縣 上閉伊郡

聴耳草紙

「蛇の梯子」

同縣

柴波郡昔話集 六〇

蛇聲入につゞく。

秋田縣 仙北郡

角館民俗資料 二〇九

痕跡のみ。

福島縣

磐城昔話集 二〇・一一一

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 一一七

「ばゞつ皮」〔例出〕

〃

同書 一七八

「巻の皮」この話蛇聲入につゞく。

〃

佐渡昔話集 二二〇

「蛙のだんごくろ」

石川縣

江沼郡昔話集 三

「三人姉妹」と題される。猿聲入の話のつゞきとして存す。

長野縣

小縣郡民譚集 一七〇

「ウバガラ」

甲斐

國民童話 六六

〃 西八代郡

續甲斐昔話集 二〇四

青森縣 八戸

——新潟縣南蒲原郡——

昔研 二ノ三ノ二四

まゝ子話

四五

姥皮

ある金持の嫁が一人の娘を残して死んだ。後に娶つた妻には澤山の子供が出来たが、繼母は先妻の子を憎んで乳母に言ひつけてどこかへやつてしまふことにした。乳母は娘に「ばゞつ皮」といふものを呉れて、危いことに會つた時はこれを被れ、と教へてくれた。娘はそれを被つて年寄りの姿となつて家を出て、彼方此方歩いてゐるうちに、ある町の旦那の水仕女に雇はれる事になつた。娘はいつもばゞつ皮を被つて居たが、風呂に這入る時はぬいで居た。或時、その脱いだ所を若旦那が見つけて、その爲とらうとう病氣になつてしまふ。旦那は心配して占ひ師に占はせるとうちの中に氣に入つた者があるからそれと添はせたらすぐ癒るといふ。そこで家中の女一人々々に薬をすゝめさせるが、若旦那は氣に入らぬ。最後に水仕婆さんの番になつた。婆さんは自分などが行つてどうしようかと云つて行かうとしなかつたが、すゝめられて若旦那の部屋に行くと、すぐ見破られてしまつた。ばゞつ皮を脱ぐと美しい娘になつたので、嫁になつて幸福に暮した。

蛇の所へ嫁に行きがけにガールメン(蛙面)をもらふ。

静岡縣 庵原郡

静岡縣傳説昔話集 四二二

蛇に吞まれた蛙の恩返し。婆に化けて来て、一本の汚い手拭をくれる。

岡山縣

御津郡昔話集 八七

「蛙の頭巾娘」

大分縣 北海部郡

昔研 一ノ一八一

「がつかい長者」

豊後

民俗學 五ノ一〇ノ八八

こゝは猫の皮。

鹿児島縣 喜界島

昔研 一ノ二六四

狐皮とて一種のかくれみのを狐が呉れる話あり。

○参考

× 童話寶玉集 下ノ一八八

× ヤーグレイ 一〇一

× 佳氣春天 三二五

× 始良地方の研究 二ノ三五二

上井村諏訪神社縁起

火 焚 き 娘

姥皮系統のもの。

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚 一五二

「鹿娘」

石川縣

江沼郡昔話集 一二四

「遊紙に包まれた娘」

糠入につぶく。

濱松市

静岡縣傳説昔話集 四一五

オトミは繼娘、オイチ・オサンは本子の三人の娘あり。オトミは廣い田を耕し、疲れて亡母を憶ふと母に似た觀音様が現はれ、松の根を掘つて見よといふ。掘ると御馳走が出たので食べる。本子二人は居眠してゐるが、オイチは一ツ目だから見えなすが、オサンは三ツ目で目をあけてそれを見てゐて繼母に云ひつける。怒つて鉄でオトミを打つと柄が二つに折れた。神のお告でこれを裏の畑に埋めると、金の木が生え、噂をきいてオトミを殿様が嫁にもらひに来る。
よほど變つた形、或は古い型か。

灰 坊 太 郎

火焚き娘の男型。其項參照

昔ある武家の風呂焚きに三八といふ男が居た。三八は侍であつたが、事情があつて風呂焚きとなつたのである。

或日家族がみんなお能を見に出て行き、夕方歸る頃までに風呂を沸かして置けと命ぜられた。その後三八は風呂を沸かして自分が這入り、立派な侍の仕度をしてお能の席に行つた。そして飛入りとして一さし舞はせてもらった。その能は特にすぐれてゐたので主人はじめ皆感心しないものは無かつた。三八は一足先に家に歸り、もとの風呂焚きの姿をしてゐると皆が歸つて来た。そしてお能の話をして、飛入りの侍の能が立派であつたと賞めるのであつた。その翌日からこの家の娘が病氣になり御飯も食べない。醫者にかゝつても病は分らず、易者に見せると、家の誰かゞ御飯を持つて行けば食べるし、その人が看病すれば癒ると云ふ。家中の者が順々にすゝめ、最後に風呂焚三八が持つて行くと、娘は意外にも御飯を食べ、三八が看病して次第に快くなつた。

——長崎縣壹岐島——

岩手縣

江刺郡昔話 六四

まゝ子話

四七

「花若ばなし」

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚 二二五

「笛吹き勘之丞」

結構は恐らく語り物と思はれる。

同縣

聽耳草紙 一六四

「扇の歌」

〃

紫波郡昔話集 六〇

「姥皮」

これは女の形。姥皮參照

新潟縣 南蒲原郡

昔研 一ノ二二八

「狼次郎」

新潟縣

佐渡昔話集 五六

「播磨絲長」

この話には大分加工がある。即ち座頭の作なることを知る。

石川縣

江沼郡昔話集 三九

「首吹きハイボ」

發端やゝ奇異なり。

長野縣 上伊那郡

昔ばなし 一四九

岡山市外今村

第二昔話號 八二

御津郡昔話集 六八

「九ツ山一ツ山」難題解の條参照

廣島縣 比婆郡

藝備「昔話の研究」三四

主人公が權助といふ名になり、話が半分違つてゐる。

徳島縣 三好郡

昔研 二ノ五二七

福岡縣 京都郡

福岡縣昔話集 一八

繼子たる主人公の男女不明なれど女らしい。

長崎縣

島原民話集 三九・七九

同縣

壹岐島昔話集 一九

「風呂焚三八」〔例出〕

鹿児島縣

喜界島昔話集 四五・四七・四八

前二つは「灰坊太郎」殘る一つは「難題解」

沖永良部島

おきえらぶ昔話集 六

「猫の面」

同書 一三一「灰坊」二三〇「鬼の姉」参照

○参考

×東風異聞 六七

×大分縣北海部郡の「がつかい長者」「蛇聲入」蛇皮の項参照のこと。

×竹芝長者の火焚屋の衛士。

×高木敏雄氏傳説集 一八九「兵坊太郎」は狼神退治の犬の名

で、信洲上伊那赤穂村光前寺、義犬塚の由來の話なり。

繼子の椎拾ひ

繼母が繼子には底の破れたびくを、本子には丈夫なびくを持たせて栗拾ひにやる。本子は一ぱいになつて歸るが、繼子のはいつまでも一杯にならない。日が暮れて泣いて居ると向ふに火が見える。行つて見ると一軒家に婆様が糸をひいて居た。其處は鬼の棲家だといふが泊めて貰ふ事にした。婆様は、鬼に食はれるからと隠れ簀笠を與へて庭の隅に隠した。鬼が歸つて来て人臭い／＼といふが見つかからない。婆様は鬼を寝せてその間に娘を逃がした。娘は隠れ簀、隠れ笠を持って居たため、殿様に褒められ、褒美を貰つた。

——長野縣上伊那郡——

秋田縣 仙北郡

昔研 一ノ五〇七

福島縣

磐城昔話集 二・一一一

福井縣 坂井郡

昔研 一ノ二九

「繼子話」と題し六話を載す。

長野縣 上伊那郡

民俗學 一ノ四

昔ばなし 五一

〔例出〕長者の嫁の條無し。

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 一四

「粟ぶき米ぶき」の話の後につく。

岐阜縣 吉城郡

ひだびと 五ノ五

「三枚のお札」

二つの話の結合なれば不注意によるものかと思はれる。

郡上郡

昔研 二ノ二六五

「繼子の栗拾ひ」

静岡縣 賀茂郡

静岡縣傳説昔話集 三九二・三九四

三九二のものは地藏淨土。

甲斐のものとしてゐる。

「阿倍郡長田村

静岡縣傳説昔話集 四〇〇

底無し袋を持った姉の後より妹が栗を拾ふところまで。

周智郡城西村

同書 四〇九

コウセンの辨當と梨の辨當。

大阪府 中河内郡

昔研 一ノ四七九

「まゝ子とほん子の話」二話あり。

和歌山縣 田邊

郷土研究 三ノ三

(南方氏文中)

有田郡

紀伊有田郡童話集

和歌山縣 伊都郡

昔研 一ノ五四九

兵庫縣 美方郡

口承文學 一〇ノ二一

椎拾ひに行つた姉妹。日が暮れて姉は地藏の所へ泊り、豆を貰つて歸る。妹は眞似そこなひ、鬼に食はれる。

前段に妹の親切幽かに見えて結末が無い。

廣島市

安藝國昔話集 四九

「お鶴とお龜」

徳島縣 名西郡

昔研 一ノ一三一・一三二

二話あり。

「椎拾ひ」

幾分童話化してゐるが、もとはこんな單型があつたのかもしれない。

「鬼」

牛方山姥に似てゐる。

美馬郡

阿波祖谷山昔話集 一六・一三一

福岡縣 糸島郡

福岡縣昔話集 二五

地藏淨土の話になつて行く途。この方が前か。

大分縣 北海部郡

昔研 一ノ一七九

速見郡

昔研 一ノ五七一

四九

まゝ子話

四九

熊本縣 玉名郡

昔研 一ノ二二五

「底無し袋」

長崎縣 神崎郡

旅と郷土 一號

佐賀縣 佐賀郡

昔研 二ノ三二二

「ほげ袋」

爺と婆との稚拾ひの話。

この話のもと猿地藏の如く、笑ひ笑はぬ心がけの差に力を入れたか、或は又繼子の點を忘れたか。

同縣

壹岐島昔話集 六一

鹿児島縣 喜界島

昔研 一ノ二三一

「神様と握飯」

これは薪拾ひ。姉は山へ薪拾ひに行き鬼の寶を得、妹は眞似て失敗する話。

○参考

靜岡縣傳説昔話集 三九九 「目籠で水汲む話」あり。灰娘の一挿話ともなり、又繼子の笛の話にも入る。二つの話の系統察せられる。

底無し袋

まゝ子の稚拾ひ系統。その項参照

佐賀縣 佐賀郡

昔研 二ノ三二二

「ほげ袋」

熊本縣 玉名郡

昔研 一ノ二二五

鹿児島縣

昔研 一ノ二六九

「まゝ子いぢめ」その二

○参考

昔話研究 一ノ四四四 解説あり。

お月 お星 (お銀小銀ともいふ)

この名あるは朝鮮のやうに天に昇つた話があつたからか、或は「天道さん金の綱」の昇天と因みあることを示すものかも知れぬ。

妹が姉をかばふ點に於て、縁福話と區別すべきである。又立派な語り物となつてゐる點に於ても。

昔ある親方衆におりんこ、こりんこ、といふ二人の娘があり、

おりんこは先妻の子であつた。父親が或時上方参りに行く事にな

り出かけた留守に、繼母はおりんこが憎くてならず、大きな箱を

こしらへておりんこを入れて林の中に生埋めにしてもらふことに

した。妹はこれをきいてこつそり箱の底に穴をあけて貰ひ、姉に

は芥子の種をもたせてやつた。

姉は箱の中から芥子種を少しづゝこぼし乍ら林に運ばれて行つ

て埋められた。やがて芥子の芽が出て花が咲くと、妹はそれをた

どつて林の中に来て姉を呼び、來かゝつた爺さんと共に姉をほり

出して二人は爺さんの家に厄介になつてゐた。

やがて父親が歸つて、二人の居ないのを悲しみ、遂に盲目にな

つて順禮の姿で歌をうたひ乍ら娘等を捜しに出かけた。

或村に来てはからずも姉妹にめぐり會ひ、おりんこはなつかし

さのあまり大聲で父を呼ぶとその拍子に眼があいた。それから三

人で家に戻つて目出度く暮した。

——秋田縣平鹿郡——

昔研 二ノ一九〇

青森縣 八戸市

津輕昔話集 五〇・四七

「かり子と瓜子」

同縣

津輕口碑集 一七

岩手縣 盛岡

周桑郡郷土叢報 一ノ三

「茶筌子・茶碗子」

岩手縣 和賀郡

昔研 一ノ二二〇

「鉦叩き鳥」

同縣

昔研 一ノ一七四

「お月・お星」

同縣

昔研 一ノ三八〇

上閉伊郡

口承文學 一〇ノ一二

上閉伊郡

聴耳草紙 三九五

岩手郡水澤町

同書 四〇〇

「葦子・葦子」

同縣

老嫗夜譚 一三九

同書 一四九

茶わん子といふ繼子。妹は無し、たゞ籠の下を焚き、籠で水汲み

をする。婆様が來て教へてくれる點、灰娘と近きのみ。

岩手縣

紫波郡昔話 一五〇・二〇一

「お月・お星」一五〇

同縣

紫波郡昔話集 六八

「憐れな姉妹」二〇一

同縣

膽澤郡昔話集

秋田縣 鹿角郡

黄金の馬 一三四

「あらんこ・こらんこ」

昔研 一ノ九二

平鹿郡

昔研 二ノ三六六

「おりんこ・こりんこ」〔例出〕

宮城縣 志田郡

昔研 一ノ五四九

桃生郡

郷土の傳承 二

福島縣

磐城昔話集 二二・二六・一一三

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 七九・一九一

「お杉・お玉」二話とも同名。

後の話は糠福話に近い。二話の関係がわかる。

同書 一八三

「おつる・こつる」

福井縣 遠敷郡

口承文學 八ノ八

越前

國民童話 一七四

石川縣

江沼郡昔話集 二九

「おりん・こりん」

長野縣

下水内郡誌 一九七

傳奇型に改作。妹の智慧で兄を救ふ。

小縣郡民譚集 二四七

兄と妹との例、木につるされた兄が犬梯子で助けられる話。

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 五九・二二四

「福原長者」五九

語りもの臭を帯びてゐる。

「繼子の釜ゆで」二一四

静岡縣 阿倍郡

静岡縣傳説昔話集 三九七・四〇〇・四〇二

岐阜縣 吉城郡

ひだびと 五ノ八

二話あり、ともに簡略。山に捨てられる條のみ。

福島縣 比婆郡

藝伎「昔話の研究」三一

娘の名はお銀だが筋は手無娘。

高田郡

安藝國昔話集 四七

「お鶴じ・お虎じ」

廣島市

同書 四七

「お鶴とお龜」

福岡縣 鞍手郡

福岡縣昔話集 五四

姉の名は春、妹は秋。

日まさり川

繼子いぢめの昔話。糠福米福・お月お星など、同系。その項参照

のこと

繼子いぢめにもこんな名があつたか。

長野縣

小縣郡民譚集 二二五

繼娘の姉が日まさり川に捨てられると、妹が毎日食事を運びつゝ、どこまで水がついて来たかを聞く。遂に姉は溺れて死ぬ。

○参考

ブルガリヤ古譚にも「水はどこまで」あり。

繼母の化物

お月お星の話の世間話化したもの。

静岡縣 周智郡

静岡縣傳説昔話集 四〇八

學校で居睡りばかりしてゐる子の原因をしらべると、繼母が化物に假装していぢめてゐたといふ話。

繼子話の一。

鹿兒島縣 喜界島

島 一ノ四六七

「横穴」

井戸に入れられた繼子が、下から上げる畚の土に、近所の爺から教へられた通り金を一つづつ上げて上げ、そのひまに横穴を掘つて逃げる話。

繼子と笛

母の亡いお園の所へつれ子をした繼母が来た。父が京に上つた留守に、釜に粥で水を汲ませ、釜の下を焚かせてお湯がわくと、一本の丸太棒を釜の上に渡して、父に逢ひたかつたらこの棒の上を渡れと云ふ。お園が丸太の中程まで渡つた時に、丸太を揺り動かして沸き立つ湯の中に落してしまつた。父が歸つて娘の行方を尋ねても母は知らぬと云つてゐる。庭へ出ると一羽の鶯が娘を埋めた所からとび出して「粥で千回水を汲み、あげくのはてに湯で

千把萱 (東奥異聞 一四五)

繼子花

まゝ子話

煮られ、こんな姿になりました」と鳴く。母は驚いて箒で追出したが鶯は相變らず鳴く、庭からお園の白骨が出たので、母親は役所につき出された。

——福島縣石城郡——

青森縣

津輕昔話集 一九・一六・二二・四八

津輕口碑集 一九

昔話集四八の「ソドメと燈石」は、お銀小銀との中間の話として珍重すべきものである。山に捨てられた繼娘を妹が助け、鬼婆の宿にだどりつく、旅で水を汲めといふ。鳥の啼聲に教へられて汲む。鬼婆は二人を煮殺さうとして却つて自分が死ぬ。そこへ父母が尋ねて来る。

混亂がある様に思はれるが、その後段は繼母話以前のものであらう。

青森縣 八戸市

昔研 二ノ一九〇

「繼子と鳥」

岩手縣 稗貫郡

口承文學 一〇ノ一二

秋田縣 平鹿郡

昔研 二ノ三六六

「三人娘」

昔研 二ノ四五四

福島縣 石城郡

旅傳 九ノ五ノ七五

「鶯になつたお園」〔例出〕

福島縣

磐城昔話集 二五・一一六

新潟縣 北魚沼郡

五倍子雜筆 三ノ九八

實話として語られてゐる。

長野縣

下水内郡誌 一九六

灰娘話と近し。

破片。

小縣郡民譚集 二二四

「上伊那郡

昔ばなし 六五・一二一

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 六三

「三本の笛」

繼子三人を殺す話。三本の竹が生じ、切りて笛とする。歌ひ骸骨に近し。

「繼娘」

續甲斐昔話集 一四七

山へ捨てられた娘が雀に手紙をことづけて叔父に助けられる。これによつてお銀小銀と灰娘との連絡がわかる。

栃木縣 芳賀郡

第二昔話號 五一

「菊人形の話」箱に入れられて捨てられた娘の手紙を鳩がとり持つて父に知らせる話。

「京上り」

父さん戀しやチンチロリンと笛が鳴る。これなど明らかにこの文句に力を入れた話し方。

昔研 一ノ六ノ二九

鹿兒島縣

喜界島昔話集 五九

これなど日本特産かと思ふ。繼子を釜に入れる話にも、死して竹の笛となるものと、鶯の聲に鳴くものとあり。

栃木縣 芳賀郡

茂木昔話集 四〇

「不思議な尺八」

岐阜縣

うつしばな 七〇

殺した子等を埋めた所から竹が生え、歸つた父が切らうとしたら

ピーホローと鳴く聲がする。

静岡縣

静岡縣傳説昔話集 三九五・三九九

廣島縣 安佐郡

安藝國昔話集 五一

「繼子いぢめ」

阿波祖谷山昔話集 五五

徳島縣

第二昔話號 五二

香川縣高松市

「竹笛」

福島縣 浮羽郡

福島縣傳説昔話集 二〇・二二

「糸島郡

同書 二二三

大分縣

豊前民話集

熊本縣 天草郡

昔研 一ノ五二三・五五〇

長崎縣 北高來郡

郷土研究 五ノ三ノ一七五

「まゝ子話

昔研 二ノ四七二

父の土産

繼子話系統。繼子殺しの話の中に、土産のことを説くのは新しい改作か。

栃木縣 芳賀郡

茂木昔話集 四一

母の難題を隣の親切な小母さんの手傳ひで解くが、これが子供の命を救ひ得ぬことになつてゐるのは、古い分子である證據。但しこの話鳥とも笛ともなし。

手無し娘

昔お春といふ娘があつて、繼母はその子が憎くて憎くてたまらず、何とかしてやらうといろ／＼考へた末、父親に「賢いお春こと一緒に居られないから暇をください」と云つた。父親は繼母を信じてゐたので、お春を殺してしまはうと、祭見に行くこと云つてつれ出し、山の奥へ連れて行つて兩腕を斬つて、痛い／＼と泣く娘を残して山を下りてしまつた。お春は木の實や草の實を食べ生きてゐたが、或日立派な和子様に見つけられ、わけを問はれるまゝに話すと、和子様は可哀さうに思つてお春を馬にのせて館に歸つた。和子様の母親もよく世話をして娘の様に可愛がつてゐた。そのうち和子様のお嫁になつて、やがて身重となつた頃、和子様は江戸に上ることになつた。その留守に玉のやうな男の子が生れた。それを江戸に知らせようと飛脚を發てたが、その飛脚が途中で或家に寄つて水を呑んだがそれがお春の生れた家であつ

た。繼母は飛脚に用向きを聞き、お春の事を知つて急に飛脚をもてなして酔ひつぷし、状態しの文をとりかへて「鬼とも蛇とも譯のわからぬ子が生れた」と書いて入れて置いた。江戸の和子様は「鬼でも蛇でも自分の歸るまで大切に育てて置け」と返事をかいたが、飛脚は歸り途に再びお春の家に立寄り、繼母に「子供共に追出せ」といふ手紙と換へられた。母親は手紙を見て驚きお春には知らせぬ様にして、和子様の江戸から歸るのを待つたが、いつになつても歸つて來ない。そこでお春に泣き／＼手紙の事を語ると、お春も仕方なく子供を背負はせてもらつて家を出た。あてどもなく歩いて行く中になどがかわいたので、流れの水を呑まうとする。背中の子供がづ／＼とぬけて來た。驚いて無い手で押へようとしたら不思議なことに手が生えた。一方和子様は江戸から戻つて見るとお春も子供も居ない。譯をたゞすと飛脚が怪しいといふことになり、調べてみると手紙をすりかへられたことが判つたので母親は和子様にくす／＼と探して出した。流れのそばのお社まで來ると女乞食が居てお春に似てゐる。聲をかけて見るとやはりお春で手を授かつた次第を語り、大よろこびで家に歸つた。繼母と父親とはお春をいぢめた罰で地頭さまに斬り殺された。

岩手縣 稗貫郡

昔研 二ノ一九〇

鳥根縣 邑智郡

第一昔話號 七四

「繼子いぢめ」

昔研 二ノ四一四

福岡縣

福岡縣昔話集 一九

長崎縣

島原半島昔話集 四三

「手無し繼娘」

喜界島昔話集 五六

（參考）

ヤーズレー 一一九 僞手紙の條まで外國にもあるは不思議。

兄弟の優劣

兄弟話

昔角館町の下川原の腹谷地に赤淵といふ澤山な朱が埋まつてゐる深い／＼淵があつた。その頃下川原に兄弟が居て、毎日朱を探り町へ持つて行つて賣つて暮しを立てゝ居た。その弟は兄と違つて腹黒いものだったので、淵の朱を一人で採つたらさぞ儲かるだらうと悪心を起し、一晚思案の末、朱塗膳を合せて口として大きい、怖しい龍頭を拵へた。さうしてそれを赤淵へ持つて行つて浮

錦木の由來として語られる。

岩手縣 稗貫郡

昔研 一ノ二一七

「千手觀音の利益」

”

同書 一ノ三七六

「手ぼこ春こ」〔例出〕

原文は語り物だつた痕が明らかである。

岩手縣

紫波郡昔話集 九六

「ちよへんこ・ちやはんこ」

”

昔研 一ノ二一七

「手なし姫こ」

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 一九三

「お杉・お玉」

同縣

佐渡島昔話集 八一

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 三〇五

「京の日野屋・大阪の日野屋」

岐阜縣 吉城郡

續飛騨探訪日誌 一六一

”

ひだびと 五ノ五

婚姻も子の事も無く。記憶断片の補綴かと思はる。

静岡縣 稻取町

静岡縣傳説昔話集 三九〇

兵庫縣 氷上郡

旅傳 一〇ノ六

兄弟の優劣

べて置いた。

何も知らぬ兄はいつもの通り朱を採りに来て、その大きな龍が眞赤な口をして、自分を吞まうとしてゐる様子を見て、蒼くなつて逃げ歸つた。

弟は計畫通り朱を一人占めにする事が出来て大儲けをした。ある日も例の様に淵に行つてきて水に這入らうとすると氣のせいかな龍が生きて居る様に見える。そんな筈はない、自分が拵らへて浮べたものだ。と思ひなほして潜らうとした時、その龍は眞實に生きて来て、その悪い弟を一呑みに呑んでしまつた。

— 秋田縣仙北郡 —

岩手縣

紫波郡昔話 五八

「夕顔長者」

秋田縣 仙北郡

第二昔話號 二七

「赤淵の朱」〔例出〕

廣島縣 高田郡

安藝國昔話集 一八一

「金噴き明神」

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 七四

「弓引く兄弟」

長崎縣

島原半島昔話集 一〇九

「金を戻る馬」

たやすく笑話となり二人椋助形となる。

長崎縣

(舊) 豊岐島昔話集 九

鯨伏村の兄弟話。龍宮より「ミカンヨー」の猫を買つて來るといふ話。

鹿兒島縣

甌島昔話集 四六

鹿兒島縣 奄美大島

昔研 二ノ二三六

「慾の深い兄」

沖繩

南島説話 五四

クガニの實の話。

日本昔話集 下ノ一四九

○参考

×歌林良材集の下 (續群書類從一七ノ二二九)

×師説月見集下 (續群書類從一七ノ一三八)

×今昔物語三一 (下の六三〇) 紫苑菴草。

×氣仙風土草ノ下 (一九六) 百匹塚の由來。

兄貴しくして一匹の牛、弟富みて九十九匹、兄恨みて火を放つ、牛悉く焼けたるといふは傳説の語り方であらう。

これが隣の爺型の先か。

弟 出 世

兄弟話系統。其項参照

宮城縣 桃生郡

郷土の傳承 三

兄弟三人に五兩づつ分け與へて三年の修業をさせる。一郎は澤の雁に金を投げつけ、御堂に寝てゐると古椀が呼びかける。その椀をふところにして盗人修業をなす。

但しこれは弟でなく兄。座頭話になつてゐるが、よくまとまつてゐる。

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 二六五・二七三

「朝茶」二六五 落語風の話。

「四の字嫌ひ」二七三

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 七八

「三人の兄弟」

別に夢見た型といふもの西洋にもあり。ヤーマズレー 一六九
三人遠征の話は怪談に付してゐる。
兄弟と言はぬ例別にある。

姉 と 弟

その一 貪しい姉と弟との二人暮しがあつた。ある日學校の友達が、明日扇子競べをしようと言つた。弟は家へ歸つて姉にその話をした。そこで姉は古い扇子の骨を探し出して紙を張り、それに梅と鶯の繪を描いた。

學校へ行くと友達の扇子は金銀の美しいものばかりで、弟は恥かしくて一番後から自分のものを出した。出して擲げた所が描かれた鶯がとび出して扇子の先に止つた。

弟の扇子が一番になつたので、友達は今度は船競べをしようと言つた。弟は又姉に船を造つて貰つた。姉は船を造つて、その中に赤土の人形を三つ造つて入れた。弟の船は大變見苦しい船であつたが競争をさせた所が三つの人形が櫓を立て船を漕ぎ出したので弟の船は又一番になつた。

その二 姉と弟が居て姉の名はハナノセンマツと言つた。弟は學校の澤山の友達の中で誰よりもよく出來た。或日友達が弟を御馳走すると云つた。姉にその事を話すと姉は「お椀の蓋をあけて見て汗をかいて居るものは食へ、汗をかいてゐないものは食ふな」といふ。

弟は御馳走の蓋を取つてみると、どれも汗一つかいて居なかつたので、姉の言葉通り何も食べずに居たが、うっかり御飯つぶが手についたのを食つたので、家に歸るなり死んでしまった。

友達が見に来たが姉は弟の姿をして平氣で居たので、友達等は歸つて御馳走を食べ皆死んでしまった。それから姉は千種類の花を寄せ集めてその汁を弟の體に塗つて生返らせた。

——鹿兒島縣甌島——

右の二話は奄美大島、沖永良部島では連続して語られ、完備した形式で傳承されてゐる。

讃岐本島

瀬戸内海島嶼巡訪日記 一九三

長崎縣

壹岐島昔話集 二六

「錢のなる木」

鹿兒島縣

甌島昔話集 五六

「姉と弟」〔例出〕二話あり。

奄美大島

昔研 二ノ八四・八六

二話あり。「姉さんと弟」

鹿兒島縣 沖永良部島

おきえらぶ昔話集 一五二

「シモタ殿の話」

〔参考〕
昔研 二ノ五四八 岩倉市郎氏

三人兄弟

息子三人に百兩宛渡し、三年間暇をやるから各々の藏に一番價のある物を入れた者を跡取りにすると言ひ渡した。三番目の息子は上方へ行つて絹布類を買込んで入れ、二番目は米屋を始めて米をうんとつめ込んだ。總領は先づ足の向く方へゆくうち黒川の觀音様の前を通つたが、お堂が餘り破れてゐるので葺替がしたくなつてこれと門の權現様と兩方とも葺替へた。しかし北上川に橋がなくして參詣人に不便な爲、大工を頼んで橋をかけると百兩の金を使ひ果して了つた。橋が出来ると參詣人がぞろ／＼来るので總領はいゝ心持になつて、先づ觀音様で一晩宿ると夢のお告に釣竿を載いたと見て目が覺めた。みると枕元に一本の釣竿がある。それを持つて次の晩は權現様へ行つて宿ると、今度はわかぎのほうぎと錫のお神酒入を授つた。先づ釣竿で自分のかけた橋の上へ来て釣をすると、小袋が釣れたのでこれを橋の上ではたいてみると金がチャ／＼と幾らでも出た。家では藏改めの前日で女房が心配してゐると夫が歸つて来て「心配には及ばぬ。酒でも呑め」と錫を出して注いだ。いくら注いでも盡きない。それから藏の前へ行つて小袋をはたいて藏一杯に金を入れた。翌日は盡きぬ錫の

酒で親類をもてなしたが、藏は金一杯だしするので家督はやはり總領がつぐことになつた。若ぎのほうぎでは母親や嬢を若くしたが、母親はもつと若くなりたと思つて、總領の留守に是を出してバタ／＼と漏いだので、若くなり過ぎて子供になつてその邊をのたく／＼と這ひ歩くやうになつたとさ。

いさゝか道話めいて居る。

熊本縣 天草郡

昔研 二ノ二七一

「三人息子」

喜界島の話と似てゐる。形よく調ひ、談議僧の製作かと思はれる。

鹿兒島縣

甌島昔話集 三八

「

喜界島昔話集 六二・一五〇

六二 のものは、三兄弟の求婚と成功。頼まれて負うて来た鬼の母の屍は金となる。大歳の火と似てゐる。

一五〇 のものは「三男が後取り」といふ話。天草のものに似てゐる。

沖永良部島

おきえらぶ昔話集 二一七

この話は甲賀三郎はじめ色々の傳記の脚色となる。

同縣

紫波郡昔話集 一六

「若ぎのほうぎ」〔例出〕

”

上閉伊郡昔話集 六四

「蛇女退治」

宮城縣 桃生郡

郷土の傳承 二

二話とも笑話。

岐阜縣

ひだびと 三ノ一〇ノ一一

長崎縣 北高來郡

昔研 二ノ四七八

財寶發見

五郎の缺椀

太郎・次郎・三郎の三人の息子にそれ／＼お金を渡して、三年の間に何でもして立派になつて來よと云ひわたす。三郎は木綿や

財寶發見

六一

に、次郎は米屋になつたが、からやぎ（怠け者）の太郎だけは金を懐にして奥山へ入つて行つた。すると山婆に會つたので一部始終を語り、三年の間山婆につかはれることになつた。三年経つたらよく働いて呉れたからと云つて、汚い腕を一つ呉れた。それを持つて家に歸ると次郎も三郎も一人立ちの商人になつて歸つて来て居た。その中へぼろ着物を着た太郎が入つて行くと、親父は何を覚えて来たかと聞く。すると懐の腕が泥棒を覚えて来たと言へといふのでその通りに云ふと、そんなら今夜馬を盗んで見よといふことになつた。馬の番には若衆を頼んだり、番犬の口へはホケア貝をあてがつたりして用意を調べてゐる。太郎は腕をふところにして厩の方へ行くと、腕がふところから落ちて大きな穴を掘り、そこから中へ這入れる様にして置いて「今馬を盗むところだぞ」と大聲で呼んだ。人々は大騒ぎしてゐる間に馬をひき出して親父の所へ持つて行つた。

——青森縣三戸郡五戸町——

青森縣 五戸町

第一昔話號 三七

「盗人腕こ」〔例出〕

腕の代りに雛を賣ふ話もある。

岩手縣

上閉伊郡昔話集 一六二

「泥棒神」

橋の下に雛子の音がする。見ると小さい人形があるので拾つて歸り、見たくなつて見ると盗みがし度くなり、懐中して居れば盗んでも判らない。後改心して人形を捨てた。

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚 二二三

〃 膽澤郡

黄金の馬 五二

同縣

江刺郡昔話 五六

「五郎の缺腕」

栃木縣 芳賀郡

茂木昔話集 五八

「鼻高殿」

廣島縣

藝備「昔話の研究」四〇

熊本縣

第二昔話號 二八

「盗人雛さん」

盗む方法「五右衛門話」と近し。

長崎縣

島原半島昔話集 一〇四

「起上小法師」

鹿兒島縣

喜界島昔話集 六五・六六

「三人兄弟」

〇参考

三國傳記 東洋口碑大全 一五一

寶物の力

岩手縣 星澤尻

聽耳草紙 二二〇

豆子噺の三

豆の轉び入つた穴の中に入つて行つた爺が小人からみにくい童子を賣ふ。捨てようとするとき自ら「爺様おげんな」といふ。爺様の家は段々と富んで村一番の長者になつた。

長崎縣

島原半島昔話集 一〇四

「起上り小法師」

起上り小法師を買ひ、そのさしづで色々の手柄をたてる。

（五郎の缺腕参照）

八石山

裕福であつて吝嗇な兄と貧乏で人柄のよい弟とがあつた。或年弟は兄から種籾を借りると兄は熱湯につけてから、貸與へた。弟は蒔いたが籾は一本も生えず夕顔が一本生えた。そして田地一ぱいに廣がつて夕顔が澤山に實つた。

弟は米の代りに夕顔でも食べようと、一番成りの一本を採つて

財寶發見

庖丁を立てると仲々切れない。鉞をもつて切割ると中から白米がざくざくと出て来た。澤山の夕顔から白米が山の様に出たので弟は名高い長者となつた。

青森縣 八戸

——岩手縣紫波郡——

同縣

昔研 二ノ二八三

同縣

津輕口碑集 二七

同縣

津輕昔噺集 九

津輕昔噺のものは天人女房。子守に豆一粒を與へそれを蒔くと成長して天にとどく。子と子守はそれを傳はつて天に昇るといふ。

岩手縣

紫波郡昔話 五八

〃

江刺郡昔話 九六・三三

〃

越後野志 六

新潟縣

越佐傳説 三〇六

〃

高木敏雄氏傳説集 二〇六

〃

佐渡島昔話集 五一

新潟縣

能登名跡志 三〇五・三四三

石川縣

能登名跡志 三〇五・三四三

松波の松岡寺の太鼓と鹿島郡飯山の奥の千石山の傳説。昔話の傳説化の例。

靜岡縣

靜岡縣傳説昔話集 三九五

靜岡縣

靜岡縣傳説昔話集 三九五

鳥根縣

鳥根民俗 一ノ四

六三

廣島縣 賀茂郡 安藝國昔話集 八三
 佐賀縣 佐賀郡 昔研 二ノ三二二
 「虎の眼玉」
 長崎縣 (舊)壹岐島昔話集 一五七

「煎った粟種」
 ○参考

×支那の例 昔研 一ノ四〇一
 ×ヤーズレー 二〇六
 ×ユエ 一八〇

×一粒一鍋の米の話。沖繩に多く又生蕃傳説集にもあり。
 この話の大話化したもの。

×江刺郡昔話 三三 源五郎話につづく。

×紫波郡昔話 二二八 夕顔長者 瓢の米。

×黄金の馬 八一 豆子噺の豆一粒發見。鍋で炒れば鍋いっばい。白でつけば白いっばい。

取付く引付く

昔或村に善い爺と悪い爺があつた。或時善い爺が一人で山に入つて爲事をして居ると、何處からともなく取つつかうか、くつつかうかといふ聲が聞えた。爺はあんまり幾度もその聲がするので取つつかば取つつけ、くつつかばくつつけといふと、不意に兩方の松林の中から金と銀とが幾らともなくとんで来て、肩や背中にうんと乗つた。それを持つて家に歸つて、婆と二人で眺めて居ると隣の悪い爺がやつて来て、それを見て大さう羨しがつた。隣の爺は早速眞似をしようとして、次の日に山へ入つた行く

と案の定左右の山の中から、くつつかうか、とつつかうかといふ聲が聞える。くつつかばくつつけ、とつつかば取つつけと背をむけると、松の樹の上から松脂がとんで来て重い位悪い爺の背なかに附いた。婆さん今歸つた、早く燈火をつけて来て見せろといふので婆が火を持つて近くに行くと、その火が松脂にうつて悪い爺は大火傷をした。

青森縣 八戸 奥南新報 一〇ノ八ノ一

年末に困つて遠い親類へ借りに行くと、夜明けに野中で呼びとめられ「金は借りられぬ。それよりも家へ戻つて油鍋で小豆を煮よ」と云はれ、歸つてその通りしてゐると、鍵の上からヨイカと云つて何か飛込む。それから長者になるといふ話。一つの變型。

青森縣 津輕昔話集 六七

オボサル／＼といふ化物。

福島縣

和歌山縣

〔例出〕

兵庫縣 神崎郡

鳥取縣 西郷

「取りつけ引つけ」

良い爺が柴刈りに行くと、鳥が鳴いて金が引つく。眞似をした悪い爺にはごみがつく。婆の尻に付けといふ話。又松脂がつく話もあるよし。

島根縣 邑智郡

「出ば出い」

出よか出よかの聲に、「出ば出い」といふと、出齒になつたといふ話。

これは笑話化。

〃 松江市

「金銀と松脂」

廣島縣 比婆郡

〃 高田・山縣・豊田郡

愛媛縣 北宇和郡

財寶發見

「ヒツツカワカ、ヒツツカワカ」

大分縣 北海郡

「すひつかう」

同縣 速見郡

「ひつつかう」

やろか水の傳説との關係。

安藝國昔話集 三七〇。早物語の形をした話がある。

ウバリヨン (負はれよう負うてくれの意)

取付く引つく系統の昔話。

青森縣

〃 「山寺の怪」

オボサル／＼と云ひ、ほんだらオボサレといふと、背の上でがらがらと崩れた。朝見ると大判小判であつた。

〃 八戸

三人兄弟が大根島へ行く、「奈良梨採とり」と同じ型。

岩手縣 上閉伊郡

叢の中から背負うて行けとの聲、見れば佛像であつた。

六五

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚 一九六

向ふの峯で美しい姉様が「猪つばいの爺様さ行つてばつばされたい」といふと。

宮城縣

郷土の傳承 一ノ一六八

ある家の祖先の老人、野の松の古木の上から「おぼさつてえ〜」と。傳説の形で傳はる。

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 一二七

「バロウ狐」

北蒲原郡

昔研 一ノ五五七

二話あり。その一はバロンといふ化物、負うて歸ると金となつてゐる。その二は世間話の型。女房の干與にも痕跡あり。

新潟縣 古志郡上條村

大榎の下でバロン〜といふ。これは狸。

愛知縣 北設樂郡

猪・鹿・狸 一七七

ノッコン峠の狸。これもたゞの化物。

廣島縣 廣島市

安藝國昔話集 一六三

「お三狐と南瓜」 怪談。

長崎縣

舊豊岐島昔話集 九八

「金を負うた子供」

○参考

阿波徳島の市外のオツパシヨ石。

星合茂右衛門、負ふと段々重くなるのを「オノレツ」と投げると二つに割れ、それからもはやオツパシヨとは云はず。

もと力士の墓石。勇士を試みた話となる。

齋女話との關係。古くからあつた怪談か。

天福地福

善い婆と悪い婆とが隣どうしに住んで居る。四月八日に善い婆が、お釋迦様へお詣りに行かうと云つて悪い婆を誘つたが、悪い婆はお釋迦様などへお詣りしても仕方が無いと云つてきかない。仕方なく善い婆一人で出かけると、途中で金の小袋を拾つた。櫛の欄干に縛りつけて置くと、悪い婆はそれを知り、慾を出してお詣りに出かけた。櫛の所まで来ると小袋では無く、怖い蛇の死骸が櫛の所にまきついて居る。悪い婆はそれを見て腹を立て、竹の先を割りその蛇をはさんで善い婆の家に投げ込んだ。善い婆の方では急に窓から何か音をたて〜とび込んで来たので、見るとさつき櫛の欄干にしばつて来た小袋で、中から金が出て来て家中金だらけになつてゐる。爺が歸つて来てからその話をする、櫛の欄干にしばりつけたものが家にとび込んで来るとは、授かりもの

に違ひ無いと大よろこびをした。

山梨縣西八代郡

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚三一・三一〇

「生れつき運」

「蛙壺」

山形縣 東田川郡

昔研 一ノ五七五

新潟縣 北蒲原郡

昔研 一ノ五五八

三話あり。その三は「千兩箱を釣る話」これは蛇の條はないが同じ話の變化であらう。

長野縣 北安曇郡

小谷口碑集 五九

越後能生の岡本某、正月二日の初夢に、青木湖畔の山崎に黄金の埋めてある事を、三年續けて見る。従者技藝けして掘れば、黄金は飛んでしまふ。家に歸つて見れば主家の屋敷は黄金で一杯であつた。

長野縣 北安曇郡

北佐久口碑集

黄金上州へとぶといふ。

北安曇口碑集には別の傳あり。

死んだ蛇の話。生みついた運はこの變化なるべし。例へば

紫波郡昔話集 一〇六 の例の如し。

財寶發見

長野縣

北佐久口碑集

黄金上州へとぶといふ。

北安曇口碑集には別の傳あり。

死んだ蛇の話。生みついた運はこの變化なるべし。例へば

紫波郡昔話集 一〇六 の例の如し。

財寶發見

長野縣

北佐久口碑集

黄金上州へとぶといふ。

北安曇口碑集には別の傳あり。

死んだ蛇の話。生みついた運はこの變化なるべし。例へば

紫波郡昔話集 一〇六 の例の如し。

山梨縣 西八代郡

續甲斐昔話集 三五四

「金袋と蛇」 「例出」

○参考

南方隨筆 二六八

蛇と金の玉

天福地福系の話。其項参照

岩手縣 遠野

上閉伊郡昔話集 三三三

「黄金の壺」

この話は形がよく〜のつてゐる。

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 二五

「蛇と金の玉」

「取りつと引つとこ」「金瓶のとんで来た話」「人が見たら蛙になれ」の笑話まで。

老僧の執念の話。

黄金の壺の遠く飛去つた話、北佐久口碑集などにもあり。

黄金の壺の遠く飛去つた話、北佐久口碑集などにもあり。

黄金の壺の遠く飛去つた話、北佐久口碑集などにもあり。

黄金の壺の遠く飛去つた話、北佐久口碑集などにもあり。

黄金の壺の遠く飛去つた話、北佐久口碑集などにもあり。

黄金の壺の遠く飛去つた話、北佐久口碑集などにもあり。

黄金の壺の遠く飛去つた話、北佐久口碑集などにもあり。

黄金の壺の遠く飛去つた話、北佐久口碑集などにもあり。

黄金の壺の遠く飛去つた話、北佐久口碑集などにもあり。

黄金の壺の遠く飛去つた話、北佐久口碑集などにもあり。

黄金の壺の遠く飛去つた話、北佐久口碑集などにもあり。

黄金の壺の遠く飛去つた話、北佐久口碑集などにもあり。

黄金の壺の遠く飛去つた話、北佐久口碑集などにもあり。

黄金の壺の遠く飛去つた話、北佐久口碑集などにもあり。

財寶發見

天福地福系統の昔話。其項参照

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚 三〇七

金瓶が崖の崩れで危い／＼と云つてゐる話。

同書 三一二

金が隣の爺には蛇に見えるが、窓から投込めば忽ち金となるといふ話。

紫波郡昔話 一〇七

「生みついた金」

蛇になることは無いけれども隣へとんで行つてしまふ話。

黄金の瓶

青森縣

五戸の昔話

母と子で黄金をほりあて、隣の婆が見ると青蛇に見え、屋根から放り込むと金となつてゐる。

岩手縣

上閉伊郡昔話集 三三

老嫗夜譚 三一

福島縣

磐城昔話集 二〇

深夜にオツカナイ／＼といふ聲、行つて見ると黄金の瓶が今にも川に落ちさうになつてゐる。これも路傍の寶化物の變形か。

壺の中の蛇

九州では天福地福と云はず。

熊本縣 天草島

昔研 二ノ一七二

「隣の爺」

隣の爺が見ると蜂になつてゐる。

鳥取縣 岩美郡

因伯民談 二

松川といふ村老の實話。昔話が世間話となつて行く實例。同郡成器村 處師寺の裏山で古い壺を見つけ、開いて見ると美しい小蛇が入つてゐる。それを隣の爺が買つてめき／＼と長者になる。

人が見たら蛙になれ

或寺の少し愚かな小僧、お使ひの駄賃の穴あき籠を藁のさしに

さして庭の隅に穴を掘つて埋める事にした。埋ける時「俺が掘つたら錢で居ろ、他人が掘つたら蛙になれ」と云ひ／＼埋めて、その後も駄賃を貰ふ度にさう云ひ乍ら埋めて置いた。

それに氣のついた和尚、或日小僧の籠をすつかりほり出して代りに蛙を一匹埋けて置いた。やがて小僧はいつもの様に貰つた錢を埋けようと掘つて見ると錢はなくなつて、代りに一匹蛙がとび出した。小僧はあわて「待て／＼他人ぢやない俺だ／＼、さう飛べばさしは切れてしまふ」と云つて追かけた。和尚は腹をかへて笑つた。

村人が見ると良い酒だが僧が見るとやはり蛇。この話は靈異記にも、今昔にもこれに近いものがある。岡山縣 御津郡昔話集 一六五

福岡縣 朝倉郡 福岡縣昔話集 九三番

嫁と姑と餅。嫁が見たら蛙になれ、と餅をかくす。それを嫁が見つける。

蛙を代りに入れる事無し。

鞍手郡 同書 五二番

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚 一九六

「蛙壺」

石川縣

鹿島郡誌 九四〇

北大呑村大野木の七右衛門、錢の袋の夢を見る。夢の告で蛙を袋に入れ長持に入れておき、數日後に見ると、果してその長持一杯の錢となつてゐる。

破片か。

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 一七三

「錢と小僧」〔例出〕

栃木縣 芳賀郡

茂木昔話集 八三

財寶發見

六九

熊本縣 天草 郷土研究 五ノ四ノ二六三

「姑と嫁」

長崎縣 島原半島民話集 二四〇

○参考

×旅傳 一ノ四 嘉右衛門話。これは蛇で俺だ／＼見忘れたか。

×本朝故事因縁集(口碑大全 六三四引)

石見市來にて夢に木の根元に金錢ありと見て、一人が掘れば鐵錢、隣人にはやはり金錢となる。

×この話既に醒睡笑 二ノ六八にあり。蛇、やれ見忘れたと幾度

も名のりつること聞事なれ。

味噲買橋

昔飛騨の丹生川に澤上の長吉といふ正直な炭焼が居て或時、高山の味噲買橋に行けば好いことがあるといふ夢を見て、早速出かけて橋の上に立つてみると、そこへ橋の袂の豆腐屋の親爺がやつて来て譚を尋ねる。長吉の答をきいて豆腐屋は大いに笑ひ、夢をまに受けるとは愚かなことだ。わしはこの間から乗鞍の麓の澤上の長吉の屋敷の杉の下に、金銀が埋まつてゐるといふ夢を見るけれども、夢と思ふから氣にもとめないと言つた。長吉はそれを聽いて歸つて我家の杉の根を掘り、忽ち大金持になつたといふ。

福島縣 石城郡

「運の玉」

岐阜縣 飛騨

「夢と夢」〔例出〕

ロンドン橋の話と全く同じ。

香川縣 仲多度郡

「京の五條の橋」

一話あり。

○参考

「昔話覺書」 二二三 味噲買橋

夢見小僧

正月二日の初夢を十二人の子供に師匠が話させたが、一人だけどうしても話さないで、怒つてうつば船にのせて流した。正月十六日に船は鬼が島の磯に着いた。鬼の大将の前へ連れてゆかれた子供は大将をうまくだまして千里棒、生き棒、聴耳の三つの寶物を奪つて、千里棒で大阪の國へ飛ぶ。鴉が二羽止つてゐるので聴耳棒を耳に當ててみると「西の長者の一人娘が死にさうだ」と言つてゐる。子供は急いで西の長者へ行つて生き棒で娘を生かした命の主だからと聲にされた。すると今度は東の長者の娘がコロツと死んだ。西の長者の聲に頼め、とやつて来たので又生き棒で生かしてやると、こちらでも聲になつてくれと言つてきかない。とうとう殿様に裁いて賣ふことになつた處が十五日は東、下十五日は西の聲になれとのこと、息子は二つの世帯を賣つて、十五日目ごとに途中の橋で二人の女に送り迎へされるやうになつた。息子の見た初夢は、二人の女に手を打かけて橋を渡るといふ

のであつた。

——飯島——

青森縣 三戸郡八戸

昔研 二ノ二八三

好い夢を見た長者の息子が、夢を賣らなかつた爲に勘當されるが後幸福となる。

岩手縣 上閉伊郡

聴耳草紙 八五

「夢見息子」

これは結末に夢だつたとある話で、全く別のものゝやうなれど、もとは「いゝ夢を見た」で始まつた話の、あとさきを變へたものかもしれぬ。

秋田縣

秋田郡邑魚譚 一一九

名主・大黒・鬼婆等が夢をきいたがるが語らず、だまして寶物をまきあげて幸福になるといふ話。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 三五

長崎縣 對島仁田村久原

旅傳 一ノ八ノ一三

鹿兒島縣

甌島昔話集 一二

「夢見長者」〔例出〕

夢の蜂

或所に二人の商人があつて連立つて商ひに出た。途中で一休みしてゐると、年長の男が眠つてしまつた。若い男が何氣なく寢てゐる男の顔を見てみると、一匹の蛇が鼻の穴から出て佐渡島の方へとんで行つてしまつた。しばらくすると又先刻の蛇が戻つて来て寢てゐる男の鼻の中に這入つて行く。眠つてゐた男は眼をさまして、妙な夢を見たと言ふ。佐渡島に大金持があつて、庭に白い花がいつぱい咲いた椿の木があり、その木の根から一匹の蛇がとんで来て此處を掘れと云ふので、掘ると黄金の一杯入つた甕が出て来た夢だと語つた。若い方の男はその夢を賣つて呉れと云つて不思議に思ふ年長の男から三百の金を出して買ひ取つた。

旅が終つて村へ歸つた男はこつそりと佐渡島へ渡つた。そして大金持を探しあて、庭掃きに住み込んで春になるのを待つてゐた。春になつて椿の花は咲いたが赤い花ばかりで、白いのはいつても咲かぬ。又もう一年待つと今度は白い花がいつぱい咲いた木があつた。若い男は喜んで、夜そつと火箸でその椿の根をついて見ると、こつん／＼と音がする。掘ると黄金の一杯詰まつた金甕が出て来た。それを誰も知らぬ所へかくして、更に半年ほど經つ

た或日、暇を買つてかの麴をもつて越後へ歸つて来た。そして長者となり一生樂に暮した。

——新潟縣南蒲原郡——

新潟縣

南蒲原郡昔話集 九四

「佐渡の白棒」〔例出〕

新潟縣

傳説の越後(佐渡後ノ五八)

西蒲原郡間瀬村の仁助。實は佐渡にあり。

長野縣

北安曇郡郷土誌稿 二ノ一〇〇

これには夢を賣ることなし。

二人の歩荷の晝寢の夢。夢の話聞いた男が掘ると、青い光となつて飛び、夢を見た方の男の家に入つて蛇となつて床前に居り、それを突くと崩れて黄金となる。

石川縣

鹿島郡誌 七五

夢に教へられて海岸に行くと、金の鵲がとんで来て錦の袋を二つ置いて行く。

山梨縣

續甲斐昔話集 一六〇

「東の壺屋、西の壺屋」

大覆の下に二人晝寢をし、鼻に出入する蜂を一人が見る。夢によりて二つの壺を掘り出すと、それに都合七つとあり。もう一人が

置いて行く。

旅傳 四ノ二

諸國物語 六九

×旅傳 三ノ五(市場直次郎氏)山彌長者が事。

×蕉齋筆記 二 世間話とした形である。

×沙石集 八ノ二三

×東國輿地集覽 一一二

×三彌大盡 永代藏 卷三

×三彌大盡 永代藏 卷三

×三彌大盡 永代藏 卷三

×三彌大盡 永代藏 卷三

×三彌大盡 永代藏 卷三

×三彌大盡 永代藏 卷三

薬しべ長者

昔ある男が観音様に出世が出来るやうに願がけをした。すると

「寺を出て轉んだら一番先に手にふれたものを授ける」といふ御

告げであつた。男が寺の門を出ると右にけつまづいて轉げて一本

の薬が手に觸れた。それを持つて途中で蛇を取り薬でしばつて旅を

つゞて行つた。すると向ふから貴人の行列が来て、その中の抱か

れて居る子供が急に泣出したので、貴人はその薬でしばつて居る

蛇を欲しいと云はれたので上げるとお禮に密柑を三つ呉れた。男

がそれを持つて行くと、呉服屋が喉を乾かして困つて居るので密

柑をやると、お禮に布子を三反呉れた。更に行く道端に馬の死

骸があつて人が立つて考へ込んでゐるので、その死骸と布子とを

交換した。男が死んだ馬に水をのませたらすぐ生き返つて立派な

財寶發見

見てあと五つを掘出す。

この話は語り物か。

愛知縣 北設楽郡

「馬子の夢」

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 一・二三

大分縣

豊後傳説集 一二

萩原の山彌三助といふ行商人、生姜と篩とで夢を買ふ。

鹿兒島縣 喜界島

島 二ノ四五七

がじまるの木の下から寶物の出る夢を、大和船頭が買つて掘ると

長年たづねて居た父の死骸が出たといふ話。

喜界島昔話集 一五五

「夢見息子」

良い夢を見たが誰にも話さないで、その夢の通りになつた子供の

話がある。

鹿兒島縣

瓶島昔話集 一一九

「三彌大盡」なほ一一七の「八幡堂の夢」は夢の中で朋輩二人掘

つて金持になる。

〔参考〕

×夢を買ふ話。

×宇治拾遺 吉備眞備

元氣な馬になつた。大喜びして旅をつゞけて、或夜大きな家に泊

めて貰つたら其家の主人が男を招んで、その馬を貸して貰ひたい

と云ひ、その代りに西の方へ旅に出るから歸るまでこの家に留守

居して貰ひたい。もし歸らない時はこの家は貴方に差上げるとい

ふ。それから主人は旅に出たまま歸らず、男はその家の主人にな

つて一生安樂に暮した。

——廣島縣吳市——

岩手縣

紫波郡昔話 一六九

話の名は「蜻蛉長者」とあれど、薬しべ長者の破片。大方宇治拾

遺と近い。

岩手縣 上閉伊郡

老姐夜譚 二三五

「歌ひ骸骨」の前段に勘當の印に薬一本・朴の葉・味噌と變つて

それを食つてしまつたとあり、歌ひ骸骨につゞく。同書 三〇〇

頁には子に貰つた錢一文より煙草屋になる話がある。

岩手縣 裨實郡矢澤村

動物文學 二一

岩手縣 裨實郡水澤町

聴耳草紙 六四

「蜂のお蔭」

難題解となつてゐる。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 三二・一二一

岐阜縣 飛騨

昔研 二ノ五一五

廣島縣 吳市

安藝國昔話集 一一〇

〔例出〕

宇治拾遺のまゝ。虻に意味ある事を知る。

島根縣 邑智郡

昔研 二ノ四六五

山口縣 周防大島

後半忘却。

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 一六・七六

長崎縣

五島民俗圖誌 二四五

〃

壹岐島昔話集 三四

〔藁シビ長者〕

鹿兒島縣 甌島

昔研 二ノ五五一

〃

甌島昔話集 八

〃 喜界島

喜界島昔話集 七二

わらしべの發端は無いが、スンとソウの兄弟の話で、壹岐の話に

近い。

沖繩縣

南島説話 九三

〇参考

×宇治拾遺卷七 長谷寺參禪之男願利生之事。

×今昔物語 一六ノ二八

蜂 出 世

蜂に助けられて出世をした話色々あり。

一長者へ聲入り 中ッダブン。

二難題聲・聲危難これからの變化として打たぬ太鼓、又は「ぶん

／＼太鼓の袖かぶり」あり。

秋田縣 仙北郡

角館民俗資料 一四二

これは完全に落語となる。昔一人のセボシ(怠者)が、蜂の糞を金

紙で包み、金の珠をつくり質屋に置く。主人怪んで開けてみれば

刺されるので番頭を叱つて曰く「質は取つても蜂はとるな」。

徳島縣 美馬郡

阿波祖谷山昔話集 一〇

「極道者の話」 助けた猿と獅子蜂のおかげで、長者の娘の病を

癒し聲となる。

鹿兒島縣

甌島昔話集 二七

助けた蝦・龜・猿のおかげで乞食が長者の難題を解き、聲入り

する。

蜻 蛉 長 者

岩手縣 岩手郡長山村

旅傳 三ノ一一七〇

傳説として傳へらる。

渡しに光るものあり、近づけば黄金なりしといふ。蜻蛉に尋ねる

條は無し。

別にマノ長者。雫石の岩井花家の本家、この長山村にあり。

同じ傳説ありしと見ゆ。

〇参考

昔研 二ノ五ノ八 淺田勇氏「靈魂が動物となる話」

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚 一二七

「岩泉の里」 馬方が酔つて歸る話。

青森縣

津輕昔コ集 三〇

娘柴刈に行き酒泉發見。兩親と行けば只の水なりしといふ。

破片なり。

石川縣

鹿島郡誌 九六九

能登部村モロミ坂傳説。

沖繩縣

遺老説傳 四四ノウ

仲城安里の佐久川に漁夫足を洗ふ。美人に酒壺を送らる。妻が見

財寶發見

炭 燒 長 者

れば只の水なり。今も稻祭に祝女この川の水を載點す。

ある所に隣どうし仲の好い父共があつて、山に木を伐りに行き

山の神の御堂に泊り、夢を見た。神々達が待つてゐる所へ、山の

神が歸つて来て里で男女二人が隣り合つてうまれ、その子等の持

運は女の子は鹽一升に盃一個、男の子は米一升しか持つてゐな

つたと語つたのを父共が聞いた。縁は、と神々がきくと、はじめ

は隣どうしだから一緒にしようと思ふが、とにかくさうして置い

てから又考へようと言つた。二人の父は目を覺して夢を語り合ひ、

不思議に思つて家に歸つてみると兩方に男と女が生れてゐた。

二人は大きくなつて夫婦になる。神々から授かつた女の福分

家は繁昌した。夫は妻が一日鹽一升使ひ盃が手からはなれない様

な使ひ方に不満で妻を追出してしまふ。

妻はあてなしに歩いて行つたが空腹になつたので路傍の大根を

食べようとぬいてみると、酒が湧き出した。それを飲んで元氣を

出し、向ふの山の灯をぬいて歩いて行つて銀冶をしてゐる爺に

泊めてくれと云ふと、爺は貧乏だからと云つて斷つた。然しその

爺の家の腰掛石も敷石も臺石も皆黄金であつた。女は爺にすゝめ

て町へ持つて行つて賣らせた。山の鍛冶小屋附近はみな黄金であり又掘つた後からは酒が湧くのでたちまち長者となつて、その山は俄に町になつた。女の先夫はひどく貧乏になつて、息子と二人で薪を背負うてその町に賣りに来た。

—岩手縣和賀郡—

この話の特色は妻の福分といふこと。よき女房と賣發見に二つの型がある。

運定めとつながる。

第二段には美酒を造る妻。

米倉譚につづく。

この話の笑話化して行く小口は、やはり鳥に小判、或は影法師に米を投ぐること。

傳説として方々に分布するは語り物の爲か。

青森縣 八戸

昔研 二ノ二八四

四話あり。又奥南新報 五ノ七ノ七 にもあり。

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚 九

前夫は鍛冶屋、後に來て下男となる。

炭甕の邊は皆小判。鳥を打つ事はなく、影法師に米を投げてやる條あり。

此の書 三二二に 「炭倉長者」あり。

岩手縣

「右衛門太郎と左衛門太郎」

よく整へり。この話強清水と因あるべし。

岩手縣 和賀郡黒澤尻 「例出」

秋田縣 仙北郡

福島縣 双葉郡

旅の歌うたひの運搬かと思はる。

「遠刈田

新潟縣 傳説としてあり。

「佐渡

「南蒲原郡

「いづれも酒の發見。

石川縣 能美郡

長野縣 伊那郡

「小縣郡

「木曾

御坂峠の長者屋敷のこと。

柴波郡昔話集 二八

聽耳草紙 二七

角館民俗資料 三五

昔研 一ノ二八〇

昔研 二ノ一八一

民俗叢話 九〇

傳説の越後と佐渡 上ノ三三

昔研 二ノ一七五

相川町誌 一七三

加無波良夜譚 一五九・一九六

第一昔話號 五一

伊那の傳説 五・二四三

小縣郡民譚集 一三六

郷土研究 五ノ二五八

山梨縣 西八代郡

靜岡縣 富士郡

之は語り物か。

岐阜縣 飛騨

郡上郡

兵庫縣 城崎郡

「佐渡の金山の起り」

氷上郡

鉢かづき話の前段となつて付いてゐる。

この話は豊後でも前置きになつてゐる。後段に力を入れて語らるること。

廣島縣 御調郡

島根縣 邑智郡

長者の娘四十九度嫁し、五十度目に落付く。

徳島縣 美馬郡

徳島縣 三好郡

香川縣 三豊郡志々島

高知縣 幡多郡阿備池

藝備「昔話の研究」一七二

昔研 二ノ三八四

阿波祖谷山昔話集 五一

昔研 二ノ四二三

讃岐民俗 一

財寶發見

鹿兒島縣

鬼界島昔話集 三三「炭燒五郎」 八五「河童の恩返し」

鹿兒島縣

打出小槌と小屋燒長者。

これにてこの話にも桃太郎分子あること判る。

鬼界島昔話集 三三「炭燒五郎」 八五「河童の恩返し」

鹿兒島縣

喜界島昔話集 三八

昔研 一ノ一六七

壹岐島昔話集 三四

長崎縣

炭燒小五郎 後に京の「すみのくら」と成る。(櫻田氏)

福岡縣 筑前傳説集 二五

勝山長者傳説。影法師に米を投げてやる條あり。これが愚者成功の一例。

熊本縣 菊池郡城北村米原

「コモ編小三郎」

全く炭燒小五郎なり。

長崎縣 島原半島民話集 一七三

「猫の恩人」是も炭燒長者の破片。猫と蝸との争ひが入つてゐるのが不思議。

長崎縣 壹岐島昔話集 三四

前夫零落して炭賣となるもの方々にあり。

是と今昔物語 卷三〇の葦刈とは關係あるべし。

鹿兒島縣 昔研 一ノ一六七

喜界島昔話集 三八

西のペンコイ、白鳥に黄金を投げる條あり、次に鬼ヶ島征伐あり。

打出小槌と小屋燒長者。

これにてこの話にも桃太郎分子あること判る。

鬼界島昔話集 三三「炭燒五郎」 八五「河童の恩返し」

鹿兒島縣

鹿兒島縣

鹿兒島縣

鹿兒島縣

鹿兒島縣

鹿兒島縣

鹿兒島縣

鹿兒島縣

鹿兒島縣

鹿兒島縣

鹿兒島縣

鹿兒島縣

鹿兒島縣

沖繩縣

南島説話 九八

雀の仲人で追出された妻、炭焼に嫁す。前夫は炭賣になりて來り再會して恥ぢて死す。

〔参考〕

寛永諸家系譜傳（史料一ノ三ノ七一五）

芋掘長者

或家の下男、芋を掘ると稱して山に入り、彼方此方と土を掘つて黄金のヒを掘り當て、長者になつたといふ話。

岩手縣

上閉伊郡昔話集 二三

芋掘りを毎日してゐて、黄金のヒを見付けた長者の話、ウソトキ話がつづく。

これも一種の派生説話か。

岐阜縣 丹生川村

うつしばな 一一九

和歌山縣 有田郡

南紀土俗資料 四

津木村の長者が峯。芋掘長五郎へ隣村の醜い娘が嫁に來る。川口の鴨に小判を投げ「こんなものなら内に芋掘る程もある」といふよりこの名出づ。

鳥根縣 邑智郡

昔研 二ノ四一七

大歳の火

鴨江觀音緣起 中國邊の女でいつも不縁となる。父から玉を貰ひ、その玉と同じ色の土の所を死場所とせよと云はる。濱松七軒町で自然賣賣の爺にあつてたづねると、心當りありとて山へ連れてゆき共に掘ると錢が出る。夫婦になり觀音のお告で御堂を建てたがまだ金が十兩も餘つた。

土の色 一三ノ一（六七號）

昔おふじといふ下女があつた。大歳の夜、旦那が圍爐裡の火を絶やしてはならぬと云ひつけたがおふじはいつの間にか消してしまつたので、他家へ火を貰ひに行つた。どこの家も寝てゐるので、ずん／＼行くと山の中に火が見えた。その家に行つて火種を乞ふと「火はやるがちよつとの間棺桶を預つてくれ」といふ。困つたが仕方が無いので棺を擔いで火を貰つて歸つて、棺桶は人に見つ

大歳の客

からぬ様に部屋の奥に隠しておいた。正月になつて四日経つても五日経つても棺を取りに來る者が無い。困つて棺を明けて見ると中は黄金でいっぱいであつた。おふじはそれを旦那に話すとお金はおふじに呉れるといふ。おふじはその金で寺を建て、いよいよ出來上つた日に旦那と二人で招かれて行つた。その途中おふじは紫の雲にのり、寺へ入つて觀音様になつてしまつた。おふじを年徳神といふ。

——兵庫縣美方郡——

青森縣 八戸

昔研 二ノ二八五

福島縣 石城郡

磐城昔話集 三四

岐阜縣 丹生川

うつしばな 六四

兵庫縣 美方郡

昔研 二ノ四二一

「正月さんの起り」〔例出〕

廣島縣 高田郡

昔研 一ノ二八五

「鴻池話」

岡山縣

御津郡昔話集 一〇九

「大晦日の夜」

二話あり。一は龍宮女房の破片。一はいざりに、下關ガツカイ長者の娘が婢をつれて嫁に來る。婢の千代が米をとくとその水が酒になつた。それが鴻池の起りといふ。

千代といふ名は田植唄の「ひるまもち」にも出て來る。

陸中の炭焼長者にも婢をつれた話がある。

昔ある所に馬方があつた。歳越の日の晩方になるまで一人の客も無く、是では歳も取れぬと思ひ乍ら歸つて來ると、並木の松の下に一人の癩病人が唸つて寝てゐた。馬方は自分がなまけ無いと

思つたらまだこんな人もあつたと、親切に介抱して馬にのせて家につれ歸つたが、體中がくさいので土間のすみに涎をしいて寝かしてどうやら年を取らせた。元日の朝になつたが昨夜の客は起きて來ない。揺つて見たが返事が無いので死んでしまつたかと思つてよく見ると大きな黄金の塊にかはつてゐた。

——愛知縣南設樂郡——

青森縣 八戸

昔研 二ノ二八六

「錢になつた話」

岩手縣

江刺郡昔話 三〇・六三

「座頭が身上に關つたといふ話」「六部五人が皆金箱になつたといふ話」

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 二・三・三一

福井縣 坂井郡

昔研 一ノ三一

節糺を「年取男」といふやうになつた話。

愛知縣 南設樂郡

第一昔話號 六一

「大晦日の客」〔例出〕

廣島縣

藝備「昔話の研究」四三以下

四話あり。

一は乞食をとめる話。後の三話は火種を絶やす話。

高田郡のは乞食が来て「泊めてくれれば火種をやる」といふ。

これは火種と乞食を泊めるのがもとは一つである證據。

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 九・二六

前者は「三軒長者」大晦日に二軒の長者にはさまれた貧乏人の息子が、屋根の上で不吉なとへごとをするので、閉口した兩長者が米や錢を分ち、三軒とも長者になる。後者は、長者の家の女中が大晦日の夜泊めた七人の客は七福神で、その昇いでゐた死人が小判であつたといふ話で、火賣ひの條はない。

鹿児島縣

甕島昔話集 一五六

沖繩

おきえらぶ昔話集 八二

南島

山原の土俗

南島説話 一六

笠地蔵

貧しい爺婆があつた。間もなく正月が来るのに餅を買ふお金が

ないので、二人で笠を作つてある雪の日に爺が町へ賣りに出た。

途中までゆくと道ばたに地藏様が十二體、頭から雪をかぶつて寒さうに立つて居られた。餘り氣の毒なので順に持つてゐた笠を被せてあげると一つ足りなかつた。しかし何とも一番しまひの地藏様が氣の毒なので自分の被つてゐた笠をぬいで被らせて歸つて来た。婆さんが出迎へて餅はと聞くから、地藏様のことを話すと、

婆は「それは良い事をした」と一緒に喜び、それでは火でも燃してあつて寝ようと、やがて床についた。翌朝外の掛聲に目を覺して兩戸をあけて見ると、軒下に搦きたての餅が澤山置いてあるので、驚いて向ふを見ると、笠を被つた十二體の地藏様が、爺の笠を被つた地藏様を先頭にして歸つて行かれる處であつた。

福島縣石城郡——昔研 二ノ二八九
青森縣 八戸——紫波郡昔話集 六七
岩手縣——紫波郡昔話 一一九
「六地藏が恩を返す」
「七人地藏様」

青森縣 八戸

岩手縣

「六地藏が恩を返す」

「七人地藏様」

江刺郡昔話 四

贈澤郡昔話集

秋田縣 角館町

聴耳草紙 二二三

山形縣 最上郡

豊里村誌 二五八

福島縣

昔研 二ノ一八四

「地藏の返禮」

新潟縣

磐城昔話集 三二二

「笠長者」〔例出〕

新潟縣 中魚沼郡

第一昔話號 四六

南蒲原郡

加無波良夜譚 一四三

南魚沼郡

昔研 一ノ三一五

「六地藏の報恩」

佐渡

同書 二ノ一一七

長野縣 小縣郡

第二昔話號 五五

鼠に曳かせて来たといふ條、他には見えず。童話化の経路。

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 九

「地藏の報恩」

千葉縣 五井町

市原郡誌 四八〇

島根縣 邑智郡

昔研 二ノ四一七

在りとのみにて、詳細不明。

徳島縣 美馬郡

同書 二ノ五六二

「正月神さま」

阿波祖谷山昔話集 六二

青森縣 八戸

青森縣 八戸

昔研 二ノ二八七

財寶發見

八二

佐賀縣 杵島郡

口承文學（手帖三五）

六人の僧形の歸つて行く後姿のなつかしさと、婆がそれはいいとをたしたとて共に悦ぶ平和な光景。東海道名所圖繪などにも見ゆる尾張笠の昔物語りも同系統。
「大歳の火」と關係あり。

弘法機

ある家で女房がせつせと機を織つて居るところへ、旅僧が托鉢に來たので機から下りて布施をする。二度來ても三度來ても快く機から下りて物を呉れるので、旅僧はその素直なのに感心し、禮に寶物をやると云つて、マキベツ（續絲の綜苧）をくれて去つた。これはたて糸さへ紡んで立てれば、マキは一生使つても無くならぬといふヘツであつた。成程三年の間織り續けても少しも減らぬ。ところがその絲草の穴へ指を入れてはならぬと戒められて居たにも拘らず、三年も使ふのに減らぬわけは無いがと不審して、指をその穴に入れて見たら、忽ちマキベツはかつちやらと無くなつた。其旅僧は弘法様だつたといふ。

青森縣 八戸——

昔研 二ノ二八七

四例あり 其中一つだけ機織る善心の女あり。

〔例出〕

これはもとの形に近きかと思はる。あとの三つは破片か、或は誤傳か。

遠江井川

旅傳 一三ノ一一

長崎縣

壹岐島昔話集 一一八

「泉の小さくだ」

寶 手 拭

昔、ある日一人のみすぼらしい物貰ひが来た。恰度其家の主婦は機を織つて居て、やかましがつて追出したが、女中が内密に握飯をやつた。物貰ひはそのお禮に手拭を一本呉れた。その手拭で顔をふくと、顔がきれいになる。皆もびつくりしてそのわけをきくので昨日の事を物語ると、主婦は口惜しがつた。幾日かして前の物貰ひが来たので、主婦は丁寧にもてなして色々のものを澤山やつた。物貰ひは朱子の帯一本をお禮に置いて去つたが、それをしめるといつの間にか帯は蛇になつてゐた。

青森縣 八戸

——壹岐島昔話集——

昔研 二ノ三二九

四話あり。

その一は「狼のはじまり」善心の女、旅僧から貰つた帛紗のやうなもので顔を拭くと若くなり、無慈悲の夫婦は狼となる。

その二は「弘法大師様の話」顔はみにくい心がけよき飯炊女に弘法様が法衣の袖をちぎつて呉れる。

その三は「和尚様のムカシ」嫁姑の話。姑の顔が馬のやうになる。嫁に裏返して拭けばなほることを教へて行く。

その四は「弘法様と女中」女中は美しく、女主人は馬になる。笑話化。

新潟縣

佐渡の昔ばなし 一九一

静岡縣

静岡縣傳説昔話集 一二九

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 一〇四

長崎縣 〔例出〕

壹岐島昔話集 一一七

全國記録 四六

若返りの水（彼岸水）

昔爺と婆とあつた。婆は山へ薪を採りに行つたが木を伐つてゐるうちに咽喉がかわいてたまらず、山奥へ行つて泉を見つけて飲んだ。すると十七八の若い娘になつてしまつた。家に歸つて来る

黄金の鈍

正直な爺様が、淵の岸で木を伐つて居たら、ふとした拍子に鈍を水中に落してしまつた。困つて居ると、淵の中から美しい姉様が手に黄金の鈍を持つて出て来て、鈍を落さないかと尋ねる。爺様は落したといふと黄金の鈍を前に差出して、これでは無いかと尋ねた。こんな立派な鈍では無い、さびた古鈍ですといふと、姉様は又淵の中に入つて行つて古鈍を持つて出て来たので、それだといふと、姉様は爺様の正直なのを賞めて鈍を兩方共呉れた。そのお蔭で爺様の家は長者になつた。

隣の婆様は、爺様が黄金の鈍を買つた話をきいて怠け者の爺様を木を伐りにやつた。いくらたつても鈍が落ちないのでわざと淵の中へ投込んだ。すると淵から美しい姉様が黄金の鈍を持つてあらはれたので、爺様はあわててそれは俺の鈍だと姉様の手から取り割つた。爺様は血みどろになつて家に歸つたが、これから家は益々貧乏になつた。

岩手縣 下閉伊郡

——岩手縣下閉伊郡岩泉町——

「黄金の鈍」〔例出〕

聽耳草紙 七〇

と爺が驚いてわけをきくので話すと、爺ももう一度若やぎたいとて泉をたづねて行く。家では婆さんがいくら待つて居ても爺さんが歸らないので行つて見ると、爺さんは泉のほとりで水を飲みすぎて赤ん坊になつて居た。

——栃木縣芳賀郡——

栃木縣 芳賀郡

第二昔話集 三二二

「子供になつたお爺さんの話」〔例出〕

長野縣

小縣郡民譚集 一六一

廣島縣 神石郡豊松村

藝伎「昔話の研究」八一

「よもぎの由来」

親の病氣に孝子が伊勢の若水を汲みに行く。歸つてみると死んで三十日も経つてゐるがこの若水で生き返らせた。妻が煩はしがつてその水を捨てるとその薬から不思議な木とも草ともつかぬものが生えた。夜の間に生えたのとは「夜の木」と云つた。

島根縣 邑智郡

昔研 二ノ四六四

落語にまで採用せらる。大話化する端緒である。

この話では授かる原因の段脱落せり。恐らくは亦見知らぬ旅人などの授けしがもとか。

岩手縣

江刺郡昔話 八二

鉈の代りに觸ると雨のふる不思議な玉を得。

福島縣 石城郡

磐城郡昔話集 三九・一七二

二話あり。

愛知縣

額田郡誌 五二六

美合村大字岡の鈴木氏方には龍宮の斧を藏す。これは珍らしがつて人間界の鉈と取換へたものといふ。

大分縣

直入郡昔話集 二七

「金の斧銀の斧」

龍宮童子（心得童子、如意童子ともいふ）

昔肥後の國に一人の爺があり、山に行つて薪を伐りそれを町へ賣りに出て暮して居た。ある日薪はどうしても賣れず、くたびれてしまつたので町の中の橋まで来てその薪を一把づゝ川の淵へ投げ込み龍神様を拜んで歸らうとした。すると淵の中から美しい女が小さい子供を一人抱いて出て来て、龍神様から薪のお禮にとて子供を呉れた。そしてこの御子ははなれ小僧様と云つて何でも願ひをきいて下さるがその代りに、毎日三度づゝ海老の膾を拵へて御供へ申さねばならぬと云つて、女は水の底へ歸つて行つた。

爺様はその小僧様を抱いて来て神棚のわきにすゑて、大切に育てた。何でも欲しいものを頼めば、ふうんと鼻をかむやうな音をさせて出して下さるので、少しの間に見ちがへる様な大金持になつてしまつた。

爺様は毎日町へ出て海老を買ひ膾を拵へて供へて居たがしまひにはそれも面倒になつて、はなれ小僧様に向つて「もう貴方に何も御願ひする事はありませんからどうぞ龍宮へ御歸り下さい。そして龍神様へよろしく御傳へ下さい」と云つた。すると小僧様は黙つて外へ出て、しばらくの間家の外で鼻をすくる音をさせて居たが、そのうちに段々と倉も家もなくなつて以前のあはら家だけが残つた。爺様はこれは大變と急いで小僧様を引留めようとしたがもう姿は見えなかつた。

熊本縣 玉名郡
昔研 二ノ三三二

青森縣 八戸

二話あり。「龍宮の門松」「ギリが飛んだ話」

岩手縣

江刺郡昔話 一三・二三

新潟縣

紫波郡昔話集 八

「福の神よげない」

南蒲原郡昔話集 八九

「龍宮童子」

熊本縣 玉名郡

旅傳 二ノ七

昔研 一ノ二二七

「鼻たれ小僧様」〔例出〕

鹿兒島縣 喜界島

第二昔話號 二五

〃

喜界島昔話集 三

「龍神と花賣」

〇参考

×桃太郎の誕生 五九

×昔研 一ノ一五一・二〇四

黄金小犬

愛知縣 額田郡

愛知縣傳説集 二五二

岩津町の眞福長者の由來。これは小さな蛇を助けて夢に小犬を贈られる。この犬は海中の寶云々といふことあり。毎日三升の米を炊き與ふれば三升の砂金を吐き、つひに長者となる。之は記録かと思はる。

鹿兒島縣 喜界島

島 二ノ四四〇

長崎縣 壹岐

第一昔話號 八一

「金を放る龜」

忽ち小僧

長野縣 下伊那郡山本村

露原 三號

安倍童子は狐の子。龜を助けて龍宮へ行き「トラの巻」と「リウセンガン」といふ寶物を貰つて歸る。トラの巻は肌につけて居ると寒暑を感じず、リウセンガンをつけると鳥の言葉が判る。鳥の言葉に依り出世をしに京へ行き「忽ちわかる災難を、知らぬ者こそふびんなれ」と呼んで歩き、忽ち小僧の名を得、天子様の病氣をなほす。

龍宮入り

青森縣 八戸

昔研 二ノ三三〇

外ヶ濱の善助といふ男、鱈を助けて龜に迎へられ水都を訪問、開くかの玉手宮を開いて見て白髪となること浦島太郎の如し。

岩手縣 上閉伊郡

聽耳草紙 四六三

「龍神の傳授」

龍神より授かつた瓶に入つてゐた靈水で病を治す。誤つて割るとそのかけらのある地より草を生じ、それが艾だといふ。若返りの水、のみすぎの笑話なども考へあはされる。

打出小槌

龍宮童子と同系の昔話。

熊本縣 八代郡 第一昔話號 七八

爺が門松を川に投げ込むと、川の中から龍宮の使ひがあらはれて爺を龍宮へつれて行つた。いろ／＼御馳走にあづかつて、歸りには小さい打出小槌を買つて來た。何でも欲しいものが出るといふので試みにコメと云つて打つと米が澤山出て來た。次にクラといふと倉が建つてその中に米が入つた。隣の爺さんは羨しがつて譯をきき、打出小槌を借りて、一度に澤山の倉を建てようとコメクラコメクラと續けざまに云ふと小官が續々と出て遂に隣の爺さんを殺してしまつた。

熊本縣八代郡

青森縣 八戸

昔研 二ノ三三三

廣島縣

藝備「昔話の研究」七〇

米倉出よ、と打出小槌を振ると、小官が澤山出て「爺さんまゝ食ひたい、婆さん菓子食ひたい」といふ。

岡山縣

熊本縣 天草

岡山文化資料 二ノ六 郷土研究 五ノ六

ある所に兄弟があつて、兄は情深く氣立てがよかつたが弟は慾深の博奕打であつた。飢饉のつゞいた年、兄は貯へを段々と人々に施して貧乏になつてしまつた。或る日食べるものも無くなつて困つてゐると白い鬘の生えた爺がやつて來て、今まで村の衆の爲になる事をしてくれだから、よいものを持つて來たといつて、何でも出る石臼を兄に渡したまふ行つてしまつた。兄が米出る、金出ると云つて廻すと米や金が出るので又それを貧しい人に施してやつた。慾深い弟は兄の賣の白の話を聞いて手に入れたと思ひ、ある日兄を誘つて石臼を持たせて一緒に舟にのつて海へ漕ぎ出し、船の中で兄を殺してしまつた。そして弟は家に鹽が無かつたので、鹽出ろ鹽出ろと白を挽きはじめると、鹽は舟いっぱいになつたが止め方を知らないで、どうしても止まらない。とう／＼石臼といつしよに海

の中に沈んでしまつた。

海の水の鹹いのは、今でもこの白が廻つてゐるからである。

徳島縣美馬郡

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚 二九三

小人に逢つて毒饅頭と石臼とを交換する記述に、一寸法師式のかしみを添ふ。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 一六九

「海の水のしよつばいわけ」

岡山縣

御津郡昔話集 一七一

徳島縣 美馬郡

阿波祖谷山昔話集 八七

「海中の石臼」〔例出〕

○参考

×昔話研究 一ノ九ノ二一 支那類話。

善悪二兄弟、山神の教で小妖より石磨を賣ふ。賊之を盗みて云々。

×朝鮮民譚集 三〇

「海水の鹽辛い理由」

寶の引白と盜。之を手に入れる順序は云はず、前半脱落か。

熊本縣 八代郡

「米倉小官」〔例出〕 話者が盲法師だつたことを考へると、この洒落が一段とおもしろい。

鹽吹白

ある所に兄弟があつて、兄は情深く氣立てがよかつたが弟は慾深の博奕打であつた。

飢饉のつゞいた年、兄は貯へを段々と人々に施して貧乏になつてしまつた。或る日食べるものも無くなつて困つてゐると白い鬘の生えた爺がやつて來て、今まで村の衆の爲になる事をしてくれだから、よいものを持つて來たといつて、何でも出る石臼を兄に渡したまふ行つてしまつた。兄が米出る、金出ると云つて廻すと米や金が出るので又それを貧しい人に施してやつた。慾深い弟は兄の賣の白の話を聞いて手に入れたと思ひ、ある日兄を誘つて石臼を持たせて一緒に舟にのつて海へ漕ぎ出し、船の中で兄を殺してしまつた。そして弟は家に鹽が無かつたので、鹽出ろ鹽出ろと白を挽きはじめると、鹽は舟いっぱいになつたが止め方を知らないで、どうしても止まらない。とう／＼石臼といつしよに海

厄難克服

鬼むかし

福島縣

方言 四ノ五

會津にこの話あり。鬼と戦つた昔話の類を言ふかと思はる。別に「狐昔」といふもあり。

なら梨採り

昔三人兄弟があつた。父が長い患ひで仲々治らず、奥山のなら梨を食へさせれば治るといふので上の兄が採りに出かけた。薪採りの婆さんに會つて道をきくと、奥山には怪物が居て今まで歸つた人が無いから行かぬ方がいゝと言ふ。止めるのをきかずに行かるとすると、もう少し行くと黒い鳥と白い鳥とが居る。黒い鳥が啼いたら行くな、白い鳥が啼いたら行けと教へて呉れた。本當に黒い鳥と白い鳥が居て、黒い鳥が行くなガアと啼いたが、父の病を癒したい一心で行くと大沼があつて、そばに一本のなら梨の木があり實が甘さうになつて居る。兄は喜んで木に登つてもいでる

ると、池から怪物が出て来て兄を吞んでしまった。次に次兄が行く事になり、これが亦怪物に吞まれてしまった。三番目の弟は父のとめるのもきかず、薬人形を拵へて出かけた。途で例の婆様にあつて兄の行方をきくと、怪物に吞まれた様だから行くなと云はれた。けれども父の爲だし又兄の仇打もしたいとて、行く事になつたが今度は白い鳥が行けと啼いた。沼の邊りのなら梨の木に持つて来た薬人形を結びつけて自分は隠れて居ると、怪物は薬人形を人だと思つて吞まうとするが、結付けてあつて吞めないで居る所を弟が出て来て馬のりになつて喉をしめると、赦してくれと云ふので兄二人を出せば許してやるといふと、兄二人を吐き出した。三人はなら梨を澤山もいで父に食はせたので病氣は治つた。

岩手縣碑貫郡花巻

青森縣 三戸郡八戸

昔研 二ノ四二八

四話あり。前三つは「さやすりふくべ」文句はやゝ面白いが前後のつゞきは明かならず、いづれも破片。

岩手縣

柴波郡昔話 六六

「山梨の化物」

上閉伊郡

老嫗夜譚 一九七

「奈良梨」

父と二人の男の子、懷妊の母の爲にとりに行く。途中色々の警告

と援助あり。

その形は正しく昔話。

岩手縣 碑貫郡花巻

第二昔話號 三〇

「三人兄弟のなら梨もぎ」

〔例出〕

山形縣 東田川郡

昔研 一ノ三七四

「成田李」

こわれてゐるらしい形。

秋田縣 仙北郡

角館民俗資料 二八一

「三人兄弟と和尚」 化けた古狸は和尚に退治される。

法印と狐とによくある型の流用か。

新潟縣

佐渡昔話集 一四八

栃木縣 那須郡烏山町

國民童話 一二二

「化物梨の木」

鹿兒島縣 奄美大島

昔研 二ノ三七六

「情深い三男」

（参考）

ヤーズレー 七六

さやすりふくべ

「なら梨採り」系の話。歌うたふ瓢を二人の兄は怖れて逃げ歸り、三番目がとると實は寶物であつた。

青森縣 八戸

昔研 二ノ四二八

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚 一九六

「瓢箪長者」

上閉伊郡昔話集 二六

歌ひ骸骨とも關係がある。

人影花

「鬼ヶ島渡り」「美女奪還」「天人女房」の話などに伴ふ。「人花」とも云ひ、佐伯郡では男花女花といふ。

青森縣 八戸

昔研 二ノ四二八

廣島縣

藝備「昔話の研究」一一九

同書 一九六

鬼の子小綱（鬼の笑）

爺と婆とが娘を育て居たが或時鬼にさらはれてしまった。爺は長い間捜した末、山奥で子供に會つてたま／＼それが自分の娘の子である事を知つた。親子三人會つて喜んで居る處へ鬼が歸つて来たので、爺を押し入の中へ隠して置いた。鬼は人臭い／＼とて方々探すので爺の來た事を語り、母と子とで食はないやうに頼んで爺を出した。鬼は食べたくてたまらないので、風呂で煮殺して食はうと子供に風呂を焚かせる。子供は爺を抜道から逃がしてやつて、知らぬ顔をして風呂を焚いて居た。爺がもう逃げのびたと思ふ頃風呂に蓋をして大石をのせ杓子を一本持つて、母と抜道から逃げ出した。鬼は來て見ると子供は居ないし、風呂の中も空っぽで何も無い。逃げたと思つて怒つて追かけた。爺と母と子とは海岸に出て船へのつて漕出さうとする所へ、鬼が追付いて来て口惜しがり海水を呑みはじめた。見る／＼うちに海水が減つて船は海岸へ戻り、鬼の手がとどきさうになつた。そこで鬼の子は杓子で滑稽なまねをして見せたので、鬼は笑ひ出してその拍子に海水をはき出し無事に船は沖に出て家に還る事が出来た。

——長野縣南安曇郡——

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚 一三五

「鬼の子小綱」

これには後段あり。鬼の子の小綱焼け死んで、その灰は虻蚊となるといふ。

岩手縣 岩手郡栗石

聽耳草紙 一三三

「よい夢」

よい夢を見たといふ小僧、舟に入れられ鬼が島に流れつく。鬼を笑はせ海水を吐き出させ、浮靴と生針の寶物を持つて歸る。話はやく略され、又複合してゐる。

新潟縣

南蒲原郡昔話集 一四三

「母子と鬼」

一四五の「鬼の子」話の前半は挿入。

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 九一

「七つの釜」

鬼を笑はす條は無し。

これが成功譚の後に伴ふはグリムにも例多し。

美女奪還

鬼の子小綱と同型の話。逃竄説話の一型式。

青森縣 三戸郡八戸

昔研 二ノ四二八

「鬼が島渡り」

二話あり。

その一は鬼に吞まれて腹の中で鬼を笑はせる。白犬を助手とすることは桃太郎に近い。

その二は猿聲入のやうな辭端で娘を鬼に呉れる。それを助けに行くのがボサマである。

岩手縣

紫波郡昔話 一三八

「鬼にさらはれた女」

夫は笛吹きの名人とあることで天人女房の破片であることを知る。

岩手縣

紫波郡昔話 一八六

「天のお姫様と若者」天上聲入。

岩手縣

聽耳草紙 九四

「姉のはからひ」

同書 九八

「鬼の豆」

秋田縣 仙北郡

角館民俗資料 八七

宮城縣 桃生郡

郷土の傳承 三

石川縣

江沼郡昔話集 一二六

「神さまと酒のみ」

長野縣 南安曇郡

第一昔話號 五三

「鬼を笑はせる」 (鬼の子小綱参照) (例出)

小縣郡長久保年中行事

蛇聲入の發端。一月晦日の鬼の目の傳説。

静岡縣 志太郡焼津町

静岡縣傳説昔話集 四六三

岐阜縣 吉城郡

ひだびと 五ノ二五〇

「鬼の子小綱」

旅の薬屋が薬を酒に加へて鬼を殺して、若い女房を助け出すことは、頼光大江山に似てゐる。但し題名の小綱に當るものは無い。

兵庫縣 氷上郡

旅傳 一〇ノ四ノ七四

「女房のはからひ」

伊勢四郎といふ男。一旦賣つた女房が、山奥の山賊に請出されてゐるのを助けに行く話。

「蓮の葉に露一つ」の挿話あり。

鹿児島縣 喜界島

島 一ノ六ノ三六六

「花のマグズミ」

妻が後生(あの世)に行つて夫の命を貰ひ歸る話。

鹿児島縣 喜界島

昔話集 一〇五

「アサナローの花」

喜界島昔話集 一一三

厄難克服

鹿児島縣

島 二ノ七ノ四三六

「鬼の子」

探しに行くは弟、姉は之を虎がめにかくす。暇を見て子供と姉弟と三人で逃げ出す。糞に針千本をたて、置くと返事をする笑話あり。その代り海水を呑み干されても尻を叩く笑は無し。鬼の子が島に着く前に海に投じて死ぬ哀話を伴ひ、情の動きは音楽のやうである。

鹿児島縣

喜界島昔話集 一一〇

「椎の木山の妻」

夫婦で親ケンソーに出かける。夫が途中の山で椎の實を探つてる中に妻を大盗人にとられる。乾餅を賣りに行つて妻を救ふ。

○参考

ヤーマレー 九三

鬼ヶ島脱出

迷ひ込んだ鬼の家より鬼を殺して逃れる話。

徳島縣 名西郡

昔研 一ノ一三三

「白い鳥」

姉妹二人道に迷うて婆の家に泊る(椎拾ひと似て居る)。爺が歸

つて来て二人を食ふ相談をして居るのを立聴し、釜に湯を沸かす
婆をうしろからくどへ突落して逃げる。爺も鬼となり追かけると
白い鳥が来て二人を助けてのせて行つた。白い鳥は氏神様であ
つた。

龜に突落す所までヘンデルグレッツェルと似てゐる。

鹿兒島縣

喜界島昔話集 七〇

「二人兄弟」

繼母に憎まれて家を追はれた二人、互に望をもつて、又弓の弦が
切れたら死んだと思へと云つて別れる。弟は奉公し、死鞭と同じ
効ある力を買つて出る。迷つて鬼の家に入り美女に教へられて刀
を以て鬼を殺し、寶物の生鞭ととりかへて来る。弓の弦がきれて
兄の死を知り、葬禮に間に合うて生鞭で蘇生さす。

七つの釜

鬼ヶ島の變化。

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 九一

鬼の聲の家に舅が行つて七つの釜を見せて賣ふ話。之を七つとも
見た者は必ず殺されるといふ。舅は一つづゝ褒めて一足づゝ退
く。鬼はその智慧に感心して無事に歸す。

後半はこわれて居る。

鹿兒島縣

喜界島昔話集 一〇五

アサナロー花の話の中は酒麴を見せてもらふ話がある。

千里の靴

山梨縣 西八代郡

續甲斐昔話集 一五九

「捨て子と鬼」

貧しい母が三人の子を育てかねて奥山に捨てた。夜になると兄二
人は泣き出したが、弟は兄等を勵まして灯を目あてに行く。鬼の
家であつた。婆は三人をかくしておいた。其處へ鬼がかへつて來
て人臭い／＼と云ひつゝ、欺されて千里の靴をはいて探しに出て
行つた。留守に三人は別のみちから逃げたが道に例の鬼が高軒で
寝て居る所へ行き當つた。こゝでもまた弟の智慧で鬼の足の千里
の靴を奪ひ、三人無事に親元へ歸ることが出来た。
千里の靴は外國のものゝ傳來か？
母が貧しくて子を山林に捨てることは、ペンタメロネなどゝ全く
おなじである。

水の神の文使ひ

或男が夕方急いで川端の道を通ると、雑魚釣りをして居た一人
の男が呼びとめて、下の方の淵のほとりにも一人の雑魚釣りが居
る筈だから、これを届けて呉れと云つて一封の手紙を渡した。

男はそれを何気なしに下の淵のほとりに居た人に渡すと、開い
て見て居たが、急に一寸まつてくれ、今淵に落し物をしたからと
云つて水の中にとび込んだ。暫くすると出て来て俺は實はこの淵
に住む河童で、今上の河童から「此男は紫尻でうまいから捕つて
食へ」と云つてよこしたのだが、お前があんまり正直だから食ふ
事は出来なくなつた。そして、その心に賞でて之をやると云つて
黄金包みを呉れ、誰にも云つてはならぬぞと云つて淵にとび込ん
で行つた。それから男は金持となつた。

青森縣 三戸郡八戸

——岩手縣岩手郡——

岩手縣 上閉伊郡

奥南新報 昭和五・四・四

「盡きぬ錢纏」

膽澤郡

上閉伊郡昔話集 一九

厄 雜 克 服

「黄金の馬」

お禮に賣つたのは駒。駒形山の傳説となつてゐる。

岩手縣 岩手郡

聽耳草紙 四四

「上下の河童」 「例出」

岩手縣 下閉伊郡

聽耳草紙 四二

「兄弟淵」

二つの淵の傳説となつてゐる。六部の手紙書換の條あり。

宮城縣

紫波郡昔話集 一〇五

「大沼のぬし」

宮城縣

登米郡誌 下ノ八一二

茨城縣 行方郡山田村

民俗叢話 六二

「なぶつが池の獨り姫」

石川縣 能美郡

昔研 二ノ三七二

「横山長者」

主人公は八歳の子供。修験者の手紙書換へあり。

京都府 桑田郡

口丹波口碑集 三七

「川の主」

和歌山縣

地方叢談

大分縣 日田郡

趣味の傳説 二二九

猿神退治

昔黒石の正法寺といふ寺には、何遍和尚様がついても化物に食はれて困つてゐた。或時そこへ托鉢して来た和尚様があつたのでこの空寺に泊めた。和尚様は師匠から「空家に泊まる時は一つ戸の口に寢よ」と教へられたのを思ひ出して、臺所の釜の下に入つて寢てゐると、夜中に太堂の方からガタ／＼と何だか出て来て、今日御馳走のある前祝ひだと言つて

丹波の國デンジョウ坊に此事必ず聞かせな——チウ、、、、と歌つて踊つた。それから人臭いナ／＼とそこを探し廻つたが何も居ないと思つたか出て行つてしまつた。朝になつて村人は、又和尚様は骨になつてゐるだらうと見に来ると生きてゐるので、これは偉い和尚様だと感心してこの寺の住職になつてくれと願つた。和尚はそれなら又来るから、それまで待つてくれと丹波の國ヘデンジョウ坊を尋ねて行つた。するとデンジョウ坊といふのは猫であつたが、それを借りて歸つて来ると、村人はもう歸つては来るまいと噂してゐたところであつたから、喜んで寺の住職にした。猫はいつも和尚について歩いて一時も離れない。譯を尋ねると、この寺の化物といふのは古い鼠で、自分があるなければ貴

方は忽ち食はれて了ふのだといふ。これを退治するには自分の兄弟猫の助けがなければならぬといつて、自分の代りに繪姿を貼つて十日程留守にしたが兄弟を連れて戻つて来た。そしてその夜中に二匹で古鼠と久しい間戦つて、猫も鼠も共斃れにたほれて死んだ。鼠の足で經机を作つて今も寺に賣物となつてあるといふ。猫は手厚く葬つて和尚様はお寺の住職となつて暮したとき。

岩手縣 稗貫郡

昔研 一ノ五〇九

「正法寺の古鼠」〔例出〕

「稗貫郡黒石の正法寺の古鼠」

此寺に昔話の多きことは、ボサマを庇護したかと思はれる。

岩手縣 上閉伊郡

聽耳草紙 七四

「樵夫の殿様」

秋田縣 平鹿郡

昔研 二ノ三六四

「丹波の國の素平太郎」

山形縣

旅傳 七ノ六

「三毛犬・四毛犬」

山形縣 大山

旅傳 一ノ八ノ六五

五月十五日の大山の犬祭の記事中に傳説としてある。

宮城縣 桃生郡

郷土の傳承 三

「竹籠太郎」

犬の名は竹籠太郎といふ。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 五九・一五一

「ばけものゝ話」

石川縣

鹿島郡誌 九五

七尾山王社の人身御供。

〃 鳳至郡柳田村

鳳至郡誌

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 三七・二〇〇

二〇七に 猫にも二話あり。

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 四八

「丹波のお作丈」

建長寺の和尚話と結合してゐる。

長野縣 上伊那郡

郷土研究 一ノ三ノ一七〇

上伊那赤穂村光前寺に早太郎の碑があり、早太郎又はヘイボ太郎といふ犬で、美濃伏見里に於て怪物を噛んだといふ傳説がある。

長野縣 下伊那郡

傳説の下伊那 一二二

長野縣 北佐久郡

北佐久口碑傳説集 二二七

「音正寺の化物」

化物は古猫、望月の音正寺といふ寺、無住の時化物等の歌より知つて「高崎のたんぼろりん」といふ犬をつれて来て退治させる。

厄難克服

九五

九四

兵庫縣 城崎郡

昔研 二ノ四一八

「人身御供」 犬の名はなし。

この話は破片。

島根縣 邑智郡

第一昔話號 七三

「猿退治」

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 五

正月七日に出て千里四方の洪螺貝の中に三年間暮す。「すつべい太郎に知らしてくるな」の歌はあるが、退治話はない。

福岡縣 鞍手郡

福岡縣昔話集 八八

「日向の日向次郎」

〃 糸島郡

同書 八九

「化物退治」

長崎縣 南高來郡

島原半島昔話集 九三

「地藏と旅人」

〃

同書 九五

「村の神様」

二話とも世間話化してゐる。

熊本縣 葦北郡

昔研 一ノ三三四

「婆に化けた猿」

或男 山の家に泊るとその家の婆は猿で、犬を食つてしまつた。

厄難克服

九五

「濱に出て四十年生きとる犬と勝負させう」といふので、つれて来て勝負させると両方共死んでしまふ。

話はとわれてゐるがたしかに猿神退治系のもの。

三國傳記の目檢校 カマクラノ「メイケンノウ」

鹿兒島縣

甌島昔話集 一四八

「三太郎犬」

旅 人 馬 (板橋三娘子型)

一人の和尚が六人の若衆と共に山道を迷ひ一つ屋に泊つた。その家の爺は夕飯の支度をしようとして云つて炬に粥の鍋をかけて置いて隣室へ入つて行つた。和尚が隙見すると鹽へ土を入れそれに何か種をばら／＼とまいて庭をかけて暫く置くと青々と草が生えて来た。和尚が知らぬ顔をしてゐると、その草をもつて室から出て来て鍋の中に入れて煮て皆にすすめたが、和尚だけは食はずにふところ流し込んだ。その後爺は風呂をすゝめ、若衆を入れると皆馬になつてしまふ。和尚はその間に逃げ出すと爺は心づいて鬼の正體をあらはして追かけて来た。南無阿彌陀佛を唱へつゝ逃げてやつと夜明けとなり、鬼も仕方無く引返して行つたので、和尚は危く助かつて人里へ歸ることが出来た。

——山梨縣西八代郡——

友人の助力あつて又もとの人間となる話もある。

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚 二七五

縞の薄を食へば又人の形となる云々。

末めでたしであるから本の形といふべきか。

秋田縣 仙北郡

昔研 一ノ四六二

「馬毛の生えた六部」

旅で怪寺に泊り、和尚と思つたのが實は馬で、逃げた踵に馬の脊を投げつけられ、其處だけ馬の毛が生えた。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 五一・一三九

これは牛にする話。

山梨縣 西八代郡

續甲斐昔話集 一三〇

「人が馬になる」 [例出]

鹿兒島縣

喜界島昔話集 九七

「旅人馬」

よほど外國風の結構が見え、醜案らしくはあるが、直接のものは思はれない。

甌島昔話集 一二四

鹿兒島縣

魔法比べあり。

沖永良部島

おきえらぶ昔話集 一四七

「旅人馬」

危険の行きどまりまで行く事がこの話の叙法か、所謂スリル。

○参考

×南方隨筆 二二八

×奇異雜談集

×クラウストン 一ノ九七

×老嫗夜譚 二四七のものなどは復讐を伴ふ。此方が今昔などよりも幻異志に近い。

×今昔物語 下ノ六一〇

には復讐なし。鬼の家に逃げ込み、なほ救はれる。夜更けて鬼の歸る條は、なほ昔話の形を保つてゐる。

×幻異志 板橋三娘子の話がある。

×寶物集 親が馬となつたのを子が助けた天竺の話。

縹 縹 城 (脂取り)

旅人馬と同系。人を捕へて肥らせ、又脂や血をしぼりとる話。

噺話參照

岩手縣

紫波郡昔話集 一四一

「怠け者」

厄 難 克 服

人間の脂しぼりで縹縹城式の話となり、結末は夢としてゐる。結末の夢としてある所を見ると、後に入つて来たものゝ利用である事が判る。ボサマの語り物か。

青髻式挿話はあるが「あけてみるな」の禁は無し。大きな家に

女一人といふ所、板橋三娘子と似てゐる。

又婆に助を乞ふと「俺はあの家のお蔭で暮して居る云々」とこ

れは今昔に近い。

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 九五

「血を搾る家」

鹿兒島縣 喜界島

昔研 一ノ三三一

「力士泉川」

力士泉川が山賊の家に行つてみると、人を飼つて肥らせ鬼に賣る

算段をしてゐたのでこれらの人を助けて歸した。

鹿兒島縣

喜界島昔話集 一〇八

「脂取り」

三枚の御札

或寺の小僧が山へ花を折りに遣つて下さいと和尚に頼むと、鬼が出て来ると大變だから行くなと云はれたが、どうしても行きた

いと云ふと和尚は守札を三枚與へて、困つた時があつたらこれを投げろと教へてくれた。

小僧が花を折つてゐると婆が出て来て、いゝ物をやるからと云つて家につれて行かれた。そしてその夜は其處に泊ることになつた。夜になつて雨がふつて来た。寝ながら雨だれの音を聴いてゐると「タンタンたるぎの水はづみ、起きてばんばの面ア見ろ」と音がする。小僧はそつと婆の方を見ると、婆は鬼になつて居た。これは大變、どうかして逃げようと思つて便所に行きたいと云ふとやつと出してくれたが腰に繩をつけそのはしを挽臼に結びつけられてあつた。「小僧いゝか」と聞く度に「まだまだ」と返事をしながら、腰の繩を解いて柱に結びつけ守札を一枚さして返事をして呉れと云ひ置いて逃げ出した。

婆はいつまでたつても小僧がまだノノと云ふのでひつぱつてみたらもう居なかつた。怒つてすぐ追かけて来た。追ひつかれさうになつたので川出ると云つて守札を一枚投げると大川が出来、又危くなつて大きな山出ると投げると大山が出来た。婆がその山に上りかねてゐる中、小僧は寺に着いて和尚様に戸棚の中に隠して貰つた。婆はとび込んで和尚様と押問答をし、遂に和尚を食ふといふ。和尚は技倆比べをしようとして婆に豆粒になれと云ふと、コロリと小さな豆粒になつてしまつたので、和尚は焼いてゐた餅に

つけてその豆を食つてしまつた。

——秋田縣仙北郡角館——

「鬼の家の便所」「和尚と化物」「耳切團一」など参照
この話多く和尚の參與あり。

青森縣 南津輕郡黒石

津輕口碑集 二九

高蒲の中に隠れて助かると云ひ、五月五日の節供の由來と結びつてゐる。

青森縣

津輕昔話集 九六

「小坊糞いゝが」

岩手縣

江刺郡昔話 四一

悪鬼が芥子粒になつて和尚に食はれた話。

〃

紫波郡昔話 七八

「山女」

これは御札が一枚で、和尚も山女に食はれ、唐櫃にかくした小僧は白い犬となつて出て来る。

秋田縣 仙北郡角館

聴耳草紙 九一

「鬼娘と小僧」〔例出〕

〃 鹿角郡宮川村

昔研 一ノ九二

「山姥と小僧」

秋田縣 平鹿郡淺舞町

昔研 二ノ一二四

「小僧と鬼婆」

鬼は豆粒となつて和尚に食はれた。その藪から澤山の蠅がとび出した。鬼婆が日本中の蠅のものであるといふことは蚤や蚊の起りと近い。

宮城縣 桃生郡

郷土の傳承 三

〃 栗原郡鷺澤村

同書 一ノ一七四

福島縣 石城郡

磐城昔話集 五二・一四一

新潟縣

南蒲原郡昔話集 一三六

「山婆と小僧」

〃 南魚沼郡

昔研 一ノ四六九

「山姥と小僧」

長野縣

小縣郡民譚集 二五〇

「便所の神様」

〃

同書 一九〇

「まつたらこうよ」

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 一〇〇

「小僧と山婆」

栃木縣 芳賀郡

茂木昔話集 三六

「三本の手紙」

厄難克服

發端蛇蟠入に近く、家の庭の割目を繕ふ約束で鬼に娘をやる。

蛙が便所で三本の手紙をくれ、それにより高蒲と蓬の中で難をのがれるといふ。五月節供の由來話となる。

岐阜縣 吉城郡上寶村

ひだびと 五ノ二四八

〃

國民童話 一〇八

熊本縣

天草島傳説纂輯

長崎縣 南高來郡

昔話採集手帖 六三

「子浚ひ麒麟」

島原半島昔話集 八四

馬の援助により逃げ、三つの玉と打出の小槌で助かる。

麒麟は鬼神か。

鹿児島縣 喜界島

昔研 一ノ三二七

「鬼の母」

母が鬼で、その子が坊様から貰つたお札の守護によつて厄難をのがれる。

鹿児島縣

昔研 一ノ三二九

「和尚と小僧」

三十三尋の大蛇が首を取られに來る。和尚は三枚のお札でその蛇を退治するが、それは麝香の蛇で、天とうから授かつた寶であつた。

○参考

睡が代つて返事をする事、北アフリカの例にある。
ヤーズレー 一二二

鬼の家の便所

「三枚のお札」の話からお札の條のぬけた話。よほど「天道さん金の綱」に近くなつてゐる。

岐阜縣 吉城郡上寶村 二話あり。
ひだびと 五ノ二四八

その一は兄弟が婆の家に泊り便所の窓から逃げる。神様に一心に頼んで繩を柱にくくりつけて置く代りに、「まだや」と答へてくれる。

この點に興味を持ったかと思はれるが、便所の神の代理の話は他の地方にもある。

その二は繼子の栗拾ひの後につゞく。繼子の方が繩を箒にむすびつけて歸る。「まだや」と答へるのはその子自身である。

鬼を一口（和尚と化物）

「三枚のお札」の後段。

鬼が和尚に欺かれて化けたあげくに退治される話。

岩手縣 膽澤郡

黄金の馬 一

「和尚と小僧」

上閉伊郡遠野

遠野物語 二七六

旗屋の縫といふ男、山に入り、青入道と智慧比べして小さくして火打箱に入れて持歸る。歸つてその火打箱の中を見ると青蜘蛛であつた。

栃木縣 芳賀郡

第二昔話號 三八

「蚤になつた山男の話」

守札は無い。

新潟縣 南蒲原郡

新潟縣 南蒲原郡

茂木昔話集 五一

栃木縣 芳賀郡

鬼が蚤に化けて和尚につぶされる話。

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 二六

「狐と息子」狐を饅頭に化けさせて食つてしまふ。

大分縣

直入郡昔話集 八四

○参考

醒睡笑 一五

耳切團一

前半は三枚のお札。後は和尚が小僧の耳だけにお經を書かなかつたので、鬼に耳をとられたといふ話。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 五四・一四七

「鬼婆に耳から食はれた話」

新潟縣 南魚沼郡

昔研 一ノ四六九

「山姥と小僧」

鬼と睨みくら

大分縣

豊後傳説集 一〇

百合若。鉦を眼にあてゝ鬼に目勝つこと。豊岐にもあり。語りものによるか。

○参考

目勝といふ語は吾妻鏡に見える。看聞御記にもあり。

天道さん金の綱

昔或所に三人兄弟があつた。母親が買物に出かけるとて兄弟等と呼んで「私が歸つて来るまでおとなしくして居よ、人食ひが來

厄難克服

これが日本の「赤頭中」又は「七つの小羊」である。

——廣島縣安佐郡——

福島縣 双葉郡川田村

昔研 二ノ三二四

福岡縣 宗像郡

福岡縣昔話集

「花子と次郎」姉弟の兄弟。姉は食はれ弟は逃れる。金の綱の條は無し。

福島縣 石城郡

磐城郡昔話集 五五・一四七

企救郡、鞍手郡の話一つづゝ載す。鞍手郡のは羊と狼の話。これは譚譯かと思はれる。附録に山姥と三人姉妹の話あり。天に登りて星となるといふ。

栃木縣 芳賀郡

茂木昔話集 四八

福岡縣

豊前民話集

埼玉縣 川越

川越地方昔話集 九五

福岡縣

豊前民話集

「兄弟星」

五倍子雜筆

「山姥と兄弟」

第二昔話號 三七

奈良縣 北葛郡

昔話採集手帖 六四

大分縣 西國東郡眞玉村

第二昔話號 三七

廣島縣

藝備「昔話の研究」

「小供と狼」

昔研 一ノ四七四

三話あり。

安藝國昔話集 九七

熊本縣 天草郡

昔研 一ノ四七四

安佐郡

同書 九九

熊本縣

熊本縣

「唐黍の根はなぜ赤い」〔例出〕

同書 九九

熊本縣

熊本縣

「お月さん 十三七ッ」

第二昔話號 三八

熊本縣

熊本縣

香川縣 高松市

阿波祖谷山昔話集 七〇

熊本縣

熊本縣

「山姥の話」

福岡縣昔話集

熊本縣

熊本縣

徳島縣

福岡縣昔話集

熊本縣

熊本縣

福岡縣 築上郡

福岡縣昔話集

熊本縣

熊本縣

「山姥の話」

福岡縣昔話集

熊本縣

熊本縣

長崎縣 北高來郡諫早

口承文學 八ノ四

長崎縣

長崎縣

「狐と子供」

口承文學 八ノ四

長崎縣

長崎縣

發端は牛方山姥の如く、天の綱の條は無い。

口承文學 八ノ四

長崎縣

長崎縣

破片か。

口承文學 八ノ四

長崎縣

長崎縣

長崎縣 南松浦郡

五島民俗圖誌 二五八

長崎縣

長崎縣

「山うば」

五島民俗圖誌 二五八

長崎縣

長崎縣

「山姥の話」

五島民俗圖誌 二五八

長崎縣

長崎縣

鹿兒島縣

喜界島昔話集 一一五

長崎縣

長崎縣

「姉妹と鬼」

喜界島昔話集 一一五

長崎縣

長崎縣

發端は牛方山姥の如く、鬼の腹を割いて母を活かしかへすことは「七ツの小羊」に似てゐる。

喜界島昔話集 一一五

長崎縣

長崎縣

鹿兒島縣 奄美大島

昔研 二ノ三七五

長崎縣

長崎縣

「天道さん強い綱」

昔研 二ノ三七五

長崎縣

長崎縣

〇参考

昔研 二ノ三七五

長崎縣

長崎縣

×朝鮮の例あり。

昔研 二ノ三七五

長崎縣

長崎縣

×朝鮮民譚集 五

昔研 二ノ三七五

長崎縣

長崎縣

「日と月と星」

昔研 二ノ三七五

長崎縣

長崎縣

厄難 克服

昔研 二ノ三七五

長崎縣

長崎縣

「天道さん強い綱」

昔研 二ノ三七五

長崎縣

長崎縣

〇参考

昔研 二ノ三七五

長崎縣

長崎縣

×朝鮮の例あり。

昔研 二ノ三七五

長崎縣

長崎縣

×朝鮮民譚集 五

昔研 二ノ三七五

長崎縣

長崎縣

「日と月と星」

昔研 二ノ三七五

長崎縣

長崎縣

厄難 克服

昔研 二ノ三七五

長崎縣

長崎縣

「天道さん強い綱」

昔研 二ノ三七五

長崎縣

長崎縣

〇参考

昔研 二ノ三七五

長崎縣

長崎縣

×朝鮮の例あり。

昔研 二ノ三七五

長崎縣

長崎縣

×朝鮮民譚集 五

昔研 二ノ三七五

長崎縣

長崎縣

「日と月と星」

昔研 二ノ三七五

長崎縣

長崎縣

厄難 克服

昔研 二ノ三七五

長崎縣

長崎縣

「天道さん強い綱」

昔研 二ノ三七五

長崎縣

長崎縣

〇参考

昔研 二ノ三七五

長崎縣

長崎縣

×朝鮮の例あり。

昔研 二ノ三七五

長崎縣

長崎縣

×朝鮮民譚集 五

昔研 二ノ三七五

長崎縣

長崎縣

「日と月と星」

昔研 二ノ三七五

長崎縣

長崎縣

厄難 克服

昔研 二ノ三七五

長崎縣

長崎縣

どなると、火の神火の神と答へた。山姥は、もうこんな晩は寝た方がいゝ。石の唐櫃かまどにしようか、木の唐櫃かまどにしようかと獨言を云ひつゝ、石はつめたいから木のからとにしようと、中に入つて薪を立て、寝てしまった。牛方はそれを見て梁から降りて来て、火を焚き湯をぐらぐらと沸かしておいて、錘で木の唐櫃に穴をあけた。中の山姥はその音をきき乍ら「明日は天氣と見えてきりきり虫がなくよ」と云つて居たが、そのうち熱い湯を穴からつぎ込まれて、とうとう牛方に錘を打たれた。

——越後南蒲原郡——

後半が仇討ちする話と、天道さん金の綱の様に木に登つて逃れる話と二つある。

青森縣 三戸郡

民俗學 五

八戸市

昔研 二ノ四二九

三話あり。その一は「鬼婆と鷲助サアア」

牛の食はれる條が落ちてゐる。

その二の「山姥」は一の完形かと思はれる。

その三は「牛方と山蜘蛛」

珍らしいのは路傍の堂の中で子供が泣いてゐるといふ條で、それを牛にのせてやると大きな鬼婆（又は山蜘蛛）となる。

岩手縣 上閉伊郡

遠野物語 九九

發端瓜子姫と同じ。山母に追はれた娘、一つ家の若い女に匿くまはれ、その女と二人で山母を殺して逃げる。

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚 二一五

「牛方と魚」

傳説の形となつてゐる。

岩手縣

紫波郡昔話集 八七

「牛方と山姥」

野宿の牛方、山姥に追はれ百姓の家に入つて妻女にかくまはれるが、その妻女が牛方を殺すといふ珍らしい形である。

湯をかけて殺すこと、他の話の山姥を殺すのと同じで、誤りか話かへかであらう。

岩手縣

九戸郡誌

少し變つた型。山姥と賭をした牛方が負けて追はれ、娘の居る一軒家にかくれた。娘は騙して山姥を殺す。山姥に食はれた牛七匹の毛の數と米の數とが皆錢となり金持の夫婦となる。

岩手縣 岩手郡蒲澤村

聽耳草紙 一〇〇

「山男と牛方」

牛三疋を食はれ船廻きに助けられる。山姥は木に登らうとして落ちて死ぬ。

金の綱と似てゐる。

岩手縣 岩手郡永岡村

岩手郡昔話集

聽耳草紙のものとは同じ。

秋田縣 仙北郡

角館民俗資料 二四六

牛方山姥の家にかくれる。

山形縣 東田川郡

昔研 二ノ三一八

「鯖賣りの話」

山姥の所に鯖賣りが来る。但し牛方では無い。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 五六・一四八

「馬方と鬼婆」

新潟縣 南蒲原郡

越後三條南郷談 一一九

「鬼婆と魚賣」

鯖賣り。甘酒も餅もあり。〔例出〕

新潟縣

南蒲原郡昔話集 一三九

「鯖賣りと山姥」

富山縣 上新川郡

昔研 二ノ二七〇

「魚賣りと鬼婆」

牛はなく鹽鱒を賣る男。

石川縣

江沼郡昔話集 四四

「狐と馬方」

山姥の代りに狐で、やはり馬の足をよこせ、などと云ふ。爺は逃

厄難克服

げて歸る。

これは尻切れである。

栃木縣 芳賀郡

茂木昔話集 四六・五〇

二話あり。その一は「魚屋と山姥」

終りが天道さん金ん綱に近い。

その二は「山姥を退治した留さん」

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 一四七

「馬方と鬼」

鬼の家に行き仇討をする。鬼を燒殺して釜をあけてみると、松脂となつてゐた。それを賣つて長者になつたといふ。

後の一段は新話であらうか。

長野縣 北安曇郡

小谷口碑集 一九

「三十郎の話」

三十郎は牛方。干鰯をつけてゐて峠で山姥にあふ。唐櫃に熱湯を

流し込んで殺すと大きな山蜘蛛であつた。

岐阜縣 吉城郡

ひだびと 五ノ三

「牛方山姥」

岡山縣 邑久郡

岡山文化資料 三ノ四

「馬子と鬼婆」

鹽をくれと云つて皆食ふ。馬を食ふ事は無し。馬子は山姥の家に

ついで行つて風呂で殺す。

廣島縣 豊田郡

「長太と鬼」

安佐郡

「長吉と鬼婆」

馬をつれて鹽を買ひに行つた歸途危難にあふ。山婆を退治し死體を唐黍畑へうめたので、根が赤くなつたといふ。

廣島縣 山縣郡

「馬子と鬼婆」

鬼婆を焼殺してみたら狸であつた。カチ／＼鳥の話も伴ふ。

廣島縣

「鯖才次郎」

山姥を自分の家に誘ひ、釜に入れて焼殺す。天井から餅をさす。類話 一〇七 があり。

鳥取市

「やまんばと馬子」

鳥取縣 八頭郡

山口縣 周防大島

香川縣

徳島縣

安藝國昔話集 九五

同書 九二

昔研 一ノ四一七

藝備「昔話の研究」八二

因伯民談 一ノ五ノ二五八

因伯昔話 七五

口承文學 一一ノ一八

小豆島民俗誌

阿波祖谷山昔話集 四五

「與二郎とお婆」

筑前

「山姥と馬吉」

日本童話集のおなじ。

大分縣

「馬子と山男」

馬子が干鯖をとられ逃げ歸り、女房と相談して黍團子をつくり、栗・蟹・針・牛・蜂・石臼などの助勢を得て仇討をする。

熊本縣 球磨郡上村

「鹽の千兵衛どん」

猿に鹽をなめられ、蟹・白などで仇討に行く。

熊本縣 玉名郡

「イツチヨメ」

山姥は一ツ目なりと。

長崎縣 杵島郡

「馬方と山姥」

中間と結末はなく、馬子は食殘しの馬の頭を引きずつて歸る。

長崎縣

「馬方山姥」

やゝこわれてゐる。

國民童話 三一八

豊後民話集 二四

第二昔話號 三四

口承文學 一一ノ一二

島原半島昔話集 六二

長崎縣

「鬼の話」 結末は不完全なり。

鹿兒島縣

「山姥を煮殺す」

喜界島

「鬼の話」

男の家に鬼がやつて来る。豚を食ひ、馬を食ひ、その次に男を食ふといふ。男は池の端の木に登り、天より下る金の綱によつて天に登り、鬼は落ちて死ぬ。

沖繩縣 徳之島

「鬼の話」

旅傳 一ノ八

○参考

×嬉遊笑覽 九 「小はだの小平次」もこの話。

×常陸久慈郡王瀬村、明神坂の傳説といへども、鬼婆といふから

昔話に近い。

馬に鱈節をつけて通る三助、山姥にあひ逃げて家に行き、餅を食ひ、後に石をやいて残しておく、又鬼が長持の中に癡たのを殺す。

食はず女房

昔獨身の男が山に木を伐りに行き仲間の者と物を食はぬ女房が欲しいと話し合つた。すると四五日たつて俺は物を食はないから女房にして呉れと云つて男の家へ尋ねて来た女がある。女房にするとなるほど少しも物を食はないが、女が来てから米も味噌も無くなるので男は不思議に思つて、或日町へ行くふりをして家を出ると、女は剛へ行つたのでそのひまに厩の梁へ登つて隠れてゐると、女房は米を出して一斗炊きの鍋に入れて炊き、次に味噌汁を炊いた。そして握飯を拵へて庭の上にずらりと並べ、味噌汁は提に入れてさまし、髪を解くと頭の頂上に大きな口があいてゐた。そこへ握飯を投込み、お汁を注ぎ込みしてあとは元通りに髪を結つてそこを片づけてゐる間に、男はそつと梁から下りて、今歸つた様な顔をして家に這入つた。

次の朝女房に暇を出すと云ふと、それでは何か呉れといふのでそこにある桶を持つて行けと云つたら、女は桶の中に虫が居るから取つて呉れとだまして男をその桶の中に突入れ、それをちよつと擔いでどん／＼と山奥の方へ走つて行つた。「よい看を持つて来たかからみんな来い」と云ふと、山の木の中であちこちから返事

をするので男は生きた心持も無かつた。さうしてゐる中に桶の側に木の枝が當つたのでそれにつかまつて桶を抜け出ると一生懸命山を走り下つて逃げた。

女は皆の居る所に行つて桶をおろして見ると男が居ないので、さては逃げられたと思つてどん／＼追かけて来た。男は追つかれさうになつたので傍の蓬と菖蒲の生えて居る中に隠れると、山姥は追付いてその蓬と菖蒲の中を見て、この中に手を入れると手が腐るからくやしけれども仕方がない。と云つて山へ引返して行つた。男は危い所を助かつて、その蓬と菖蒲を頭にかぶつたり腰にさしたりして家に歸ると屋根だの戸口だのにさして置いたら山姥はとう／＼來なかつた。

青森縣 喜良

岩手縣紫波郡——
津輕昔話集 六七

「千人の頭に立てられた話」

蛇が化けて女房となる。一子あり、一枚のうろこを子の爲に残して行く。

蛇女房の型。

岩手縣 岩手郡磐石

第一昔話號 三四

「食はず女房」

節供禮に餅をつくり女房の里に行く。女房は鬼、逃れ歸つて菖蒲

と蓬の中で難をまぬかれる。

岩手縣

九戸郡誌 四六四

「物食はぬ女房」

紫波郡昔話集 九四

これが最も普通の形。「例出」

「鬼婆」

贈澤郡昔話集

秋田縣 仙北郡

角館民俗資料 一九三

「桶屋と山姥」

昔研 一ノ五〇七

「飯食はぬ女房」

火箸で燒殺したら赤鬼だつた。

「糞が綾錦」

聽耳草紙 三八三

瓜子姫の話のつゞきに、山母が飯を炊かせて頭の口から投げ込む條がある。

秋田縣 平鹿郡

昔研 二ノ三六四

「五月の鬼」

二草の由來譚はあるが桶の條は無い。

山形縣 東田川郡

昔研 二ノ三一八

「喰はず女房」

主人公は米屋。早桶を拵へて女を入れて棄てる。棄てても戻る。菖蒲と蓬との由來譚に付く。

山形縣

昔研 二ノ九二

「喰はず女房」

女房は鬼。五月五日の菖蒲につゞくは型の如し。

宮城縣

登米郡誌 下ノ八六三

福島縣 石城郡

磐城昔話集 五七・一四九

新潟縣

南蒲原郡昔話集 一四一

「飯食はぬ女房」

石川縣 能美郡

昔研 二ノ三七三

「もの食はぬ嫁」

五合ほどの米を一斗鍋に一杯にする云々の點は、まだ天人女房の形を存す。

石川縣

江沼郡昔話集 六八

「ものを食はぬ嫁」

福井縣 坂井郡

昔研 一ノ三〇〇

二話がある。一つは蜘蛛、一つは山姥。

長野縣

小縣郡民譚集 二〇一

二話あり。二階に隠れる等とあるは牛方山姥に似てゐる。

厄難克服

長野縣 下伊那郡

昔ばなし 九〇・一三五

その一「蛇の嫁様の話」

飯の話、喰はずといふ事は無し。家の中に水がいつぱいになつて蛇が泳いでをつたといふ。

その二「菖蒲と蓬」

長野縣 南安曇郡年中行事篇 一五三

菖蒲、蓬の由來話が幾つかある。昔話の形としてでなく傳説として語られて居るか。

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 六六

「休んだら軽いなあ」

頭の口の事は無く、ただ二草の由來を云ふ。

栃木縣 芳賀郡

茂木昔話集 四七

「口をきかない嫁」

五月節供の二草の由來の外に、四月八日に紅葉と藤とをさす由來を語る。

静岡縣 駿東郡

静岡縣傳説昔話集 四五六

静岡縣 富士郡

同書 四五七

「蜘蛛嫁」

愛知縣 北設樂郡

昔研 一ノ五六

「夜の蜘蛛」

女房でなく、作男として雇はれた男。

岐阜縣 吉城郡上寶村

ひたびと 五ノ五

四話あり。第四の話は蛙女房。蛙に石を投げつけると坊主の頭に當るといふ條がある。

和歌山縣 伊都郡

口承文學 一〇ノ二〇

大體型通りだが、隣の爺が秘密を發くといふ條あり。

有田郡

有田郡童話集 二四ウ

奈良縣

なら 十八號

兵庫縣 城崎郡三椒村三原

昔研 二ノ四一九

「食はぬ嫁」

菖蒲・蓬の二草を語る代りに、榎の枝に掴まつてカゴコシキより抜け出し、讓葉の中にかくれたとあり、正月六日の儀式と結びつけてゐる。

儀式の説明に昔話を結びつけてゐるか。

兵庫縣 川邊郡

北斗

島根縣

昔話採集手帖 六六

「山姥」

隠岐昔話集 一二

口無しと反對に、大食なので歸すといふ。棄てられて蜘蛛となつ

て来て、焼殺すと山姥になつた、と。

岡山縣 上道郡

岡山文化資料 三ノ一

頭の口のことを言はず。留守中に多くの蜘蛛が集つて麥飯を炊いて食ふ。

同縣 後月郡

昔研 一ノ三六三

「夜蜘蛛は殺す話」

「蜘蛛はけようてエ」

御津郡昔話集 一〇七

これには眞中の私かに握飯を食ふ條無し。山に男をつれて行つてクモになり糸で巻いてしまふ話。

廣島縣

安藝國昔話集 一二五

明輩の入智慧で女房の秘密を知り。女房怒つて先づ明輩を食ひ、夫をさらつて山へ逃げる。

廣島縣 安佐郡

同書 一二八

蛇女房で後蜘蛛となつて来る。

高田郡

同書 一三〇

蛇女房。寺に行つて離縁を頼む。

山口縣 周防大島

口承文學 一一ノ一五

「しよることなしのゆづの木」といふ謎の起り。夜の蜘蛛の結末断片である。

となるが菖蒲の條はない。

徳島縣

郷土研究 二ノ三七八

香川縣

阿波祖谷山昔話集 六七

女の頭に釜のやうな大きな穴があるので、それを見た男は目をまはして死ぬ。

小豆島民俗誌

愛媛縣 三豊郡志々島

昔研 二ノ五六六

福岡縣 早良郡

筑前傳説集 三三

熊本縣 球磨郡

昔研 一ノ三七四

齒朶とゆづり葉を正月行事に用ゐる理由。

第二昔話號 三五

熊本縣 玉名郡

天草島民俗誌 五七

「玉蜀黍の根の赤いわけ」

第一昔話號 八三

熊本縣

第一昔話號 八三

後段「天道さん金の綱」と結合してゐる。

長崎縣 壹岐

第一昔話號 八三

「山の神まつり」の條に一話あり。

長崎縣 壹岐

第一昔話號 八三

「五月節供の萱と蓬」

第一昔話號 八三

女房は蛇と明らかに云ふ。

長崎縣 北高來郡諫早

口承文學 八ノ二

長崎縣

島原民話集 八四以下

厄 難 克 服

島原民話集 八四以下

後の二話は瘦せてゐる。

鹿兒島縣

甌島昔話集 一四一

「蜘蛛女房」

島 一ノ四七九

鹿兒島縣 喜界島

島 一ノ四七九

「猫の妻」

島 一ノ四七九

夜中に外に出て鼠を取つて食ふ。ツキ草、ミハ草の二種の汁を耳につぎ込んで退治する。

鹿兒島縣

島 一ノ四二四

「鬼と菖蒲」

島 一ノ四二四

鬼が家中の人を食ひに来たのでみんなで菖蒲山に逃げた。それは五月五日。

鹿兒島縣 奄美大島

昔研 二ノ三三四

沖繩縣

南島説話 八八

「鬼に追はれて菖蒲へかくれた話」

沖繩縣

南島説話 八八

主人公は或寺の慾深和尚、飯を食はない嫁をほしいと云つて漸く口の無い女を見付けた。しかし毎朝御飯を澤山炊くの不思議に思つて庭の桶の中で見て居ると、鬢を解いて中ずりの所にある

口無し女房 (又食はず女房とも)

口無し女房 (又食はず女房とも)

口無し女房 (又食はず女房とも)

口無し女房 (又食はず女房とも)

口無し女房 (又食はず女房とも)

口無し女房 (又食はず女房とも)

口無し女房 (又食はず女房とも)

口無し女房 (又食はず女房とも)

口無し女房 (又食はず女房とも)

口無し女房 (又食はず女房とも)

口無し女房 (又食はず女房とも)

口無し女房 (又食はず女房とも)

口無し女房 (又食はず女房とも)

口無し女房 (又食はず女房とも)

口無し女房 (又食はず女房とも)

大きな口から食つてゐる。和尚は驚いて聲を立てると、桶をかついてどん／＼走り出した。桶を路ばたに置いたら轉んで和尚は大きな菅蒲がいつばい生えた中に落ち、その爲に女の方は這入れなかつた。それで五月五日には軒に菅蒲をさし、湯にも入れて浴みするのである。

—宮城縣登米郡—

「口無し」といふ例あり。

青森縣 八戸

二例あり。

昔研 二ノ四三〇

共に菅蒲で助けられる。何故か第二の話は主人公が卵賣りとなつてゐる。

宮城縣 登米郡〔例出〕

郷土の傳承 三

傳説化してゐる。

伊具郡誌

妹 は 鬼

夫婦二人に兄と妹がある。妹は毎夜兄の寢てしまふのを見とゞけて出て行く。不思議に思つて兄がついて行くと村はづれまで行つて鬼の姿になつて馬を奪つて食うた。毎夜さういふ事が續くの

岐阜縣

—鹿兒島縣甑島—
續飛騨探訪日誌 一四一

福岡縣

長崎縣 北高來郡

同縣

「蛇になつた妹」

「蛇姫の話」

鹿兒島縣 奄美大島

「鬼の姉」

虎の報恩を件ふ。

〃 喜界島

「鬼の母」

鹿兒島縣

「鬼の妹」〔例出〕

〃 沖永良部島

「鬼の姉」

〇参考

朝鮮民譚集 一一〇 「狐妹と三兄弟」

千 疋 狼

甲州の或商人が駿河へ旅をして歸り途、甲斐と駿河との境、裾

厄 難 克 服

で兩親に話すと、兩親は信用しないのみか却つて兄を追出した。兄は物貰ひになつて歩いたが縁あつて或家の養子となつて五年の月日がすぎた。五年目に郷里へ歸つて見たくなり、暇を買つて妻には鏡を渡し「この鏡が曇つた時は自分の命が有るか無いかの時だから、其時は庭の雌鷹雄鷹を放して呉れ」と云つて出かけた。自分の村に近づいて山の上から見ると家が一つも無くなつて妹が一人怖ろしい姿をして仰向けに寢てゐた。兄は咳拂ひしたら妹は元の姿になり、兄を見つけて何年も會はない中に兩親は悪い流行病で死んだと語り「この太鼓を心慰みに叩いてゐて下さい」と云つて米磨ぎに行つた。するとその後へ父母の化身の鼠が出て来て代つて太鼓を叩いて兄を遁がした。妹は太鼓の音が違つたので来て見ると鼠が叩いてゐる。怒つて鼠を追うたりしてゐる間に、兄は遁げのびたが、妹は又その後を追ひ、兄は今にも掴まりさうになつた。一方、家の妻は鏡を見て夫の大事を知り、雄雌の鷹を放してやる。兄は松の木に登り鬼がその根を掘つて、木は危く倒れようとする所へ二匹の鷹がとんで来て鬼の眼を蹴つぶした。しかし鷹は鬼の息がかゝつて死んでしまつた。兄は鬼を退治し、鷹の塚をたて、妻とその父母に迎へられ無事に家へ戻つた。

野の廣い原の中で日が暮れてしまつた。その邊りは一軒も人家がない。恰度秋の末であつたのでそここゝに積んであつた枯草の堆の中に一夜を明かすこととした。夜中になると澤山の山犬共が人間の臭ひを嗅ぎつけて堆の周りに集り嗅いだり唸つたりするので慌て、逃げ出し、近くの木に登つた。山犬共は追かけて来たが登ることが出来ない。さうかうしてゐる中に、山犬共は相談して孫太郎婆を呼んで来いと云ひ、二三匹どこへかとんで行き、あとの

は残つて商人の番をして居た。商人が孫太郎婆とは何の事かと考へてゐると、連れて来たのは年取つた虎猫であつた。山犬どもは待ち兼ねた様に、どうしたらよからうと相談をかける、暫く考へて居た古猫は、犬梯いぬざしをかけたらよからうと云ふ。先づ一匹がしやがみ、その上へ／＼と山犬が登つて商人のすぐ足許まで届く様になつた。商人も困つてもつと上の方へ登らうとしたが登れさうにもなく、犬梯子はどん／＼高くなつて来る。困りはて、腰の脇差を抜くと何か分らぬ頭の上の巢を力一ぱい突いて見た。するとそれは熊の糞で、眠つて居た熊はびつくりした拍子に地べたに轉がり落ちて大あわてにあわて、尻け出した。それを見た山犬共はそれ落ちたぞとばかりあわて、犬梯子を崩して後を追かけたが、それが熊だと判ると、がっかりして、それではまだ人間は木の上に居る管と木の下に戻つて来た。がその頃はもう夜が明けはじめ

たので孫太郎婆をはじめ山犬共はもう夜明けだから仕方が無いと云つて皆どこかへ行つてしまつた。

商人は漸く恐る／＼木より下りて逃げ歸つた。

——山梨縣西八代郡——

新潟縣 南蒲原郡

南蒲原郡昔話集 一三五

「彌三郎婆さん」

福井縣 阪井郡

昔研 一ノ三〇

「マンの婆」

二話あり。但し犬梯子の條は無し。

山梨縣 西八代郡

申斐昔話集 二九六

「孫太郎婆」〔例出〕

〃

續申斐昔話集 七一

「太郎婆」

是は狸で、狼ではない。狸が肩梯子をする。

長野縣 下伊那郡

昔ばなし 一四

「婆さんに化けた山猫の話」

發端牛方山姥に似てゐる。

兵庫縣 城崎郡

昔研 二ノ四一九

「狼の恩返し」

狼報恩の條參照

鳥取縣 日野郡

因伯童話 九五

「山伏」

五郎太婆といふ狼を呼んで来い、といふ。結末は他と異り村人が

油斷せぬ様になつたといふ。

鳥取縣 八頭郡若櫻町

因伯民談 一ノ一八七

「五郎太婆」

〃 氣高郡豊見村

因伯民談 一ノ一八八

「かねの尾のがあだい婆」

題名の様な名の狼。

鳥根縣 松江市

高木敏雄氏傳説集 一四九

「小池婆」

同縣

隱岐昔話集 二一

「山猫と商人」

庄屋婆といふのは大きな白猫。袖無しを着て白手拭を被つてゐたといふ。

この鳥、狼は無いか。

山口縣 周防大島

口承文學 一ノ二五

「狼に食はれる話」

これには鏡を投げたら逆になつたといふ話がある。

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 二二二

香川縣 三里郡志々島

昔研 二ノ五七二

「のねのかじの婆」

○参考

×山梨縣北都留郡上野原村字西原にも大梯といふ名木がある。

×越後では「オホインツナギ」ともいふ。山村の畏怖ではあるが

實は見た者が無い。

×朝鮮民譚集 一九六 巫女虎。前半はこの話。

猫と茶釜の蓋

或所に狩人があつた。山立に行く朝鐵砲の彈丸を數へてゐるのを、飼猫の三毛猫が炬傍に眠つたふりをして見て居た。狩人は何の氣なしにそのまゝ山に入つた。

山へ行くと見た事も聞いた事も無い恐しい怪物に出會した。それは一つ目の化物であつた。狩人がいくら撃つても／＼平氣であつた。そのうち持つて来ただけの彈丸が盡きてしまふと、その怪物は忽ち大猫になつて、狩人に飛かかつて来た。狩人は秘法の秘丸で難無く撃ちとめ、それをしらべて見ると、傍に一つの銅の釜の蓋が落ちて居た。猫はそれを口にくわへて彈丸を防いだもの

と判つた。

然しその猫はどうも家の飼猫らしいので蓋を持歸つて見ると、案の定家の釜の蓋は無くなり、猫も居なくなつてゐた。

岩手縣 上閉伊郡

——岩手縣上閉伊郡——

「怪猫の話」その二

聽耳草紙 三四四

〔例出〕

福島縣 石城郡

磐城昔話集 一七三

石川縣

鹿島郡誌 九四九

どうの川の「チツキン被リ」といふ怪物。詳しい話が出て居らぬ。

同縣 能美郡

昔研 二ノ二七四

「谷峠の猫又」

福井市

昔研 二ノ一四〇

「化け猫退治」

夜木の上に居て人を食ふ猫。侍が矢を猫が見たより多く用意して退治する。何で防いだかは明らかで無い。

これは破片。

長野縣 下伊那郡

昔ばなし 四九

「婆さんに化けた山猫の話」

喜界島の昔話に近い。

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 二九九

「猫と狩人」

愛知縣 南設樂郡

猪・鹿・狸 四二

「昔の狩人」の項に一話あり。猫が茶釜の蓋の上でまるめてゐる弾丸をかぞへ、その蓋を持つて山に入る。

福岡縣 築上郡

豊前民話集

「鐘を被つた狸」

豊後

山岳 一九ノ三

「やかん太郎」

九重山黒岳、老猿が釣鐘をかぶつて居た話。

大分縣 北海部郡

昔研 一ノ一七九

「しようべえ婆」

狩人が朝、ネ、ヒに出て猫の角力を見る。庄兵エ婆を討つ。血を吐いたはつて村に來り、婆の家に見舞に行き、夜具の上から鐵砲で討つて退治する。

鹿児島縣 喜界島

島 二ノ二六

「黒鏡の彈」

伊那昔ばなし所載のものに近い。

「猪討と飼猫」

獵師を迎へに妻が山奥まで來たので不審に思つて彈を放つと逃げ

つけて家にかへる事が出來た。

秋田縣 鹿角郡

秋田縣鹿角郡
第二昔話號 二一

「猫又」〔例出〕

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 一七〇

「猫又屋敷」

石川縣 能美郡白峯村

昔研 二ノ二七三

「仙太郎」

仙太郎といふ男、昔の飼猫の呉れたふくべに身をかくし猫又の難を逃れる。

山口縣 周防大島

第二昔話號 一九

「猫山」

猫山に去つた猫の報恩話。愛された女中には恩返しをし、いぢめられた奥さんは食ひ殺す。

舌切雀と近く、隣の爺型を伴ふ。これが元の話か。

阿蘇

この猫岳の話は冒險譚。寶物を買つて歸る段も、亦第二の試みも無し。

た。血を傳つて來るとそれは家の飼猫で、臺所の火の神の所で死んで居た。彈を數ふことは云はぬ。

猫 山(猫又)

或人が尾去澤から山越して、毛馬内に行かうと思つて新田に出たが、迷つて山の中に入ってしまった。向ふに明るい大きな家が見えたので、泊めて貰ひに行つた。臺所に大勢の女や子供が居て、泊めて下さいと頼むと常居に通され、やがて後の襖が開いて年寄つた婆様が出て來た。そして挨拶して云ふには「私は貴方の祖父様に永年育てられた三毛猫ですが、此處は猫又と云つて村の餘り猫の集る所で、いまみんな貴方の夜具をとりに行つたが、此處に居ると食はれるから早く逃げて下さい。この床の間の隅に穴があつて、それをくぐると縁に出る。門を出ると川があるが、その川を渡りさえすればもう猫は行けないから安心です。早くして下さい」と云つた。男はなるほど祖父の時代に、年寄つた三毛猫が居なくなつた事があつたが此猫だつたかと思つた。云はれた通りに屋敷の外に出て川を渡りかけたら、猫どもが後から大勢でがやがやと追かけて來たので、夢中で川を渡つて向岸に着いた。夜が明けてあたりを見ると、思ひがけない山の中だつた。やつと道を見

猫 岳・猫 島

ある家に一匹の猫が居て下女はその猫を可愛がつて居たが、奥さんはいぢめた。ある時その猫が急に居なくなつたので下女は悲しがつてみると、六部が來て「九洲のいなばの山の猫山に居るかあひに行け」と云ふ。下女が尋ねて行くと、山の中で暮れてしまつたので、立派な家に案内を乞うて泊めて貰ふことにした。

そこは猫の家で、夜になつたら可愛がつた猫が出て來た。女の姿をして顔だけは猫だつた。そして紙包を渡して、こゝは猫の來る所だから早く歸るがよいと云つた。翌朝教へられた通り、そのあたり一ぱいの猫の中を、買つた紙包を振り乍ら無事に通りすぎて家に歸つて來た。紙の中には犬の繪がかいてあつて、本物の十兩の小判をくわえてゐた。奥さんは美しがつて尋ねて行つたが猫を愛してゐなかつたので、食ひ殺されてしまつた。

山口縣周防大島

秋田縣 鹿角郡宮川村

第二昔話號 二一

「猫又」

石川縣 能美郡白峯村

昔研 二ノ二七二

「仙太郎」

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 一七〇

「猫の恩返し」

山口縣 周防大島

第二昔話號 一九

「猫山の話」〔例出〕

福岡縣

高木敏雄氏傳説集 二二二

筑前鞍手郡根子岳の傳説。

鹿児島縣

喜界島昔話集 八二

「猫の恩返し」

青森縣

鹿兒島縣喜界島

津輕昔話集 六

寶化物

「化物と踊った話」

岩手縣

紫波郡昔話集 四五

「伊勢詣り子」

伊勢詣りのみちで泊った空家で踊る化物。それは黄金と錢であつた。

怖れぬ勇士に秘密の幸福。

福島縣

磐城昔話集 一五四

新潟縣

佐渡島昔話集 一三〇

「寶化物」

同書 一三一

同書 一三一

「金の霊」

出雲の町の奥坊といふ修業者を尋ねて嫁ぎ来た娘、夫婦で化物屋敷を借りて金の魂にあふ話。

炭焼長者の話とつゞくものがある。

山梨縣 西八代郡

續甲斐昔話集 一六四

「茶の木の下の茶ッ登」 以下三話がある。

岡山縣

御津郡昔話集 八四

「錢の化物の話」

鳥根縣 邑智郡

昔研 二ノ四一五・五六三

前者は梅村長者の由來といふ物語の中の一節に、荒屋敷に泊り化物にあふ。終に長者の娘の幽霊が出て法事を頼む。

全體の語り方が何か職業的な話し方である。

徳島縣 三好郡

昔研 二ノ四二五

「三井のおこり」といふ話。中間に脱落あり。

大分縣 北海部郡

昔研 一ノ一八三

「化物話二つ」の中その二

鹿児島縣

喜界島昔話集 一三六

〔例出〕

○参考

秋田郡邑魚譚 一五四

土藏や床下に埋つてゐる財寶が、人に知

厄難 克服

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 二〇四

一八九

「林檎の恠」

秋田縣 仙北郡

昔研 一ノ四六四

「山梨の化物」

これも産物の本性を見あらはすといふ話の變化。

岩手縣

紫波郡昔話 六六

寺の小僧に糞を食へ、といふきたない化物の大入道、後をつけて見ると山梨の大樹で、年々八知れず熟れて落ちた實が小山のやうになつて居たといふ話。

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚 二七

ごろつきの旅人、大家の空家に泊る。菌自ら身の上話をする。火

氣と鹽氣が嫌ひと。

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 二〇四

一八九

「霊の化物」
「おれは人間の化物だ」といふユーモアがある。何が一番嫌ひだの問答。

長崎縣

(舊)壹岐島昔話集 五五

「人食ひなば」

退治するのは三人兄弟の末弟で、味噌汁をもつて行つてかけるといふ。

山寺の恠

寶化物の様な話だが、黄金發見を伴はぬ。

昔或村に旅僧が来て宿を乞うた。すると此村では一人旅は泊めてはならない事だから、氣の毒だがあの山際あきざらの明寺に行つて泊つて呉れと云はれた。行くと村人が五六人火を焚いて居たが、飯も酒もあるからと其人達は歸つてしまつた。夜更け本堂の方で物音がするので、そこにある鍋を被つてだまつて居たら、目が三つ齒の二枚ある大入道が庫裡から出て来て鍋を被つた旅僧の頭をパチンと弾いて堅い頭だと謂つた。すると旅僧は今度は俺の番だと云つて、木割でその入道の頭をゴチャリと打割り外へ投出して置いた。さういふ化物が三度出て来たが皆退治して外へ投げて置く

と翌朝村の人達は、ゆうべの旅僧はきつと化物に食はれたらうと揃つて寺へ来てみると、旅僧は無事に火に當つてゐた。昨夜は何事もなかつたかと聞くので話をし、化物は外に投出してあるから朝日にかざして見れば正體がわかるといふ。みると大入道が三人死んで居る。朝日にかざしてみたらそれは古下駄の化けたものであつた。村人は旅僧に向つて此寺は幾度住職が入つてもみな取つて食はれたので明寺になつて居たが、今度は貴僧が住職となつては呉れまいかと頼まれ、旅僧はそれを引受けた。

— 岩手縣紫波郡 —

惟談授福を伴ふ例は最も古いのであらう。

古いものは皆化けるといふ考へ。

岩手縣 紫波郡

紫波郡昔話集 一四

「化物寺」

〔例出〕

秋田縣 仙北郡

昔研 一ノ五〇四

「古みに風呂敷・古太鼓」

奥州の窟取話と似てゐる。

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 二〇一

「臼と杵」

寺の臼と杵が化け、怖れぬものに金の在處を教へる。

長野縣

小縣郡民譚集 二六六

「金銀逆鏡」

長野縣

小縣郡民譚集 二六九

「鯉・雞・狐」

赤・ねず色・茶色の頭巾をかぶつた化物の話。翌朝みな取つて食ふ。

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 九七

「埋けた瓶」

長野縣 北佐久郡

北佐久口碑傳説集 二一九

「梅園坊の化物屋敷」

布施村上の山の御堂の化物。雲水僧の名は「梅園坊」

長野縣 下伊那郡

昔ばなし 二八

「ソクヘイタン」

化物は東原の馬頭・西竹林のサイショウ鶏・南海の大魚・北池のガヤ。

北佐久郡

ひだびと 五ノ一八四

「寶化物」

岐阜縣 吉城郡上寶村

ひだびと 五ノ一八四

「寶化物」

物は箕と木魚と太鼓の古いもの。

化物とは題してゐるが寶ではない。

厄難克服

一ツ屋の恠

一ツ家に泊り其處で死人をあづけられ、恠を見る。その實は何でも無かつたといふ話が多い。

これも亦一つの型と云ふべきか。

旅人が夜更けて或知人の家に辿りついた。すると主人は「恰度い、所へ来て呉れた。今夕死人があつたが留守の者が無くどうしようかと思つて居た所だつた。暫くの間頼む」と云つて主人が出て行つた。迷惑とは思つたが仕方なく炉端に煙草を吸うて居ると、老女の死人がむくむくと起上る。驚いたが心をしづめてあたりを見廻すと、流し元の水口の穴から狐の様なものが面をさし入れて頻に死人の方を見詰てゐた。さてはと、窃かに家を出て背戸へ廻つてみると果して狐で、流し元の穴へ首を入れ後足をつき立てゝ居た。旅人は有合せの棒で之を打殺してしまつた。

— 岩手縣下閉伊郡豊間根村 —

岩手縣 下閉伊郡豊間根村

遠野物語 八八

〔例出〕

山形縣 東田川郡

昔研 一ノ四六六

事實譚として語られて居る。真相を後に知るは他とおなじ。

「はやおげの中の小判」

主人公は茸取りのヤロ。死人を入れた早桶を預り、更にそれを背負うて来て呉れと頼まれる。以下「大歳の火」に近く、夜が明けてみると、桶の中に小判がいっぱい入つてゐた。

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 二八六

「一軒家」

鹿兒島縣

喜界島昔話集 一三七

「亡者と鹽買ひ」

爺と婆とは横納めしてからも合圖をし合ふ約束で婆が先に死ぬ。約束通りやつて居たが、爺がいやになつて、折柄來合はせた鹽買ひを騙して留守番させ應答させる。亡者は「お前は誰だ」と出て來たので鹽買ひは遁げ出すと、亡者もそれを追うて何處かへ行つてしまつた。

動物の援助

聽 耳

昔、心の善い一人の爺が氏神の稻荷様に祈つて赤い寶頭巾を授けられた。それを被ると鳥でも獸でもなんでも言ふことがすぐ解

るといふのである。爺は喜んでその頭巾をふところに入れて歩いて來たが、道ばたの大きな木の下に休んでゐる中、うとくと眠くなつた。すると濱の方と國中の方から鳥がとんで來て同じ木の枝に留つた。爺は頭巾を試してみたら今だと思つて、被つて見ると鳥の聲が聴えて來た。濱の鳥は、村の長者の家の土藏はたてゝから五六年にもなるが、屋根茸きの時に這上つて釘づけにされた蛇が半死半生になつて、雌蛇が食物を運んで來るのでやつと生きて居るのだが、その思ひが積つて長者どのの娘が永のわづらひをしてゐる。蛇さへ助けてやれば娘も癒るのだが、本當に人間といふものはこんな事も判らないで情ないものだ、と話して別れてとんで行つた。

爺さんは好い事を聴いた。早く長者どのの娘も蛇の命も助けてやらうと、八卦屋に化けて長者の家に行き、八卦を置くまねをして鳥から聴いた事を話して蛇をすくひ出した。すると娘も段々となほつて來たので長者は大喜びで大金を呉れ、爺はたちまち大金持になつた。氏神様のお宮も新に建て立派なお祭もした。

爺さんはまた旅に出て先の大木の下に憩んでゐると、前の二羽の鳥が來て話をする。今度は町の長者どんが大病でそのもとは、離れ座敷をたてる時に伐り倒された楠が、ちやうど軒下に雨に打たれてゐるが、根が死に切れないので苦しんでゐる。その思ひで

男が鯛を助けて龍宮に招かれ、「聽耳」を得て鳥の言葉を解するやうになり、長者の聲になる。

金の扇・銀の扇

昔、貧乏な男があつて、金持になるやうに神様に願がけをした。願明けの日白髪の老人があらはれて、金銀の扇を一本づつ男に授け、金の扇は望みの者の鼻を高く、銀のは低くすることが出来る。これを上手に使つて金持になれと云ひ聞かせられた。男は

長者の娘のお花見の時に、それを使ひ娘の鼻を三尺も高くした。醫者に見せても癒らないので長者夫婦は大變に困つて、癒してくれるものは聲とするといふ。男は按摩に化けて長者の家に呼び込まれ、銀の扇をあほいで低くし聲となつた。ある日自分の鼻をあほぎ乍ら居睡りをする、鼻は伸びて天まで届いてしまつた。すると空の雷の家の爐の中に出たものだから、雷達は氣味悪がつて火箸をつきさした。男は鼻が熱いので驚いて銀の扇で扇いだ所が鼻はちぢまるが、火箸で天に止められてゐるので、身體の方が昇つて宙にぶら下つてゐる。雷が火箸を抜いてくれるまではさうして居るだらうといふ。

旦那はわづらつてゐるのだが、桶の所へは山の友達の木が見舞にやつて來て大變なものだ、と語つてゐる。爺はそれをきいて又八卦やに化けて町の長者の家に行き、其はなれ座敷に一晚泊つた。すると方々の山の木が見まひに來ては、なぐさめて歸つて行く。翌日八卦置きのみねをしてから桶の話をして、その株を掘出させてしまつた。すると長者の病氣も日ましによくなり、又お禮として大金を呉れたので爺はもう八卦屋を止めて長者として暮した。

岩手縣上閉伊郡

青森縣 八戸

昔研 二ノ三三二

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚 八六

日本昔話集 一〇三

「聽耳頭巾」〔例出〕

岐阜縣

益田郡誌

馬瀬村中切の治郎兵衛酒屋の話。

熊本縣 鹿本郡

昔研 二ノ三七八

「くのつ」

くのつといふ鳥を龍宮から買つて來る。是を耳にあてると鳥の言葉がわかる。

鹿兒島縣 奄美大島

昔研 二ノ一四一

「聽耳」

動物の援助

山梨縣西八代郡

- 福島縣 三石城郡 磐城昔話集 四一・一三〇
- 埼玉縣 川越地方昔話集 一一四
- 「源五郎の天昇り」 甲斐昔話集 三〇
- 山梨縣 西八代郡 「權右衛門の鼻」〔例出〕
- 徳島縣 阿波祖谷山昔話集 一一五
- 鹿兒島縣 甌島昔話集 一八一

尻 鳴 籠

或所に男があつた。あんまり法螺ばかり吹くため、誰も相手にしなくなつたので改心して神様に願がけをした。満願の日御堂の前の坂を下りて来ると、鳥居の下に赤い小籠が一つ落ちてゐた。拾つて又ぶら／＼歩いて行くうち、偶然の事からその籠の片面は朱塗りで、其方で尻を撫でると大きな音で鳴り出し、もう片面の黒塗りの方で撫でれば、それが止むと云ふ事を發見して、長者の娘の尻をなでた。すると娘の尻は鳴り出して止まらない。長者は型通り醫者よ法者よと騒いだが一向癒りさうにも無いので、高札を出して、娘の病氣をなほした者は何でも望み次第といふ文句を書きつけた。法螺吹きは大勢の醫者や法者の中にまじつて、長者

の家に行つた。そして娘の尻を例の籠で撫でてなほしてやり、遂にその長者の聲となつてえらい出世をした。何もかも小籠のおかげだといふので後にそれを神様に祀つて御籠大明神とあがめた。

- 青森縣 八戸 岩手縣上閉伊郡 二話あり。昔研 二ノ三三三
- 岩手縣 膽澤郡 黄金の馬及び採集手帖の 四三
- 同縣 上閉伊郡昔話集 五一
- 「御籠大明神」〔例出〕
- 秋田縣 平鹿郡淺舞町 昔研 二ノ二二〇
- 「不思議な籠」
- 宮城縣 桃生郡北村 郷土の傳承 一ノ一八一
- 竹伐・屁ひり爺との連絡。

文 福 茶 釜

或村に厩屋の爺があつた。貧乏して居るので、仲よしの狸の所へ行つて茶釜に化けてもらった。そしてその茶釜を持つて和尚さんの所へ行き三兩で賣りつけた。和尚さんは小僧に云ひつけて茶釜を磨かせた。小僧が茶釜に砂をつけて磨くと、その茶釜が「小

前者は四人の魔術師の話のあとに續く。

狐 遊 女

僧小僧痛いでそつと磨け」といふ。小僧は驚いて和尚さんに話すと、和尚さんが今度は自分で磨いた。するとやつぱりおんなじ事を云ふ。小僧が水を入れて火にかけてと茶釜は「小僧々々熱いでそろ／＼焚け」と云つた。火が段々熱くなると茶釜から狸の頭が出、尻尾が出て遂に大きな狸になつて山の方へ逃げて行つた。和尚はそれどう／＼三兩の損をした。

——長野縣下伊那——

青森縣 八戸

昔研 二ノ三三四

岩手縣

江刺郡昔話 九五

秋田縣 平鹿郡淺舞町

旅傳 一三ノ一ノ四一

福島縣

磐城昔話集 一六九

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 九四

狐遊女の話載す。同書 一六九には猫の話あり。

昔ばなし

長野縣 下伊那郡

設樂 十五號

〔例出〕

愛知縣

設樂 十五號

ボンボロ茶釜といふ。この地方古茶釜の話多し。

阿波祖谷山昔話集 二〇・九八

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 二〇・九八

動物の援助

動物報恩

多く世間話の形を以て行はれ、又傳説ともなつてゐる。

長野縣 下伊那郡

昔ばなし 一三八

「狐の恩返し」

新潟縣 佐渡

昔研 一ノ一八六

釜・遊女・馬と三様になり報恩する。

岩手縣

上閉伊郡昔話集 九八

「狐の報恩」

折の謝罪と。

青森縣 八戸

昔研 二ノ三三四

謝罪のしるしとして遊女に賣られる。證文は文字も判も狐の足跡であつた。

狼の喉にかゝつた太い鳥の骨を取つてやり、そのお禮として一羽の雉を買つた話。

兵庫縣 城崎郡清瀨村

昔研 二ノ四一九

「狼の恩返し」狼が喉の骨を取つて買つた飛脚を、穴の中に引込んで千匹狼の難より救つた話。

廣島縣 高田郡

安藝國昔話集 一三八

「黒い犬の報恩」

犬の仔を助けると、その父親が禮をのべて犬の家に迎へられ、三人ある娘の中の一人の聲となるといふ話。

話は大分こわれてゐる。

長崎縣

五島民俗圖誌 二四〇

大晦日に、貧しい爺が蟻取りに行き狼を救ふ。その恩返しに山の酒の泉、救へられ金持となる。下の爺は泉に藁の蛇を沈めて一人占めにしようとする、それが本當の蛇になつて爺を呑む。

犬と猫と指輪 (寶物恢復)

昔ある所に川を挟んで東西に家があり、共に爺さん婆さんが住んで居た。東の正直な爺さんはある時龍宮様から「狼公の一文錢」といふのを授かつた。それから日増に身上がよくなつたので

西の惣ばり爺は羨ましがつて貸りてそのまゝ返さない。西の爺さんの家はよくなるが、東の家は貧乏になるばかりであつた。そこで東の家では飼猫に云ひつけて、取つて来て呉れといふ。猫は犬に負はれて川を渡り、西の家に行くと鼠が居るので捕へて、助けてやる代りに狼の一文錢をとつて来よと命じる。鼠は間もなくもつて来たので、猫がくわえて川を渡る時、誤つて水中へ落してしまつた。鳶・鶇・鮎等を通じてその援助により寶物を持歸る。

——島根縣邑智郡日貫村——

青森縣 三戸郡八戸

昔研 二ノ四二八

「犬と猫と指輪」

犬と猫の仲の悪くなつた説明のみ。

岩手縣 稗貫郡

昔研 一ノ四五五

「こげら玉」

山形縣 東田川郡

昔研 一ノ四六五

「白いんこ」 隣の爺話。コメクラ話と複合してゐるので無理がある。

秋田縣 仙北郡

昔研 一ノ二七八

「延命小槌の取戻し」

犬は居らず、龍宮譚と似てゐる。

新潟縣 南蒲原郡

昔研 一ノ二二一

「犬と猫と鼠」

二話あり。その一は蛇の助命と龍宮の指輪。盗まれたのを三つの動物の援助で取戻す。

その二は笠地藏の話。地藏様より財布を買ふといふ話。犬と猫の仲の悪い理由を語る。

長野縣 下伊那郡

昔ばなし 一〇三

「石の正兵衛」 發端は蛇息子。

大阪府 泉北郡

第二昔話號 一〇

犬と猫は昔は仲が好かつた。といふばかりで他はすべて缺けてゐる。

島根縣 邑智郡

昔研 二ノ四六一

「東岸の爺と西岸の爺」 「引出」

この話によく調うてゐる。

鳥取縣

國民童話 二二〇

「狼の返禮」

犬は關與してゐない。これは珍らしい例である。

因伯童話 七〇のものも之と似てゐる。

長崎縣 南高來郡

島原民話集 一五六

「犬と猫と指輪」

主人公は三年寝坊太郎。龍宮に行き指輪を得たが、愚かな女房が

動物の援助

紛失し、犬と猫と河童の援助あり。

鹿兒島縣

鹿島昔話集 一三三

○參考

×朝鮮 日本昔話集 下ノ九六

「酒のわき出る石」

寶物は酒のわき出る石。

×朝鮮 朝鮮民譚集 二四〇

「犬と猫と珠」

海邊に住む老夫、鯉を助けて龍宮に招かれ珠を買ふ。悪婆にすりかへられたのを犬・猫・鼠の助力を得て取戻す。

×朝鮮民譚集 附録四二、ルブリヤ族の例あり。

×アイヌにもこの話ありと、アイヌ民俗資料一ノ二九に引用。チ

エンバレン氏の「アイヌ民間傳承」

×昔話研究 一ノ一三 關敬吾氏「犬と猫と指輪比較資料」

舌切雀

爺さんと婆さんがあつて龍に雀を飼つて居た。或日お婆さんが團子を拵へて、扇根に乾してゐたら雀がみんな食べてしまつたので怒つて舌を切つた。爺さんが山から歸つてこの話をき、「雀々

どこへいった」と云ひながら行くと、竹を伐つてゐる人が居る。雀の行方を聞くと手傳ひをしたら教へてやると云はれ、その手傳ひをする。次に肥汲みなんか居て、又その手傳ひをする。そして雀の宿へ尋ねて行く。(以下一般のものと同じなれば略す)

——福井縣阪井郡——

福島縣 石城郡

磐城昔話集 一六九

新潟縣

佐渡昔話集 一五

犬の番、牛馬の番に道を尋ねる條あり。後段は雀を焼いて食うてから、鳥吞爺話になるのはこゝのみの混同か。

福井縣 阪井郡

昔研 一ノ二七

〔例出〕

大分縣

直入郡昔話集 二八

馬洗ひと牛洗ひに、舌切雀のお宿への道をたづねる。

熊本縣 鹿本郡

昔研 二ノ三八一

〔雀報恩〕

石川縣 熊登七尾

第二昔話號 六〇

腰折れ雀

山の中に正直な婆と慾深い婆とがあつた。正直な婆は子供に腰

を折られた雀をたすけてその恩返しに一粒の瓢の種をもらつた。

早速庭に植ゑると、忽ち大きくなつて庭一面に伸び、大きな瓢がなつた。それを食べてみると美味なので隣近所にも分けてやり、又大きいのを軒につるして干して置いた。するといつの間にか大變重くなつたので、振つてみると中から米がいつぱい出て來た。それから毎日米の飯を食べて仕合せに暮した。瓢の米は後から後から出て來るので段々金持になつた。

隣の慾深婆はそれを見て羨ましがり、腰折雀を探したが居ないのでわざと一羽の雀の腰骨を折つて、それを介抱して逃がしてやつた。するとその雀も瓢の種をもつて來たのですぐ蒔いて置くと瓢が七つ八つなつたが近所にもやらず、みな軒に吊して置いたら段々重くなるので楽しみにして、或日おろして見ようとした所が一人では持てさうにもない程重い。お米がいつぱい入つてみると大喜びであけてみると、中から蠅や蜈蚣や蟻が出て來たので慾ばり婆さんは正氣を失つて死んでしまつた。

——大分縣宇佐郡——

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 三九

〔雀の恩返し〕

島根縣 邑智郡

昔研 二ノ五六二

〔腰折雀〕

大分縣 宇佐郡

第二昔話號 五八

〔米のなる瓢〕〔例出〕

熊本縣 鹿本郡

昔研 二ノ三八一

〔雀報恩〕

宇治拾遺と全く同じ話。朝鮮にもあり。日本にも案外広く分布して居て、近世の讀書によるものとは思はれない。

ココウ次郎

昔爺と婆があつた。爺は毎日山へ薪伐りに行つて晝飯の残りを澤の蟹に與へて居た。するとその澤から酒がわき出した。爺はいつもそれを汲んで歸つた。婆は不思議に思つてその澤に行き、爺の知らぬ間に蟹を食つてしまふ。次に爺が行つた時には澤には蟹が一つも居らないので爺が心配してゐると鳥が木の上から

甲羅はたね畑

實ところは姥の前 があゝ

と囀いた。爺様がたね畑に行つてみるとある木の根に蟹の甲らがどつさりあつた。(以下忘却)

青森縣 上北郡野邊地

——青森縣八戸——
旅傳 一一ノ七〇一七

動物の援助

青森縣 八戸

昔研 二ノ三五八

〔蟹と爺〕〔例出〕

舌切雀と少し似てゐる。

秋田縣 仙北郡角館

旅傳 一一ノ七〇三四

蟹女房譚。その蟹を婆が殺し、爺が探すと鴉が「ハサミは屋根に

甲羅は畑、カロン／＼」と鳴く。

秋田縣

秋田邑魚譚 七

仙臺

聽耳草紙 二五七

〔ココウ次郎〕

ココウ次郎は蟹の名。

鹿兒島縣

甄島昔話集 一八九

〔蟹の甲羅〕

猫檀家

或山寺にひどく年をとつた和尚が居て、飼猫でこれも年とつた虎猫と共に爐ばたで居眠りばかりして過して居た。或日猫が急に口をきいて、永い間の恩返しに、此寺をもう一度繁昌させて見よう云ひ出した。それは近い中に長者の一人娘が亡くなるが、其葬式の時に自分が棺を宙に釣上げて下さずに居るから、その時に

和尚様が来て御經をあげて、その經文の中で南無トヲヤヤト謂ふ聲をかけた時に、棺をおろす事にしようと言ふのであつた。

その中長者どんの娘が病気で死んだ。一人娘の事なのでその邊りの和尚をみんな集めて立派な葬ひをしたが、彼の山寺の和尚さんだけは忘れられてゐた。すると葬ひの行列が關塔場廻りをはじめると、娘の棺は天へ釣上つて宙に懸つてしまつた。人々は騒ぎ、和尚達は一せいに秘術を盡して、御經をよんだり珠數をもんだりしたが一向利目が無い。長者どんは歎き、人々は和尚達を悪く云つた。長者どんは誰でもあの棺を降してくれた者には、一生年貢米を上げお寺も普請するし、何でも寄附すると云つたが誰も降すものは無い。誰か山寺の和尚を思ひ出して迎へに行つた。和尚さんは杖をついて靜かにやつて来て、草の上に坐りお經をよみ出したが、いゝ加減の時に南無トヲヤヤと聲をかけた。すると宙の棺がすく／＼降りて草の上に置かれた。皆聲をあげて感歎し、長者はひれ伏してお禮を云つて、朱塗の纏籠をしたてゝ寺に送り返し、約束通り寺もたてたほしていろ／＼寄進したので、寺は繁昌して門前に市が出来るほどになつた。

岩手縣上閉伊郡
青森縣 八戸
二例あり。共に傳説と化し、ある寺の由緒として語られてゐる。

淨法寺にもこの話ありと。

岩手縣

上閉伊郡昔話集 一一八

「虎猫と和尚」〔例出〕

福島縣

磐城昔話集 四二・一三一

長野縣 北佐久郡

昔研 一ノ五六四

「猫旦那の話」

山梨縣 西八代郡

續甲斐昔話集 八三

「猫寺」

徳島縣 美馬郡

昔研 二ノ二九

「瀧寺の猫」

阿波祖谷山昔話集 五七

猫 寺(猫の助力・援助)

或所に長者があつて、美しい娘があつたがふと病になつた。夜中の丑滿時が来るとワン／＼唸つて苦しむが、醫者も法者もどうすることも出来なかつた。よく氣をつけてみると、不思議なことは飼猫がいつも娘の所を離れない。追つても離れない。母親が心配してゐると、夢に猫があらはれて「私がお嬢さんのそばをはなれないのは、天井に大きなてんこが居て、お嬢さんを殺さうとし

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 二・六

「猫の恩返し」

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 三七

「猫と娘」

もう一話。猫塚鼠塚といふ類話がある。

岡山縣 苫田郡

御津郡昔話集 七七

「猫のてんこ退治」〔例出〕

御津郡

同書 七九

「猫の守護」

見るな座敷(鷲の一文錢)

或若い百姓が旅稼ぎに出て途中時にさしかかつた時日が暮れてしまつた。燈が見えるのでやつと辿りついてみると立派な家で若い美しい女が出て来て泊れと云つた。話の末に男はその家の留守番に雇はれることになつた。翌朝女は馬で出かける時、食べたいものは何でも戸棚をあげればあるから、腹が空いたら食べて下さいといひ、それから奥の間だけは決して襖を明けて下さるなと云ひ置いて出て行つた。男はたゞ其處に留守居して、戸棚をあげれば食べたいと思つた

てゐるからで、もし私が居なかつたら危いからです。之を退治するのは、私だけでは逆も駄目ですから、之から何千里先の某といふ所に居る兄弟をつれて来て下さい。さうすれば必ず退治してしまひます」と云つた。夢であつたが本當かどうか人をつかひに出してみると、何日かたつて同じやうな猫をつれて歸つたので、二匹に御馳走を食はせて置いて。どうしたらいゝか聴くと、又夢の中で猫が「何月何日の何刻、何番目の倉の中に入れてくれ」と云つたと思ふと目がさめた。その日二匹を倉の中に入れて待つてゐると、暫らく何事もなかつたがそのうち大きな音が出て来て、どたんばたんと大騒ぎになつた。再び静まり、又大きな音がしたのもうよからうと戸をあけて見たら他所の猫が出て来て、うちの猫は白銀の毛をした「てんこ」を食ひ殺して居た。間もなく二匹の猫は死んだが、娘の病氣はそれからけりりと癒つてしまつた。長者は猫の爲に二つの塚をたてゝやつた。

岩手縣 上閉伊郡
「猫寺」
七代の和尚につかへた猫。猫座大明神の由來話。

同縣

老嫗夜譚 一二五

「伊勢詣り猫」

紫波郡昔話集 五三

動物の援助

ものが何でもあるので、正直に一年間つとめ上げた。男は家の方も心配だからと云つて暇を乞ふと、お禮に白木綿一反と錢を包んだ紙包一個を呉れた。歸つて紙包を明けてみると妙な一文錢が一枚入つて居るきりなので、不思議に思つて庄屋に見せると、之は鴛の一文錢といふ寶物だと云つて千兩で買つて呉れたので、男は急に大金持になつた。その話を聞いて隣の親父が峠の一軒家をたづねて行き留守番に雇はれることになつた。開けるなと云はれた部屋を開けて見たけれども、何も無い空な部屋であつた。女は歸つて来ていつもの様に先づ奥の部屋に入つたが、がっかりして戻つて来て「お前さんがあの部屋をあけたばかりに、私が長い間山を廻つて讀んだほけきようがみんな出てしまつた」と云つて歎き、男は何一つ貰はずに暇を出されてしまつた。

——新潟縣南蒲原郡——

岩手縣 稗貫郡

昔研 二ノ三八

山形縣 最上郡

昔研 二ノ一八五

「鴛の内裏」

福島縣

磐城昔話集 四三・一三二

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 四六

「ほけきよう」【例出】

岐阜縣 飛騨

ひだびと 五ノ三

土藏の中だけは見るな、といふ女、その留守にかべを破つて見ると多くの桶があり、中にきれいな魚がいっぱい泳いでゐる。三年かゝつて積んだ行が一度に戻つた。もう人間界には歸れぬといつて、ホーホケキョとないて山へとんで行つてしまつた。

○参考

昔研 二ノ五三〇 に鈴木棠三氏の研究を載す。

猿の一文錢

鴛の一文錢と同じ系統。猿の恩返しに貰ひ、これを金箱の上に置けば金が出来、米櫃におけば米がふえる。

(犬と猫と指輪の條參照)

山形縣 東田川郡

昔研 一ノ四六五

「白いんこ」

新潟縣

佐渡昔話集 八一

花咲爺の系統。

福島縣 高田郡北村

藝備「昔話の研究」 五四

こゝでは猿の金といふ。この金を隣の婆にとられ、犬猫が取もどしに行き、猫がとつて来たのでそれからは犬と猫の仲がわるくなつた。と語られる。

因幡

國民童話

島根縣 邑智郡

民族文化 二ノ七

少しこわれては居るが、始めに、子供にいちめられる小猿を救ふ條あり。

”

昔研 二ノ四六一

「東岸の爺と西岸の爺」

鼠の淨土

昔或爺が蕎麥焼餅をもつて島打ちに行き、鼠を打つてゐると鼠が一匹ちよろ／＼と出て来た。そこで焼餅を半分こわしてやると啜えて穴へ這入つて行つた。又出て来たので又投げてやると、又啜えて行つた。すると今度は親鼠が出て来てお禮を云ひ、自分の家に来て呉れるといふので、云はれるまゝに目をつぶつて鼠について行くと立派な座敷の中に来て居た。そこへさつきの仔鼠どもが出て来て禮を述べ、うんと御馳走になつて歸りがけには金を買つて来た。

隣の爺はそのまねをして蕎麥焼餅を持つて島打ちに行き、仔鼠に呉れて鼠の家を招かれた。御馳走を食べながらあたりを見ると向ふの方で鼠が臼に黄金を入れて

猫の聲は聞きたくないであ

動物の援助

と歌ひつゝ搦いてゐるので、その黄金欲しさに猫の啼聲を眞似すると、鼠共はみな逃げてあたりは暗闇になつたので、大變だと思つて氣がついて見ると、自分は鼠の中で鼠穴に頭を突込んで居たのだつた。

青森縣

——岩手縣紫波郡——

” 八戸

津輕昔話集 第二十七

岩手縣 紫波郡

昔研 一ノ三六八

「爺なの島打ち」【例出】

紫波郡昔話集 一〇七

” 上閉伊郡

聽耳草紙 二二〇

「豆子噺」

山形縣 東田川郡

昔研 一ノ四二七

「鼠の餅搗き」

” 北村山郡

昔研 二ノ二八二

「鼠淨土」

秋田縣 平鹿郡

昔研 二ノ二一九

「鼠の餅搗き」

” 鹿角郡

第一昔話號 四三

「鼠の國」

福島縣 石城郡

磐城昔話集 四四・一三三

新潟縣 「鼠と團子」

南蒲原郡昔話集 三〇

長野縣 小縣郡 「鼠によられた話」

昔研 一ノ三六

〃 下水内郡

下水内郡誌 一九七

〃 兵庫縣 美方郡

郷土研究 四ノ八號

〃 「鼠淨土」

昔研 二ノ三二六

〃 城崎郡

同書 二ノ三七一

〃 廣島縣 山縣郡

安藝國昔話集 七二

〃 「鼠の國」 二話あり。

同書 二ノ三七一

〃 同縣

藝備「昔話の研究」 五九

〃 隱岐

昔研 一ノ三六八

〃 「鼠の島」

昔研 一ノ五六八

〃 大分縣 速見郡

昔研 一ノ四二〇

〃 熊本縣 飽託郡

昔研 二ノ三七四

〃 鹿兒島縣 奄美大島

同縣

〃 同縣

藝備「昔話の研究」 六六

〃 「かけろ虫」

磐城昔話集 四六・一三四

〃 福島縣 石城郡

新潟縣

〃 「地藏様と團子」

高志路 六ノ七ノ一五

〃 新潟縣 佐伯郡

安藝國昔話集 六五

〃 「轉けた握飯」 [例出]

同書 六五

〃 「ころげた餅」

藝備「昔話の研究」 六六

〃 此處では小さい穴を鬼の穴、蟹の穴等と云つてゐるが、この點で

鼠淨土に移るか、又猿聲話にも。たつた一粒の米と小豆で萩の餅

をつくる誇張話もあり。

豆子斬參照

〃 島根縣 隠岐知夫郡

昔研 一ノ三六六

〃 「焼餅爺さん」

昔研 一ノ四〇九

〃 「團子淨土」

共に鬼の島へ焼餅の後を追ひ行き、金の杓子を得て歸る話。

動物の授助

〃 鹿兒島縣

甌島昔話集 一七二

〃 「鬼博奕」

同書 一七二

地藏淨土

お爺さんが山へ柴採りに行つて晝飯にお結びを食べようとする
と、どうかしたはずみに轉がして穴へ落ちてしまつた。爺がその
穴へ這入つて行くとお地藏さんが食べて居る。爺さんはお結びは
それ一つしか無いから返してくれと云ふと、お地藏さんはあやま
つていまにこゝへ鬼が来るから自分の尻の下に這入つて居れ、そ
して尻を振つたら鶏の鳴真似をせよと云はれた。間もなく鬼が來
て人間臭い／＼と云ふので怖くてふるへてみると、お地藏さんは
三遍尻を振つた。爺は鶏の真似をすると鬼は夜明けだと思つて金
棒を置いて逃げて行つてしまつた。爺さんはそれを持つて戻つた
が何でも欲しいと思つて振るとすぐ出て來るといふ寶物で、たち
まちに大金持となつた。

隣の爺さんはそれを見て眞似したくなり、握飯をもつて島に行
き地藏様の所へ行つた。けれども鬼が出て來て地藏様が合圖の尻
を振つた時をかしくて笑つたので、鬼は見つけてきのふ欺したの
もお前だらうと金棒に爺さんを突刺して地獄へつれて行つた。

青森縣 三戸郡

昔研 二ノ五五四

廣島縣佐伯郡

團子淨土

地藏淨土よりやゝ笑話化したものを團子淨土とする。例へば豆一
粒にて團子をつくるなど。

岩手縣

岩手縣藤澤村誌 二六七

新潟縣 南蒲原郡

第一昔話號 五〇

越中 水橋

ひだびと 七ノ一二

終に「爺はんコロリン」のあることは、肥後の例と近い。

熊本縣 天草郡

昔研 二ノ四一

大分縣 速見郡

同書 二ノ四三

九州のものは形よく整ひ古風である。

花咲爺

(犬子話・上の爺下の爺・灰蒔き爺・雁取
爺などを含む)

昔奥州に善い爺と悪い爺とが隣どうして住んでゐた。二人は川
に筏をかけておいた。上の爺が朝早く行つてみると自分の筏には
犬が一匹、下の爺のには雑魚が這入つて居たので、中だけを取換
へて歸つた。下の爺は行つてみると小犬がかゝつてゐるので拾つ
て歸り、椀で食はせると椀だけ、鉢で食はせると鉢だけ、大きく

なつた。或日爺様と山へ鹿捕りに行き、犬の手柄で鹿を澤山捕つて歸つた。隣の爺は犬を借りて行つたが、ししといふ所を蜂と云ひ違へたので澤山の蜂に刺されてしまった。爺は怒つて犬を殺してこめの木の下に埋めて歸つて來た。下の爺は犬をかへして呉れないので聞くと、殺してこめの木の下に埋めたといふので山へ行つてこめの木を伐り、臼につくつて米や金を授かるやうにと臼唄をうたひ乍ら搗くと、本當に米や金が出て仕合せに暮せるやうになつた。隣の爺はその臼を借りて婆と二人で搗いたが肝腎の歌の文句を忘れて、間違つた唄をうたつたので汚いものが家の中に流れて來た。二人はそれを臼のせいだと云つて腹を立て、臼を火にくべて焼いてしまつた。

下の爺は臼を焼いたと聞いて、せめてその灰だけでも貰つて行かうと灰を持つて來て、畑のそばの沼に居る雁めがけて

雁の眼まなこさあくはいれ、雁の眼まなこさあくはいれ
と云つて投げつけると、唄の通り雁の眼の中に灰が入つて、雁はころ／＼と死んでしまつた。婆と二人で雁汁をこしらへて食べてみると、又隣の爺が來て譯をきくので、灰を投げた話をする、又その灰を分けて貰つて歸つた。そして風つよい晩屋根に上つて空にむいて

ちんち眼まなこさあくはいれ、ちんち眼まなこさあくはいれ

と唄つたので、文句通り爺の眼に入り盲となつて屋根からころげ落ちた。下に待つて居た婆は雁が落ちて來たと思つて大きな槌で爺を打つた。

——岩手縣江刺郡——

青森縣

國民童話 一五二

”

津輕口碑集 三三

”

津輕昔話集 四三

八戸市

昔研 二ノ三六二

四話あり。

岩手縣

江刺郡昔話 一五

〔例出〕

紫波郡昔話集 七三

”

上閉伊郡昔話集 六八

”

老嫗夜譚 一三〇

”

第一昔話號 二七

”

岩手郡

「下田おうち・上田おうち」

昔研 二ノ五一四

山形縣 北村山郡

「花咲爺」

秋田縣 平鹿郡

昔研 二ノ四五六

「上の爺と下の爺」

人類學雜誌 一二八

宮城縣 加美郡

磐城昔話集 一七二

福島縣 石城郡

「こゝ掘れわん／＼」

新潟縣 佐渡

昔研 二ノ一七六

「花咲爺」

昔研 一ノ四二四

新潟縣 中浦原郡

加無波良夜譚 六〇

”

南浦原郡

「花降り爺」

南浦原郡昔話集 三四

”

「灰播爺」

福井縣 坂井郡

昔研 一ノ三七〇

岐阜縣 飛騨丹生川

うつしばな 四七

岡山縣 御津郡

昔研 一ノ四一四

「犬の恩報じ」

昔研 二ノ一三二

愛媛縣 北宇和郡

昔研 二ノ三二〇

「花咲爺」

青森縣 八戸

佐賀縣 小城郡

滋賀縣高島郡

動物の援助

第一昔話號 六三

動物の援助

一三七

動物の援助

一三七

竹 伐 爺

昔殿様が竹藪のそばを通ると竹を伐る音がした。「俺の藪を伐る者は何者ぢや」と云ふと、竹を伐つて居た者が、「日本一の屁こき爺」と答へる。「俺の前で屁を一つこいて見い」と云ふと爺は「ちん／＼い／＼、ごよの盃おちん／＼」とやつたので殿様は感心して澤山の褒美を下された。近所の悪い爺がこれを聞いて、殿様の竹藪で竹を伐つて居て眞似をしたが、失敗して縛られてしまつた。

「ものいふぐうざう」ぐうざうは龜。
賣犬はしば／＼龜になつてゐる。

長崎縣 北高來縣

昔研 二ノ四一

「上爺下爺」

方言誌 二二號ノ一二

鹿兒島縣

甌島昔話集 一六七

沖永良部島

おきえらぶ昔話集 三二

「灰播童子」

おきえらぶ昔話集 三二

「尻ひり爺」

青森縣 昔研 二ノ四二六

尻をひ一段「膝へ上れ、肩へ上れ」は轉用か。

鳥吞の條はない。

山形縣 北村山郡 昔研 二ノ二八〇

「尻つびり長者」

秋田縣 平鹿郡 昔研 二ノ五五九

新潟縣 南蒲原郡 昔研 一ノ七三

二話あり。鳥を食ふ話あり。

長野縣 北安曇郡 小谷口碑集 一四七

「さどりのわつば」の主人公。

愛知縣 北設樂郡 第一昔話號 五七

此地の外十七例を擧げてゐる。

滋賀縣 高島郡 第一昔話號 六三

【例出】

廣島縣 藝備「昔話の研究」 七一

鳥根縣 邑智郡 昔研 二ノ五六三

德島縣 阿波祖谷山昔話集 九一

「尻ひり婆」

香川縣 三豐郡志々島 さぬき民俗 八

（参考）福富草紙との關係。昔研 二ノ三五二

鳥吞爺

誤つて鳥を呑み、尻が面白く鳴る様になり、幸運を得る。後半は

竹伐爺に同じ。竹伐爺参照

福島縣 石城郡 磐城昔話集 四七・一三六

新潟縣 南蒲原郡 昔研 二ノ二二六

「唄うたひ爺」

石川縣 江沼郡昔話集 七三

三話あり。

福井縣 坂井郡 昔研 一ノ三〇

岐阜縣 飛騨丹生川 うつしばな 五〇

鹿兒島縣 甌島昔話集 一七〇

猿地藏

昔ある所によい爺様があつた。或日山へ柴刈りに行つて、向ふ

の河原を見たら、猿が集つて石地藏を擔いで對岸へ渡して居た。

爺はこれは面白いと思つて自分も河原へ行き、全身に米の粉を塗

り白を倒にして其上に立つて地藏様のまねをして居た。それを猿

が見つけて此處にも地藏様が御座ると云つて手車にのせて擔ぎ、

川の中ををかしい唄をうたつて對岸へ渡しそこに据えて拜んだ。

爺は作り聲をして、「石を枕に腿を用意しろ」と云ふと、猿はその

通りにして皆寝た。寢入つた頃槌で猿の頭をつぶして殺し、家へ

持歸つて婆様と猿汁にして食べた。

青森縣 八戸 秋田縣鹿角郡 昔研 二ノ四二六

四話あり。四つとも山畑に行く爺。粉を白く顔に塗つて、とあ

り。三つは笑つたのが隣の爺の失敗。終の一例には隣の爺無し。

岩手縣 膽澤郡 黄金の馬 一一九

同縣 膽澤郡昔話集

江刺郡昔話 二八

紫波郡昔話 九四

山形縣 北村山郡 昔研 二ノ二二四

「爺と猿」

「水引きの話」

秋田縣 鹿角町 第二昔話號 六七

「爺様と猿」【例出】

仙北郡 聽耳草紙 二四一

動物の授助

「猿と爺地藏」

福島縣 石城郡 磐城昔話集 四九・一三九

長野縣 小縣郡民譚集 二五三

和歌山縣 田邊市 郷土研究 二ノ二四二

鳥根縣 邑智郡 第一昔話號 七四

「ぶいが谷の酒」

廣島縣 藝備「昔話の研究」 一七九

三話あり。何れも笑つたのが失敗。一は猿の代りに鬼。

山縣郡新庄村 安藝國昔話集 八〇

大分縣 速見郡 昔研 一ノ五六九

長崎縣 對馬佐須村 旅傳 一二ノ八ノ二二

爺は山芋掘りに行く。猿の代りに狸。

瘤取爺

昔正直な爺と心の悪い爺があつて、二人とも頬に大きな瘤を持

つて居た。正直な爺がある日山へ木を伐りに行き、歸る時になつ

たら雨がふり出したので、木の洞穴の中に入つて休んでゐる中眠

つてしまつた。起きて見ると夜中で、洞穴の前にはいろ／＼な化

物どもが澤山集つて酒盛りをして居たが、そのうちに酔つて踊り

出した。爺も思はず踊の面白さにつられてそこへ出て行つて踊りはじめた。みんな驚いたが、仲間に入れて呉れて夜明けまで騒いで引上げる時、面白い爺だから又今夜も来る様に、大事なものを預つてやると去つて頬の瘤を取つてしまった。爺は家に歸つてその話を婆にして二人で大喜びをした。

心の悪い爺は、自分の瘤も取つて貰ひたいものだと思つて山の洞穴で待つて居た。夜中になると又化物が出て来たが、怖いので慄へてゐると、化物共はゆふべの爺は来ないかと洞穴の中を探して爺を引出した。が、少しも踊らないので怒つて昨夜の瘤を片方へ引つけた。それで悪い爺は兩方に瘤のある頬になつて歸つた。

——山形縣最上郡——

岩手縣

和賀郡

西磐井郡

上閉伊郡

「柴刈爺」

山形縣 最上郡〔例出〕

福島縣 石城郡

新潟縣 南蒲原郡

江刺郡昔話 二五

聽耳草紙 二二一

同書 二一四

老嫗夜譚 三一九

昔研 二ノ一八六

磐城昔話集 五〇・一三九

加無渡良夜譚 一四

昔研 一ノ四〇四

静岡縣 濱名郡

和歌山縣 伊都郡

二人の爺の踊の巧拙は云はず。たゞ存在分布を知るのみ。

語りは零落してゐる。

廣島縣 加茂郡

山縣郡

致富譚に近く、怪談の古い形に近い。

大分縣 北海部郡

勢端は畑の握飯話。穴の中に天狗。

同縣

佐賀市

鬼の踊に参加するだけにて、瘤の話なし。又團子淨土に比し團子も握飯もない。

これで二つの説話は、もと同系だつたことがわかる。

○参考

朝鮮 日本昔話集 下ノ八八

醒醉笑にも。

静岡縣傳説昔話集 四六二

口承文學 九ノ一六

安藝國昔話集 八四

同書 八五

昔研 一ノ一三五

直入郡昔話集 四一

昔研 二ノ三二二

言葉の力

化物問答（狐狸を言ひ負かす話も含む）

或山の中の村に醫者が来て、住む事になつたが家が無いので村から少しはなれた山の空寺に住む事になつた。すると夜になると雨戸の外に何か来て縁に上り、割れ鐘の様な聲で

醫者どんの頭をステテンコテン

醫者どんの頭をステテンコテン

と怒鳴り乍ら戸を割れさうに叩く、醫者は怖くて蒲團の中にもぐつて居たが、翌朝見ると縁側に大きな獣の足跡がいつばいあつた。村人に話すとそれは古狸の悪戯だらうと、その夜は村の若者が幾人も一しよに寺に泊ることになつた。戸締りをしたり又天秤棒を持つたりして爐をかこんで待つてゐると、夜更けて又戸をたたいて醫者どんの頭をステテンコテンとやり出した。こつちも負けて居ず

そんな事言ふ者の頭をステテンコテン

そんな事言ふ者の頭をステテンコテン

と嗚鳴り返す。又狸の化物も嗚鳴り返すといふ大騒ぎをしたが遂

言葉の力

に長い競争の後狸は負けて黙つてしまつた。翌朝見ると大きな古狸が一匹言ひ負かされた口惜しさに、自分で自分の腹を食ひ切つて死んで居た。それを皆で狸汁にして食つた。

——山梨縣西八代郡——

岩手縣 上閉伊郡

山梨縣 西八代郡

「醫者どんの頭」〔例出〕

岐阜縣 吉城郡

「ざつとと狸」

狸が「お前の頭はすつてんでん」といふと座頭も負けずに「お前の頭はすつべらぼんぢや〜」と三味線に合わせて弾くといふ。

愛知縣 北設楽郡振草村

「狸」

南設楽郡

遠江

「山の芋」

大山の芋の化物が和尚と小僧を食つてしまつた後、座頭が琵琶でいひ負かして退治する。

福岡縣 鞍手郡

「うそ」と三人住んでゐる。うその留守に狐が来て

福岡縣昔話集 七八

猪・鹿・狸 一五九

國民童話 五二

うそがばうつてんとんく、
といふ。うそがこれを聞いて
さういうものこそうつてんとんく
と云へと教へる。朝起きて見ると、狐が舌をかみ切つて死んでゐ
た。

「うそ」は吉吾等と同じ地位のものか。

この話は後段あれど何分にも不明なり。然しもの形にやゝ辿り
得られる。

或は座頭の語り方のまゝか。

(参考)

筑前宗像郡東郷村平井の建興院にて天井の聲と云ひ合ひ、代々の
僧負けて死ぬ。

建興院はボックリシヨ

千も萬もボックリシヨ

一人の旅僧これに和し、積ほどの狸云ひ負けて死ぬ。

蟹問答

或偉い旅僧が山中で日が暮れた。見すばらしい木樵小屋が見付
かつたので行つて泊めてほしいといふと、断られた。この先に化

物が出るといふ古寺があると教へられ其處に泊る。
眞夜中になると何處からとも無くガタ／＼音をさせて大入道が
出て来て、自分の出す謎が解けなかつたら食つて了ふと云ふ。さ
うして、「小足八足大足二足、色紅にして兩眼天に輝くこと日月
の如し」と嗚鳴つた。旅僧が蟹と答へて杖で大入道の頭をビシャ
リと叩くと音をたて、引込んだきり朝まで何も出て来なかつた。
夜が明けて大入道の逃げた方を探してみると縁の下に大きな古蟹
が一匹死んで居るのが見付かつた。それからこの寺には化物が出
ない様になつた。

——埼玉縣川越市——

石川縣 珠璣郡

能登國名跡誌 下ノ二九九

飯田の蟹寺(永禪寺)の月庵「四足八足兩足八足、右行左行眼天
にあり」といふので蟹なるを知る。

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 二九〇

「がに坊主」

續甲斐昔話集 三一九

「蟹坊主」

東山梨郡萬力村 蟹追阪長源寺の話。

埼玉縣 川越市

川越地方昔話集 一〇〇

「化物問答」〔例出〕

熊本縣 天草島

郷土研究 五ノ一七七

「蟹の甲」

虚無僧が夜道で惟光に逢ひ、「四足八足云々」と云ふので「汝ハ
蟹ヲラン」と尺八で打つた。それでいまでも甲に痕があると。

「蟹山伏」の狂言もあるから古い話であらう。

「歌と幽霊」〔例出〕

大工と鬼六

「かきならす灰は濱邊の砂に似る」と詠み、後の句が續かぬのを
苦に病んで和尚が成佛しないで居る。ある小僧が「圍爐裏は海か
オキは見ゆるぞ」とつけて惟止む。

——大分縣直入郡——

昔研 一ノ五〇六

秋田縣 仙北郡

「灰ならし灰は」

平鹿郡

旅傳 一三ノ二ノ三九

「羽後淺舞町近傍聞書」に灰句和尚の話あり。

新潟縣

佐渡島昔話集 一六〇

「下の句」

これは和尚で無く宿屋の亭主、泊り客の一人が下の句をつけろ話。

大分縣

直入郡昔話集 七四

或處に流れの早い川があつて、幾度橋を架けても流されるので
近郷で一番名高い大工に架けて貰ふ様に頼んだ。引受けたものゝ
大工は心配でたまらず、川のほとりでじつと流れる水を見て居る
と、水面に泡が浮んでその中から鬼があらはれた。何を考へてゐ
るときかかれるので譯を話すと、鬼は笑つて「お前がいくら上手で
も此處へ橋は架けられまい。しかしお前の眼玉をよこしたら代つ
て架けてやる」といふ。大工は眼玉をやるつもりで家に歸つた。
次の日は橋が半分、その次の日はもう全部架つて居た。驚いてゐ
ると鬼が「サア眼玉をよこせ」といふ。大工は待つて呉れと云つ
て山へ逃げて行つてあちこち歩いてゐると
早く鬼六ア 眼玉ア 持つて来ばア えゝなア
と子供のうたふ聲がする。大工はそれを聞いて家に歸つた。次の
日川へ行くと又鬼が出て来て「眼玉をよこせ、それがいやならば
俺の名を當てゝ見ろ」と云ふ。大工は鬼六と云ふと、鬼はたちま
ちに消えて失くなつてしまつた。

——岩手縣膽澤郡——

岩手縣 贈澤郡

聴耳草紙 一〇六

「大工と鬼六」〔例出〕

この話など多分古い形。子供の唄を立聴して鬼六といふ名を知る
こと。

昔話採集手帖 七〇 岩手日報所載のものも同じ話である。

石見

旅傳 四ノ七一六

テイテイコブシ

「テイ／＼コブシはお泊りか」などと云つて、南池鯉魚など來
る。テイ／＼コブシは椿の木の稚だった。

現在「西竹林の一目鶏」などとなつてゐるのは漢字教養普及後の
改作で、もとはたゞ怪物の名を知るのみであつたらう。

子守唄内通

危難に逢はうとして居る事を子守の唄から覺りそれを逃れること。

福岡縣 築上郡

福岡縣昔話集

「學問のおかけ」

江州にての事といふ。山中の茶屋に泊り、乳母が子守をして頻り
にうたふ唄。

「文字に書いて見れば」とあり。之は一種の字を教へる教育用

か、しかし子守の唄といふ所にまだ「大工と鬼六」などの痕跡が
見られる。

「平林」なども同系か、又トム・チットトットの系統か。

長崎縣 南高來郡

島原半島民話集 二四四

「山の中の子守唄」

この歌は誰かの下手な作りものであるが、古くあつた話と思はれ
る。

尾張のも一つ家の石の枕の歌、淺草のも中心はこゝにあつたか。
鬼との約束の話も「子守の歌」から。

天人女房の飛羽も「子守の歌」から。

ズイトン坊

貉に名を呼ばれる話。

長野縣

小縣郡民譚集 二六九

「ズイトン坊」

節穴から窺くと貉が尾で戸をたゞいてゐるので、その尾をひつば
ると、尾が切れたので血をたどつて行くと、奥山の洞穴へ入つて
居たのでそこで捕へる。

長野縣 下伊那郡

昔ばなし 三〇

「山寺の坊様とズイトン坊」

言ひ負けて死ぬと云ふ。どうしてその聲を出すかは云はず。

聲の調子で面白味を出すもので、なかば音曲による。

ボサマの作。

「狐をだました話」

泉州縣原

口承文學 一〇ノ二五

長崎縣 南高來郡

島原民話集 四四・四八

二話あり。前者の中目ちがひの事なく、後者は狸で、馬にしばり
つける。末に修飾あり。

智慧のはたらき

狐退治

吠狐などと同系。狐を騙して退治する話。

青森縣 八戸

昔研 二ノ四三一

二話あり。これは陸中にもある話。

前者は犬をかくして置いて爺婆が躍る。後者は狐の客を騙して袋
に入れ打殺す。たつた一匹の狐が逃げ歸る條双方にあり。立聴に
より狐の復讐を防いだこと。

二つとも座頭製か。

岩手縣

紫波郡昔話 三一

「狐と小僧」

狐が和尚に化けて來るのを退治する話。

山梨縣

旅傳 三ノ五二七

智慧のはたらき

吠狐

狐を騙して袋に入れ退治する話。

農民なれば袋に入れるかはりに馬を乗せると云ふ。似せ本尊例話

参照

青森縣 八戸市

昔研 二ノ四四六

四話あり。

その一は「だまされ狐」 袋に入れて叩くまで、爺片目を伴ふ。

その二は「狐をだました話」 息子等の手柄、片目の條無し。

その三は「騙され狐」 婆が行くと孫になつて來る。

その四は「新井田のしよつば爺」 吠はあるが、中の鹽を食はさ
れる話。敢北承認談。

岩手縣

九戸郡誌 四七七

狐が化けて聲に來る。化けかけを見つけて吠に入れ、それを「み

「さいな〜」と云つて叩くといふのは、やはりボサマの三味線の藝であらう。

家に歸つて来て貉をあげてやつた時にはもう死んで居つた。

——石川縣江沼郡——

岩手縣 上閉伊郡昔話集 一〇三

岩手縣 上閉伊郡 老嫗夜譚 一八八

「ボサマと狐」

狐狩に通るかゝつたボサマが、その智慧で袋の中へ狐を敷き入れて殺す話。

狐との話の進行が非常に面白く、それに又目のまぢがひも子供にはをかしかつたらう。

山形縣 最上郡豊里村

瑞典話。二つ本尊。

豊里村誌 二五二

「裨貫郡 狐の化けた爺は右が片目。なほ熱湯で足を洗へないといふから試みる。遂に吠に入れられる。」

「臈澤郡 破片か。」

長野縣 北安曇郡

小座頭の狐退治。

北安曇郡郷土誌稿 一

黄金の馬 一〇四

山梨縣 西山梨郡

コンプタロ淵の古狸。

地方叢談

昔ばなし 六三

片目ちがひ

昔爺と婆とあつて、爺の右の眼は盲であつた。爺は正月の挨拶に歩いた道で古い貉にあうた。貉は爺の眞似をして左の眼を盲にして家に歸つて行つた。婆は置の爺がかへつたので湯を沸して入れた。お風呂の蓋をきせ重い石をのせて置くと、貉は風呂の中で本當は爺で無く貉だと云つたが出してやらなかつた。本當の爺が

或多若者が集つて仕事をしながら狐を捕る話をし、結局一人が狐捕りに出かけることになつた。暇から馬をひき出し、荷鞍をつ

似せ本尊

岩手縣 紫波郡昔話集 三一

「狐と小僧」狐退治の二 参照

「臈澤郡 (新)黄金の馬 四三

「若者が狐をだました話」〔例出〕

あとさきあり。阿彌陀様は手招きなざると、云つて見あらはす。

平泉 和尚と小僧 九七

「俵で狐を捕つた話」

福島縣 石城郡 磐城昔話集 六七・一五八

長野縣 北安曇郡郷土誌稿 二ノ八三

山梨縣 西入代郡 續甲斐昔話集 三三

「狐と抱瘡」

島原よりの傳來と甲斐では言ふ。

島根縣 隱岐昔話集

徳島縣 阿波祖谷山昔話集 二九

福岡縣 糸島郡 福岡縣昔話集 九七

「福間の亦兵衛」

婆に化けさせて狐をとる話。三つあつた地蔵が四つになる。

長崎縣 南高來郡 旅傳 二ノ六

同縣 島原民話集 六〇

岩手縣 上閉伊郡

「狐と小僧」

——岩手縣臈澤郡——

老嫗夜譚 一八六

智慧のはたらき

一四七

「狐が煮殺された話」

敗北の承認

昔美作の或山の峠の上に軒家の茶店があつて喜兵衛といふ人の夫婦が住んで居た。その茶屋へ或夜遅く立派な身なりをした旅の侍が入つて来て休んだが、よく見ると狐の化けたのだつた。袴や着物、大小の刀は本當の侍の通りであつたが、まだ未熟と見え少し毛があり顔が尖つてゐたし、耳も三角で突張つてゐた。喜兵衛はをかしくてたまらなかつたが笑ひを我慢して、金盃に水をいっぱい汲んで「お使いなさいまし」と侍の前に置いた。しばらくして、狐は水をつかふつもりで水に映つた自分の顔を見て化けきれずに居たのに気がつき、非常に驚いた聲を出して茶屋をとり出して行つた。

次の日喜兵衛が一人で山へ木を伐りに行つての歸り途、だしぬけに林の中から名を呼ぶものがある。姿は見えなかつたが返事をすると「喜兵衛さん、昨晚はをかしかつたなあ」と云つた。化けそこねた狐だつたのである。

退治譚を一層愉快にする手段か。

——美作 日本昔話集による——

「人間には油断をするな、それも馬糞かもしれぬ」といふ落語。青森縣 九戸郡誌 四五五

小輕米のベツクリ澤の狐の實話といふ。伊保内寺澤の別當、馬にくりつけてつれ歸り、火あぶりにする。狐は逃げ乍ら「寺澤の別當、馬鹿別當、ひつぱり灸りの大名、ゴクワン／＼」と鳴いて飛去つた。

岩手縣 上閉伊郡 遠野物語 二八四
狐に鹽を食はせた男が、次の日其處を通ると山の上から狐が「鹽ヘシリ／＼」と謂つた。

山梨縣 東八代郡 續甲斐昔話集 四九
「長右衛門と貉」

孝行坂

假面を被つて敵を欺き、危難を免れ且福を授かる。松山鏡の變化といふのは當つてゐるだらう。

岩手縣 上閉伊郡 老嫗夜譚 二三〇
長野縣 小縣郡民譚集 一七三

「蛇の金攻め」
孝行な子が親の薬と狸の面を買つて歸途蛇に逢ふ。吞まれよう

として狸の面を被つておどろかす。「何が一番怖い」の問答で、金が怖いと云つて後に金を授かる。狸と役者の話も之と關係があらう。

徳島縣 阿波祖谷山昔話集 五八
福岡縣 浮羽郡 福岡縣昔話集 一三三

孝行な下女が父に似た面を拜んでゐると、明輩が鬼の面に替へておく。驚いて歸宅の途中、悪者の焚火にその鬼の面を被つてゐると、悪者は金を置いて逃げて行く。これなどは作者の流布と考へられる。

之と似て愚者の立身談が津輕昔集にある。おろか者の立身談は日本には例が少ない。

鹿兒島縣 甌島昔話集 一七五
○参考 日本童話集 三〇三「素麵と鬼面」 産地不明。

化けくらべ

昔江波にお三といふ悪い狐と、四國の讃岐にこれもお三に負けぬ悪い狸が居た。或時二匹が出會つて、どつちが化け方が巧いか腕較べをやらうといふ事になつて、先づ狸が草を頭に置いて綺麗

智慧のはたらき

なお嫁さんになつたり、足輕になつたりして見せた。するとお三は「今度は自分の番だが、あさつて國道の松原を大名行列をやつて通るから見てくれ」と言つた。それならといふわけで狸は承知して別れた。狸が約束の日に國道へ行つてみると、向ふから全く立派な行列が来るので感心をして、お殿さんの駕籠へ近づいて「よく出来た／＼」とほめたのでお供の侍に斬殺されてしまつた。此の大名行列は本物で、實はお三が三日前に知つてゐて狸をだましたのださうである。

——廣島縣——

福島縣 右城郡 磐城昔話集 六一・一五五
新潟縣 南蒲原郡

本物の行列を見乍ら狐が「子狸うまいぞ／＼」と云つて殺される。子狸の復仇談。

新潟縣 越後關屋濱の團九郎狐、佐渡の三吉狐をだます。

山梨縣 西八代郡 甲斐昔話集 二七
「小左衛門と狐」

山梨縣 七變化八變化の話あり。淡路の芝右衛門狸とおなじ。續甲斐昔話集 四二
「狐と貉」

二人が互ひに死んだまねをして、一方が狩人や炭焼に化けて里に賣りに行く。貉は本當に殺される。

大阪府 泉南郡葛畑 口承文學 一〇ノ三一

「びやかけの狸と小女郎狐」

廣島縣 安藝國昔話集 一五九

「江波のお三狐」の話。其三に「例出」

島根縣 旅傳 三ノ一一

出雲の仁右衛門新中、狐の頭目は彌左衛門、大名行列に化けると

「仁エモンサンウマイソ」といふこと。淡路の芝右衛門ばなしに

おなじ。

愛媛縣 松山

地方叢談

荏原の金平狐。八股樓の下の八股狸。

熊本縣 八代郡 人文 一ノ一

彦七が狐を騙す。殿様の行列に向つて「彦七よく出来た」といふ

「彦七の饅頭にだまされるな」の下げあり。

熊本縣 玉名郡 昔研 一ノ八四

「百舌と狐」

話はよほど「尻尾の釣」の方に近くなつてゐる。但し話し方は新

しい。天守役・地守役の話などゝ近い。

熊本縣 球磨郡 昔研 一ノ二二九

「化けくらべ」

八代の彦市、狐と仲好くなり化け較べして、殿様の行列を見せて狐を捕へさせる。前段に石肥三年の話がある。

長崎縣 壹岐 第一昔話號 七八

「狸と狼」

狼が狸の尻尾を見あらはす。狸は口借しがつて、死んだふりをして仕事戻りの魚を盗む、それから「尻尾の釣」あり。

二つの話のつぎ目が目につく。

信州桔梗原の玄蕃丞、横手ヶ崎のお玉、赤城山のお千代狐にもこの話がある。

狐と狸との動物説話にしたのは近頃か。

○参考

淡路の芝右衛門狸の話 日本昔話集 上ノ八二

八化け頭巾

昔或池のほとりに稻荷様が祀つてあつて、その眷族におすみ狐といふ狐が居て、大層化け方が上手であつたが、人間に化けの皮をとられてからは、かへつて人間から化かされる位であつた。

或時山伏が来て、自分は京都の稻荷大明神だが、人間にけがさ

れた化けの皮を出せばもう一度靈力を入れてやると欺くと、狐は喜んで化けの皮を差出した。すると山伏はそれを持つて逃げてしまつた。

その山伏は庄屋と懇意であつたので、或日おすみ狐は狸の化けの皮を借りて庄屋に化け山伏の家を訪れた。そして狐の化けの皮といふものを見せて呉れと云ひ出した。すると山伏も庄屋の云ふ事として出して見せると、狐の庄屋は着て見ようと云つて肩にかけ「これはおすみ」に」と云つて歸つた。山伏は口借しがつたがどうする事も出来なかつた。

又山伏は、今度はほんとの稻荷大明神だと名乗つて、しばし人間の手にかけた化けの皮を金の御幣で祓つてやると云つて狐を欺き再び化けの皮をとり上げた。それからはおすみ狐は犬の様に盗み食ひばかりして歩く様になつた。

能登 長崎縣 壹岐島 鹿島郡誌 九八四

長野縣 下伊那郡豊村 藍原三號

「はちろてん」

野狐を欺した話。話主は簡屋。狐の寶物はシチロテン、簡屋は簡を示してハチロテンだと云つて交換する。

鳥取縣 因伯童話 一三

兩足院といふ山伏が、狐の七化けの寶をまきあげる。八化けの寶は米子で買つた頭巾。

廣島市 安藝國昔話集 一五八

二話あり。江波のお三狐の條に、いづれも能役者の面を買ふといふ話。

長崎縣 島原民話集 四九

「日見ノ峠の狐」

七面ぐりと八面ぐりと取換へる。乳母に化けた狐に取返されるといふ綱伯母型を伴ふ。

これは追加か。

長崎縣 島原民話集 五五

「長崎の治郎兵衛狐」

「唐津かんねの話」 壹岐島昔話集 七五

「おすみ狐」

「例出」 同書 二〇五

「寶義」

この話も變化のいか。隠れ義笠の項も参照 同書 一六七

寶物交換 (「八化け頭巾」の一變化)

昔或子供がめんばに辨當をつめて山に行つた。天狗が居たので欺してやらうと思つて辨當を食つてしまつてから、めんばを眼にあて、京が見える五重塔が見える等と云つて一人で騒いで居た。天狗は羨しくなつて貸せといふが、子供はなほ面白さうにしてゐて貸す風もないので、天狗はもどかしがつて、自分の隠れ簀笠を貸すから是非見せろといふ。子供は占めたと思つて、わざとしぶしぶめんばを天狗に渡した。天狗はしきりに覗いたが何も見えない。子供はと見るともう隠れ簀笠を着たので、どこに居るか分らなくなつて居た。子供は家に歸つたが母親にも見えなかつたので安心して菓子屋を歩いて菓子を盗んで食つた。村でも皆困つたが子供の悪戯は段々ひどくなる。

子供はその簀笠を、母親の簀笠の抽出しにしまつて置いたら、母親が汚ながつて焼いてしまつた。子供はそれを知つて裸で川へ入り、水のついたまゝの體で灰の上に轉がると、體中に灰がついて急に母親の眼に見えなくなつた。子供は外にとび出し酒屋で酒をしこたま飲んだが、口のまはりだけ灰がおちてしまつた。すると口のお化が酒をのむとて、皆が追かけて来る。小便をすると其

處だけ灰が落ちて見える様になるので、皆は大ききぎして追かけた。すると向ふから武士が、刀をやたらに振まはして來たので、仕方なし橋から水の中へとび込むと、灰が落ちて子供は正體をあらはした。

——長野縣上伊那郡——

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚 八一

「天狗の小園」

主人公は博徒で、賽ころと取換へる。後段鼻を高ひくする笑話あり。立身出世で終る。

岩手縣

同書 二一〇

「和尚と狐」

和尚の古頭巾と狐の化手拭と交換。和尚が手拭を被り村の若衆をからかふ條あり。

山形縣 東田川郡

昔研 一ノ五一三

「生針・死針」

主人公は怠け者。河童より「生針・死針」を買ひ、死針を河童に試みて逃げる。「それはゆふべの夢でぞろ」で終る。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 六・一五五

福島縣 西白川郡

國民童話 一二八

「狐の寶物」

二子塚村の五十吉が關和久村のどど塚のど衛門狐と、三色頭巾・狐の寶珠の交換。

新潟縣 南蒲原郡

第一昔話號 五〇

「隠れ簀笠」

のんだくれの男が柿の種と天狗の簀笠と交換。

長野縣 上伊那郡

第一昔話號 五五

「天狗の隠れ簀笠」

他の同型の話の酒屋が菓子屋となり女房がお袋となつてゐるのは童話化のよい例である。しかもなほ結末に酒屋がある。

長野縣 下伊那郡

落原三號

「八化け頭巾」の項參照

埼玉縣 熊谷

地方叢談

古狐が九百九十九人を坊主にする。千人目は坊主。七色傘と十六頭巾との交換。

兵庫縣 神崎郡

第一昔話號 六八

「博奕打と天狗」

鳥根縣 兼川郡平田

旅傳 二ノ一〇ノ一九

「西出雲雜筆」の中に薬師寺の宗信と飯山の太郎兵衛狐とが古頭巾と寶珠の玉と交換する話がある。

鳥根縣 兼川郡平田

旅傳 二ノ一〇ノ一九

「西出雲雜筆」の中に薬師寺の宗信と飯山の太郎兵衛狐とが古頭巾と寶珠の玉と交換する話がある。

鳥根縣 兼川郡平田

旅傳 二ノ一〇ノ一九

智慧のはたらき

鳥取縣 西伯郡

因伯童話 一一

米子戸神山の十内狐を蚊屋村の兩足院の僧が、古帽子を八化けの寶と稱して七化けの寶をとる。狐が取戻したが和尚が利かぬ様にしておいたのを知らず、狐は馬子を欺さうとして見あらはされ、焼餅で叩かれ尻に大火傷をする。それで戸神山の下を流れる川を尻焼川といふ。

半分傳説化するもの。この種の昔話に多いのも奇なり。

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 一一〇

「田舎の著者」

彦市の話になつてゐる。

福岡縣 築上郡

福岡縣昔話集 二〇九

ウツを云ふので親から追出された男が、スイノウ一荷をもらつて

うり歩く。天狗の鼻高帽子と交換(隠れ簀笠)何が一番怖い話

となり、鼻を高低する話あり。自分の鼻を高くして車にひかれ、

そこで死ぬ。

熊本縣 球磨郡

昔研 一ノ一三九

四話あり。彦市話。前段に粗相相兵衛の話の破片がある。「隠れ

簀笠」は型どほり。「身隠しの衣」は前段に「何が怖い」の話。石

肥三年、後段には死骸を戸に立てかける話。その中段に天神さん

の身隠しの衣と、飾と取換へる話あり。灰話・酒屋などは型どほ

り。

熊本縣 球磨郡

昔研 一ノ一三九

四話あり。彦市話。前段に粗相相兵衛の話の破片がある。「隠れ

簀笠」は型どほり。「身隠しの衣」は前段に「何が怖い」の話。石

肥三年、後段には死骸を戸に立てかける話。その中段に天神さん

の身隠しの衣と、飾と取換へる話あり。灰話・酒屋などは型どほ

り。

り「狐のみの」は狐とかくれ簀を代る／＼着てみる。彦市は着たまゝ逃げて酒屋へ行く、簀から足を出して見顯はされ、簀は焼かれる。狐は泣き乍ら歸つて行くといふをかしみあり。

長崎縣 南高來郡

旅傳 二ノ一〇ノ三二

島原民話集 五九

「八面ぐり」

隠れ簀笠

賣物交換と同型。天狗の隠れ簀を機智によつて奪ひとり、取返しに來ても返さない。何が一番怖いの間答あり。それによつて幸運を得る。笑話化したものも多い。いくらでも成長・變化・展開しやすい話である。

青森縣 八戸市

昔研 二ノ四七七

ふくべに粉菴椒を入れたものと簀とを交換し、菓子屋、酒屋を荒す。次に居睡りして火がつき、焼けたので訛言して灰を身に塗つたといふ。

末段は不細工である。座頭の製作か。

青森縣 三戸郡

昔研 二ノ五五五

「天狗とばくちうち」

岩手縣

「隠れ簀に隠れ笠」

「裨實郡」

「天狗と博奕打」三話のうち。

賽と簀笠と交換し、之を被つて長者の娘を隠す話。今一つは天狗を博奕で負かして賽に化けさせ、人と博奕を打ちニコ出るといふのをオニコデロと云つたら鬼が出た。博奕の相手は金銀を残して逃げた。

秋田縣 平鹿郡

「隠れ簀笠」

「南蒲原郡」

新瀉縣 中蒲原郡

「隠れ笠・隠簀」

石川縣

鳥越村の虎狼山。

「南蒲原郡」

「隠れ簀笠」

長野縣

「上伊那郡」

山梨縣 西八代郡

九一色村の阿難阪で駿河の魚擔ぎ屋が博奕をしてゐるのを見て、

紫波郡昔話集 一三八

口承文學 一〇ノ一〇

昔研 二ノ三六五

昔研 一ノ四二六

第一昔話號 四九

能美郡誌 一一〇七

第一昔話號 五四

北安曇郡郷土誌稿 一ノ一八五

續甲斐昔話集 三九八

長崎縣

「寶簀」

後の二五九 のものは後段のみで交換話無く、笑話。

長崎縣

「寶簀」

鹿兒島縣

甌島昔話集 一八〇

鳥團扇

賣物交換と云つてゐる天狗の隠簀の話を諫早地方では、「トリウチハ」といふらしい。

長崎縣 北高來郡江の浦

「天狗さん」

主人公は臍白な男の子、一文錢の穴をのぞいて諫早が見える、長崎が見えると云ふ。鳥團扇ととりかへる。

天狗が見えると出たためを云つて驚かす方がおもしろい。

結末他と異り、村の地藏さんの祭に金持の娘の鼻を高くし、又癒して金を貰ふ(聲にはならず)。

天狗が交換の不利に心づく形これには無し。この點から見ればこちらのほうが改作か。

昔研 二ノ四二二

吉野縣 八卦見の道具と交換。灰塗・母も參與してゐる。

大分縣

熊本縣 球磨郡

四話あり。

長崎縣

二話あり。「天狗の餃子」「隠簀と隠簀」

島原民話集 七二・二五九

「隠簀と隠簀」

「天狗の餃子」

「隠簀と隠簀」

「天狗の餃子」

「隠簀と隠簀」

「天狗の餃子」

「隠簀と隠簀」

「天狗の餃子」

「隠簀と隠簀」

「天狗の餃子」

「天狗の餃子」

何が一番怖い

隠れ簀笠の後段。怪物と一番怖いものゝ問答をし、機智によつて福を授かる話。田野久にもある。

青森縣 八戸

昔研 二ノ四四七

岩手縣 上閉伊郡雫石村

聴耳草紙 五八

「賣鬻」

やゝ賣物交換譚の形はあるが、中心は「そちや何が一番おかないでや」である。俺は小豆飯、俺は鐵砲の音。突然鐵砲の音をさせると賣ふくべを置いて逃げる。

岩手縣 碑貫郡

口承文學 一〇ノ二一

「天狗と博奕打」の第三話。

天狗の怖いのは「モンダ株」俺は餅が一番怖いと云つて餡餅を投付けられる。

宮城縣 桃生郡

郷土の傳承 三

小僧の怖いのは大福餅。天狗はバラに鼻をさゝれて困る。

話はこわれて居るが存在だけは分る。

埼玉縣 秩父大瀧村

昔研 二ノ一二七

「厄人神の仇討」 厄人神は厄病神のこと。

山梨縣 西八代郡

續甲斐昔話集 一一五

「田野兵衛の話」

田野兵衛は芝居好きな孝行者。芝居の歸りに蟒に逢ひ問答あり。蟒のきらひなは煙草の脂、俺は金。

千兩箱を打ちつけに來て後、村の者に脂で退治される。

山梨縣 東八代郡右左口村

續甲斐昔話集 一二〇

「狸右衛門の話」

主人公は役者で孝行者。面を被つて見せることも問答もあるが脂で蟒を退治するばかりで金を授かることは無い。

神奈川縣 津久井郡

同書 二五

「狐に化かされた殿様」

變つた點は二つ。娘に化けて田に水をひいてくれる狐と問答すること。後に狐に仇討をされること。

長野縣

小縣郡民譚集 二三五

「ぼた餅きらひ」

こゝは子供二人のいさかひ話。サイカチバラとぼた餅。

岐阜縣 郡上郡

昔研 二ノ二六七

「たのきう」

役者と蟒の化物。こゝはたのきうへ歸る人と、地名のやうに云つてゐる。

岐阜縣 吉城郡上宮村

ひだびと 五ノ四〇三

「七化八化」

役者と狐。狸と答へて田野久とは云はぬ。狐七化け。狸八化けとかつらを入回とりかへて見せる。

役者は金が怖いといふは可。狐が脂が怖いといふは意味無し。

大阪府 泉南郡

口承文學 三〇

狸と蛇と役者、化けくらべの話から。二つの話の適合せか。

續津

國民童話 二二三

「白蛇の精」

役者が化けくらべの後問答。なめくちと金がそれく怖い。なめくちに化けると蟒はにげて仇討に大判小判を家に投げ込む。

島根縣 八束郡野汲村

昔研 二ノ三三三

「博徒とさいの神」

破片ではあるがサイの神とある點注意。壹岐の賣物交換譚にも歳徳神がある。

島根縣

旅傳 三ノ一一八〇

「大判小判の雨」

〃 隠岐

昔研 一ノ四一〇

「婆と天狗」

島根縣

隠岐島昔話と方言 一〇

智慧のはたらき

「小判とボタ餅」

安藝國昔話集 一五九

「江波のお三狐」の話第四。

お三と鰻魚といふ鰻釣り、猪が怖いとて十圓札を貰ふ話。

廣島縣 山縣郡

安藝國昔話集 一六七

「六兵衛と狐」

徳島縣 名西郡

昔研 一ノ二二三

「うはよみ」

蟒に白髯の爺に化け、子供は白狐の面でおどかす。何が怖いときくのは蟒の方だけ。

徳島縣 美馬郡

阿波祖谷山昔話集 九三

「節分の起り」

熊本縣 球磨郡久米村

昔研 一ノ二二九

「狸だまし」

八代の彦市話。

大分縣 中津

人文 一ノ一

吉吾噺。

長崎縣

五島民俗圖誌 二三七

「孝行娘と狼」

孝行飯の話に近い。食ふと云つた狼と問答する。滋と煙草の脂が

嫌ひといふ。

この島には狼が居ないか？

鹿兒島縣

喜界島昔話集 八五

「河童の恩返し」

河童と仲良くなり、毎夜家の周りの掛錠に魚をかけて行つて呉れるので氣味悪くなり、問答の後嫌ひの蛸をかけておいたら來なくなつた。

○参考

朝鮮 朝鮮民譚集 二七一

「彌勒豚と女」

田野久

「何が一番怖い」と同型。

俵談も笑話化すること、すでに隠簀笠などに例が見られる。この話は殊に言葉の葛藤である。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 六三・一五六

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 一五五

「田之清の頓智」

タノキヨ、この地ではウ列はオ列に變り易いが、タノキユウより

この方が却つて自然に聞える。これももとか。

なほ同書 二〇五 のは何が怖いの間答より輩の化物を退治する話がある。

山梨縣 西八代郡

續甲斐昔話集 一一五・一二〇

「孝行者と蟒」

岐阜縣 郡上郡

昔研 二ノ二六七

「たのきゆう」

岐阜縣 吉城郡

ひだびと 四ノ五六四

「金と吸殻」

岐阜縣 吉城郡

平湯峠の久手に久作といふ炭焼男、男の人が來て煙草の吸殻が怖いといふので蛇と覺る。

これには田野の狸の事無し。一度有つたがこぼれ落ちたか。

この蛇が狐になつてゐる例。(昔研二ノ四四七) 青森縣八戸

山口縣

周防大島昔話集

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 一三七

熊本縣

上益城郡誌

役者となつた小學生徒、田野久と名乗つて丹波大江山にてお化と問答する。お化けは煙草がきらひ。

長崎縣

島原昔話集 九六

「田野久と大蛇」

一番普通の形。

長崎縣

壹岐島昔話集 七九

「田野久」

○参考

民俗怪異篇 一九四

賢い淵(水蜘蛛話)

昔山中の或沼で夏の頃男が釣をして居た。珍らしくその日は澤山釣れて僅かな間に魚籠一杯になつた。暑い日だったので男は水中に足を浸して居たが、何處からか一匹の水蜘蛛が水の上を走つて來てその足の拇指に糸を懸けて行つた。さうして間もなく又來て同じ所に糸を巻きつけて行くので、不思議に思つてそつと指からはづして傍の大きな楊の木に巻きつけて置いた。するとやがて沼の底で、大勢を呼び集める聲がしたので驚いてみると、魚籠の魚は一度に皆とび出して行つてしまつた。すると沼の中からえんやらさと掛聲がして、その蜘蛛の糸を引張りはじめたと思ふと、見てゐる前で太い株根つ子が根元から折れてしまつた。その後誰ひとりこの沼に釣りに行く者はないさうである。

智慧のはたらき

——福島縣伊達郡——

この話には傳説として傳へられてゐる例もある。もとは退治譚であつたらう。

青森縣 八戸市

昔研 二ノ四四八

水蜘蛛話の二、ここでは水蜘蛛退治の傳説として傳はつて居る。柳の木の根株に美しい衣をかけておいて怪物を欺くこと。

此方が今ある普通のものより昔話らしく感ぜられる。

岩手縣

九戸郡誌 四六八

山形村川井の藤平淵の傳説。昔藤平といふ者が釣をしてゐると、淵の中より掛聲聞えて、切株を引込みて笑聲あり。

岩手縣

遠野物語 二七五

小島瀬川の蜘蛛の集、顔にかゝるを木の切株にかけて置くことや根株が水に引込まれる。魚と思つたのも柳の葉であつた。

仙臺市

昔研 二ノ四四八

「水蜘蛛話」の一

高木敏雄氏傳説集 一二四

最後に水中に聲あり。賢いと言つたといふ。

福島縣 伊達郡

日本昔話集 上ノ四七

「水蜘蛛」〔例出〕

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 一二三

「蜘蛛とやまめ釣り」

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 一二三

「蜘蛛とやまめ釣り」

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 一二三

山梨縣 西八代郡

織甲斐昔話集 一二四

下九一色の蜘蛛淵の傳説。淵の中で「ヨイショ」といふ掛聲。

愛知縣 葉栗郡

愛知縣傳説集 二七

東淺井の池。大蛇、蜘蛛に化けて糸をかける話。又、鼈に化けて來て勇力ある男に片耳をとられ、片耳の大蛇となつて住む。

鳥取縣

因伯民談 一ノ一八九

「彌六淵」

傳説として語られる。水中から「ヤリコエカ」といふ。「エエッ」と云つたら引込んで行くと云ふ。

彌六を人の名としたは後の變更。

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 六四

水蜘蛛の怪に遇ふのが二人になつてゐる。

熊本縣 菊池郡

高木敏雄氏傳説集 一二五

「勢返し」の瀧」「おとろしが瀧」

○参考

×愛媛縣北宇和郡明治村目黒 高木敏雄氏傳説集

ぬた待ちの狩人が「かんたるみみず」「宿もり(がま)」「鹿」が順に強者に食はれるのを見て、狩を止めて歸らうとする傍の樹上から、「獵師いゝ思案ぢやつた」と山爺が云ふ。

支那よりの輸入話。説教に使はれたが、モラルのみかはる。

×新潟縣南魚沼郡 越の風車 後ノ三(越佐叢書六ノ一〇九)
足の親指に「ヤジ」をかける。これを柳の木にうつしておけば根こぎにされること。

蛸の足の八本目

昔婆が海邊で洗物をして居ると、すぐその前に大きな蛸があらはれて、これを切れと云はぬばかりに一本の大足をさし出した。婆は早速その足を切取つて歸り喜んで食べた。翌日も又洗物をして居ると昨日の蛸が足を一本切り取らせかうして七日間續いたが八日目のことである。婆さんは今日こそ、頭も一緒に取つてやうと思つて出かけて行くと、蛸はいつもの通り残つてゐる一本の足を出して待つて居た。さうして婆さんがその足を切取らうとすると、急にその蛸がをどりかゝつて來て、殘りの一本の足を婆さんの首に巻つけて海の底に引っぱつて行つた。

——長崎縣南高來郡——

寓話の形になつてゐるが、もとは怪談であらう。

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 二五七

「蛸と漁師」

三本目まで切取り四本目でまき込まれる。

×周防大島

家室西方村新宮の沖の基平岩では老翁といひ、日良居村普崎では老婆といふが、共に二本づゝ蛸の足を切るとのみあつて八本目とは云はず。

大木の秘密

昔殿様が御殿を建て、その天井板はどうでも桶で張れと云ひつけられた。大きい桶が無いから家來を四方八方へやつて探させる。或村のお宮に一本の大木がある事が分つたので、すぐ何人もの桶に云ひつけて伐らせようとした。

柚達はその木の所へ行つてみると、十抱へも二十抱へもあるやうな大木で、皆して伐つても斧がはね返るばかりで仕事ははかどらぬ。親方は思案に餘つて考へ込んで居る中に居睡りをした。すると子供の様に小さい人間が大勢出て來て話をしてゐる。この木を伐るにはたゞでは伐れるものではない。アラメを釜で煎じてその湯を木の根へかければ伐れるが、その外の事では決して伐れるものではない。人間は黒鹿でそんな事を知らないからかしい、と話し合つた。

親方は眼がさめると早速にアラメを煎じてその湯を桶の根にかけた。すると一夜に蟻が澤山群がつて桶の根を食ひ、木の中を空

こんな山村まで行はれてゐるのは不思議である。

愛知縣 知多郡

愛知縣傳説集 九

オリン島の傳説として。

オリンといふ老女、八日目に章魚に引込まれる。

志摩

國民童話 三八

「狼と蛸」

狼が先に六本食ひ、後の二本を狼にやると云つて、欺き寄せて引込む。

福岡縣 糸島郡

筑前傳説集 四〇

長崎縣 南高來郡

島原民話集 二六

「八本目の蛸の足」〔例出〕

同縣

五島民俗圖誌 二三八

「親の仇討」

これは變型である。

○参考

×河内の俗信(口承文學 一一)百日咳の時蛸の足七本の繪を畫き、籠に貼り、治れば八本にして流れのよい川に流すといふ。

×はなし飼 (寛政小咄)

猫が橋の下の蛸の足七本までを食ふ。「その手は食はぬ」の落語である。

洞にしてしまった。そこで杣が伐ると造作もなく伐れて早速殿様に差上げ澤山の褒美を賜はつた。

——山梨縣西八代郡——

岩手縣 上閉伊郡

遠野物語 一三〇

栗林村大田一ノ權現の大杉、夢に「セノ木」が来て焼伐りにせよと教へた。

〃 雫石

旅傳 三ノ五

木屑の引つく話に千引傳説を伴ふ。

秋田縣 仙北郡

角館民俗資料 三二八

木の争ひから鹽水をきり口にかけると、こつばがはね歸らぬことを立聴く、鳥や木の言葉を解する幸運な男、長者の病を治して出世する。

長野縣

北安曇郷土誌稿 二ノ六八・七二

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 二四四

「楠を伐る話」〔例出〕

丹波

高木敏雄氏傳説集 四七

島根縣 能美郡

島根縣口碑傳説集 二一

福岡縣 三池郡

諸國物語 八五

葛の精に夢に教へられ、葛を切ると大木が倒れる。

大分縣

豊後傳説集 一一七・三三

〇参考

×矢之助杉の傳説 南紀土俗資料一九

×二郡見聞私記卷三(南部叢書 九ノ一八七)に木屑が引つく話。

木片を焼き、切口に鹽を吹かけよとタラの木の告口。昔話風なり。

×今昔物語 近江の話。

さどりのわつば (又山姥問答ともいふ)

早く心學の資料となつてゐるが、もとは是も昔話であらう。

昔男があつた。山奥へ炭焼きに行つて、薪を集めて来て炭を焼いて居た。親爺は深い山中に一人で居ることが薄氣味悪くなつて来て、「恐いもんが出なけりやよいが」と思つた。すると何處からか「恐いもんが出なけりやよいが」といふ聲がして天狗が出て来た。親爺は恐くて「どうやつて逃げたらいいか」と思つてると天狗は又「どうやつて逃げたらいいか」といつて親爺の思つてゐることを皆云ひあてる。それで親爺はもうぼんやりしてしまつた。其時親爺の持つてゐた牛の鼻づる木が弾けて火をとばして天狗にかゝつた。天狗は「人間とは思はぬことをするものだ」と

言ひ残して向ふへ行つてしまつた。

——兵庫縣城崎郡三椒村——

岩手縣 岩手郡

聴耳草紙 一〇三

「箕輪曲げ」

小赤澤の彦太郎といふものゝ話になつてゐる。これでは山姥が輪にはぢかれて死ぬと云つてゐる。

岩手縣

第一昔話號 三五

「山婆と桶屋」

箕の曲輪竹が火にあぶれすぎて火を弾く。だから人間は油斷が出來ないと。これは女性の例。

岩手縣

九戸郡誌 四五三

「ドテ」といふ淮鳥の傳説となつてゐる。上半は鼻で、下半は人間の形。若者の前に來て心中思ふ事を言ひあてる。賽錢箱がいつぱいになつてゐるので驚いてとび去る。

結末が變つてゐて意味がとり難い。

秋田縣 仙北郡

妖怪は貉。火に當つて大擧丸を出す。がんぢきをつくる手を不意に放すと弾かれて死ぬ。

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 一三五

「炭焼と天狗」

智慧のはたらき

長野縣 北安曇郡

小谷口碑集 一四七

〃

北安曇郡郷土誌稿 一ノ八九

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 一九九

「おもひの覽物」

怪物はおもひといふもの。

山梨縣

續甲斐昔話集 二四二

「さどりの化物」

炭焼とさどりといふ怪物と。おもふことよりもおもはぬ事の方が怖い。

岐阜縣 郡上郡

昔研 二ノ二六六

「山の神が來た話」

兵庫縣 城崎郡三椒村

昔研 二ノ四二二

「天狗と炭焼き」〔例出〕

これは古い形と思はれる。

こだま。山彦の經驗がもとなることがわかる。思案と獨り言をひとつに見た習はしから。

熊本縣

天草島民俗誌 一七一

「獵師と山わろ」

人物はすべて桶屋・炭焼・わけ師・箕作り・がは師。

〇参考

越後南魚沼郡三國村二居
越の風車 越佐叢書 六ノ五二
「サトリ」といふ山の獣の話。

姥 棄 山

これは古い輸入らしい。この話に二通りありて、

第一類は、棄老國話。隠し養ふ親の智慧で難題を解き幸福となる。難題は「灰繩千束」「三歳馬の親子」「蛇の雌雄」「蟻通し」「木の木末」等。

第二類は、山へ親を捨てに行つた子が、親の愛に感動して志を転す更級式ともいへるもの。

親を捨てる動機にも、國の掟・殿の命令といふものと、女房の策略となすものと二種ある。往々傳説となつてゐるが、東北や南島には鄰の爺型になつてゐるものがある故、もとは昔話であつたことが判る。

第一類、第二類はよく混合折衷して語られる。

青森縣 八戸

昔研 二ノ四四九

「灰繩千尋」「同」「牛と舟」「姥棄山型」の四話あり。はじめの三話は第一類、最後のは第二類で、これは妻の讒訴によつて山に捨

てられた婆が神から大槌小槌を授けられて幸福に暮す。それを羨んだ妻は婆の通りに山へ捨て、眞似し損なつて焼け死ぬといふ話。

青森縣

津輕昔話集 三九

五十歳になつた親を命令により捨てに行くが、親が芥子種を粟にこぼすのを見て感動し連れ歸り匿す。

津輕口碑集 三

兄弟で捨てに行くが連れかへる。奥南新報昭和十年八月十三日

津輕昔話集(川合氏)

岩手縣 上閉伊郡

老嫗夜譚 九六

我子の「杵を持つて歸らう」の言葉から、親を捨てるのを思ひかへす。

岩手縣 上閉伊郡

聽耳草紙 六〇

「打出小槌」嫁の作略で山に乗てられた婆。鬼の子から打出小槌を取り女殿様となる。嫁はその眞似をして焼死する。

岩手縣

上閉伊郡昔話集 一六七

「老人棄場」 第一類。

岩手縣

「翁捨山」 第一、第二の折衷。

紫波郡昔話集 八九

福島縣 石城郡

磐城昔話集 六八・二五八

新潟縣 南魚沼郡六日市町

昔研 一ノ三一四

「姥捨山の話」 第一類。

南蒲原郡

加無波良夜譚 一五五・一八六

第二類と「難題解」と結合したもの。

南蒲原郡昔話集 一二〇

新潟縣

佐渡昔話集 九六

石川縣

江沼郡昔話集 七〇

「年寄の手柄」

長野縣 小縣郡

昔研 一ノ三三六

「婆捨の話」 殿様のおふれに背いて山中に隠し、母の枝折によつて道に迷はず歸へる。殿様これを聞き感心して改心。難題のことなし。

第一類と第二類の結び目。

長野縣 伊那郡

むかし話 七八

岐阜縣 郡上郡

昔研 二ノ二六七

第一類、第二類の折衷。

山梨縣 西八代郡

甲斐昔話集 九六

「親捨山」第一、第二の折衷。

岩手縣 鹿角郡

甲斐昔話集 九六

智慧のはたらき

「親棄譚」第二類。

静岡縣 土肥

郷土研究 三ノ二四三

六十二歳で親を捨てたといふ傳説。 第二類。

兵庫縣 永上郡

旅傳 一〇ノ七ノ五二

島根縣 隠岐黒木村

昔研 一ノ四一〇

「老人を捨てる話」 第一類。

岡山市外

第二昔話號 七九

「老人の智慧」 第一類。

岡山縣

岡山文化資料 二ノ六ノ三一

廣島縣

藝備「昔話の研究」 九八・一一五

「爺捨山」

安藝國昔話集 一二三

香川縣 志々島

昔研 二ノ二〇五

長崎縣

壹岐島昔話集 一一〇

孝子の老父を捨てかねる話。小縣郡の「婆捨の話」と相似。

熊本縣 天草

昔研 一ノ五二四

第一、第二の折衷。昔研 五二五頁の類話は第二類。

「親を捨てる籠」 第二類。

郷土研究 五ノ一七七

鹿兒島縣

甌島昔話集 一〇六

「親捨山」第一、第二の折衷。

鹿兒島縣

喜界島昔話集 一三〇

「鼠になつた嫁」

捨てられた母、山神に祈つて地を叩けば何でも出て幸となる。嫁は鼠となる。

沖繩縣

南島説話 一一六

老人が六十一になると生埋めにしてゐたが、難題をといて貰つてからは大切にするやうになつた。

○参考

×朝鮮 朝鮮民譚集 三九

同書 附四 に雜寶藏經一 及び二に類話すること見ゆ。

これは翻譯。

×大和物語 下

×俊頼無名抄

×今昔物語三〇卷 下ノ五七五

×續歌林良材集 上ノ二七一

×扶桑故事要 三〇四(廣文庫)

×黒甜鎖語 二卷九ノウ

×雜談集四 昔大國の王。政をつとむるに四十になれば親を埋めて殺しけり。棄老國、後には養老國の事也——と、のみありて

説話なし。

×クラウストン 下ノ三七三 「不孝の子」

灰繩千束

このテーマの「難題解」に屬するものは主に東北にあり。他の地方では「姥捨山」に伴ふ。

女房の智慧

ある商人が江戸へ木花(染料にする花)を賣りに出る道中の旅籠屋で、宿の女將とその家の雞の掛圖が罫を作る作らぬで賭をして負けて木花を皆とられて歸つた。嬢は口惜しがあつて仇討に倍の木花を持つて出掛け、その旅籠屋で同じ賭をし、夜の間に掛圖の雞の喉を針で縫つておいたので雞は鳴かず、嬢は木花の代金を取つて歸つた。

——新潟縣南蒲原郡——

これは二度目の取返しを中心になるので、復讐者が妻でない場合もある。

岩手縣 神貫郡

昔研 一ノ三七

「餅食ひ」息子の復仇。一斗の餅食ふ賭。

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 四八

「鶏の掛圖」〔例出〕

山梨縣 西入代郡

甲斐昔話集 一二六

「お茶賣りと木刺爺」

廣島縣

安藝國昔話集 一九三

「雞の掛圖」例話との關係面白し。

鹿兒島縣

甌島昔話集 一一四

「船荷賭け」

鹿兒島縣 大島郡喜界島

島 二ノ四三一

喜界島昔話集 一四九

「兄弟」 兄弟仲悪く、弟は近所の男と兄弟のやうに交際してゐた。或日弟は山で大猪を射止め近所の男に「今日は山で猪と間違へて人間を射ち殺したが、人に知れぬやう片付けたいから加勢してくれ」と頼む。かねては兄弟のやうでもそこは他人で、かゝり合ひを恐れてついて来ぬ。兄は驚いて直ぐに山へ行く。真相を知つた近所の男は恥ぢて顔を出さなくなり、兄弟は仲直りして何時までもむつまじく暮した。

兄弟話の形を借りてゐる。

輸入ではなささうだが、改作は確か。

餅を食つて屍を食ふと見せかけた花嫁の話は後の作りものか、東北にもある。(島 二ノ四七〇)

智慧のはたらき

盗人女房

妻は盗大將で、毎日夫に向つて盗んで来い／＼と言ふ。夫が牛を盗んで来れば、角に油を塗つて焼いて角の形を變へるので役人にも掴まらぬ。餘り盗め／＼といふので夫が困らしてやらうと思つて、墓場から死體を掘出して持つて歸つた。妻は死體を半櫃に入れて縁側に置いてから、他の二人組の盗人の家に遊びに行つて暫くして「おや大變な物忘れをした。縁側に寶物の半櫃を出し忘れたから早く行つて始末せねばならぬ」と言つて其家を出ると、寶物と聞いた二人の盗人は、先廻りして行つて一人が半櫃をかたげて逃出した。やがて後の男が中身に氣がついて「人だ／＼」と叫ぶと、先の男は「人だから逃げるのだ」——と一生懸命走つた。

——鹿兒島縣喜界島——

分別八十八などの死屍處分の話もこれから出たかと思はれる。又酒屋をおどした話なども。

青森縣 八戸

昔研 二ノ四五一

嫁の母に使はれて三度まで盗みをする。最後に盗んで来た女の死屍は、化粧をして酒屋の戸口に立てかけ、これを倒した酒屋をゆ

アサヒ新聞

一六七

する。

岩手縣 氣仙郡

聽耳草紙 一三三

「悪い寡婦」 怠者が後家に命ぜられて女の屍を拾つて来て、これに酒をゆするは八戸に同じ。

「夜稼ぐ聲」これは舅の悪智慧、殿様を欺く。

新潟縣 南蒲原郡

加無波良夜譚 二〇〇

「娘の盗人」 男を使つて盗みをさせる女盗人。

長野縣

小縣郡民譚集 一六三

爺が山で水を飲まうとして見つけた娘の死屍を、婆の策略により金にする。

鹿兒島縣

島 二ノ四二八

「人だんだ」〔例出〕

盜賊の賭

兄弟話に屬するもの多し。「五郎の欠椀」参照のこと。不道德な要素のものは古からう。

長崎縣

島原半島昔話集 一一六

「千両箱泥棒」 黍餅を女中の尻に云々といふ笑話を伴ふ。

寄森縣 下北郡栗山

奥南新報 一五ノ一ノ一三

「大袋小袋」 小袋は婆を殺され、それを利用して酒屋で金を出す。結末は「依薬師」の形。これには明かに馬の皮が物を言ふと出てる。

新潟縣南蒲原郡

才智に富む智慧有殿が、頓死した村の旦那様の死體の始末の相談に乗つて、先づ若い衆が博奕をしてゐる處へ持つて行つて立掛けると、若者は誰か覗きに來たと思つて、棒ではたきつけたので死體が倒れた。「さあ村の旦那様を殺した」と驚いて又智慧有殿に相談する。今度は旦那様の戸口で「今歸つた、開けてくれ」と言つた。夜遅いので嬢様が怒るので「それでは井戸の中へ飛込んで死んでしまふ」と言ふや、死體を井戸へ投込んで逃げて來る。嬢様は旦那が身技したと思ひ、是亦智慧有殿に相談する。今度は旦那をせいろで蒸してから「旦那が熱病だ」と言つて醫者を呼ばせる。飛んで來た醫者は眼を見て「お氣の毒ですがもう早や息が切れました」と言つたので葬禮を出すことが出來た。智慧有殿は皆から澤山お禮金を貰つてえらい儲けをしたといふ。

さう偽つたのではないのは「鳥吞」に近い。

岩手縣

黄金の馬 一〇〇

上閉伊郡

老媽夜譚 二三三

「馬喰八十八」

聽耳草紙 一一九

秋田縣 角館

第二昔話號 八四

「五人太郎作」

加無波良夜譚 一四一

新潟縣 南蒲原郡

〔例出〕 分別八十八と半分以上同じ。

廣島縣 高田郡

「分別儀平」

鹿兒島縣

甌島昔話集 一八三

「分別孫左衛門」

○参考

×朝鮮民譚集 三二四 間男をした妻を懲らす話。

×ユエ一〇 昔研 二ノ二五七に譚あり。

依薬師

嘘つき小僧といふ親不孝者が父と山へ木樵りにゆき、家へ歸りたいので「腹が痛い」と泣出す。「それでは家に歸つて寝て

智慧のはたらき

岩手縣

「馬喰八十八」智慧有殿・依薬師其他の複合。

「阿野様」

紫波郡昔話集 六五

栃木縣芳賀郡逆川村

聽耳草紙 一一九

秋田縣 仙北郡

昔研 一ノ五〇五

「殿様と下僕」

「桃賣り殿様」と近くなる。

福島縣 石城郡

磐城昔話集 六九

栃木縣 芳賀郡

第二昔話號 八五

「親不孝息子の話」〔例出〕

茂木昔話集 一八

長野縣

小縣郡民譚集 二三九

「倭薬師は目の養生——と唱へて目の悪い牛引をだます。」

北安曇郡

小谷口碑集 一四八

廣島縣 比婆郡

藝備「昔話の研究」一一七・一三五

これは兄弟話である。

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 一二五

福岡縣 糸島郡

福岡縣昔話集 九九番

福岡又兵衛にもこの話がある。

熊本縣 玉名郡

昔研 一ノ八二

「錢垂れ馬」の後段。

鹿児島縣

鹿児島昔話集 一八八

「オーバ話」の後段。

奄美大島

昔研 二ノ二三八

兄弟話の一部分。

よい弟が兄を殺すのは少し變だ。後に付いたものと思はれる。

○参考

×朝鮮の物語集(高橋孝氏)「片身奴」

×國外類型資料 昔研 一ノ二九四

グリムの「かぶら」「小百姓」

錢垂れ馬

ある馬喰が牛を連れて来て、これこの通り牛が金の糞をしたから買はぬかと勧める。是はきつと儲かると思つて、すぐに高い値で買取つたが、幾日経つても金の糞をせぬので、馬喰に食つてかかると「金を食べさせぬと金の糞はせぬ」と言つた。

——紀州熊野——

黄金小犬と二人兄弟話との笑話化。もとは兄弟話で、後には欺かれるのが長者、話の前半を誇張したもの。

岩手縣

江刺郡昔話 七

「或兄弟の話」金ひり馬で兄をだました後、これはひとりで炊ける岡釜だと稱してたゞの釜や、怪我人をなほすと稱して古瓢箪を賣付ける。

累進のおもしろさから次々に新趣向發明せらる。

岩手縣 上閉伊郡

聴耳草紙 四八七

「傘の繪」繪に畫いた女が雨の日には持つてゐる傘を擴げるとだまして軸物を高く賣付け、後に詰られて「飯を食はせたか」と問ひかへし、いゝやと答へると「それでは腹が空いて力が無くなつたのだ」。

福島縣

磐城昔話集 一七五

長野縣 南安曇郡一日市

有賀氏

兄弟話となつてゐる。

和歌山縣 熊野

第一昔話號 六五

「黄金の牛」〔例出〕

島根縣

旅傳 三ノ九ノ一八
島根口碑傳説集 三七

「出雲仁右衛門」

山口縣 周防大島

金の卵を生む雞。焼かずの釜。

つなぎ目甚だ拙し。

徳島縣

阿波祖谷山昔話集 一〇六

福岡縣 糸島郡

福岡縣昔話集 九八番

「錢食はせにや錢垂れん。」

智慧のはたらき

長崎縣

島原半島昔話集 一〇九

「金を屁る馬」火吹竹で婆を生返らせたり、馬に錢糞をたれさせたりして金持の弟を欺く。

大分縣

旅傳 一ノ五ノ一八

「吉右話」慾深の叔父をだます。

熊本縣 玉名郡

昔研 一ノ八二

○参考

×醒睡笑 一三 且九郎・田九郎。

×東海道名所記 三上山の條に秀郷のことあり。

×ユエ九 獨りで煮え釜・金ひり馬。

金の茄子

王様があつて一歳になる男の子があつた。或日その母が大勢の中で屁を放つたので、王様は大變怒つて母子をウツワ舟にのせて流した。男の子は大きくなつて此事を知り、十三歳の時に母に暇を買つてもとの島へ渡つた。王様の門前で毎日「金のなる茄子の種は要らぬか」と呼ぶので、王様が本當かとたづねると「如何にも金になるが、屁を放らぬ人が蒔かねばならぬ」と答へ「屁を放らぬ人間があるか」と言はれて「それなら何故母はとがめられま